

アクセル・ワールド7

—災禍の鎧—

黒雪姫率いる《ネガ・ネビュラス》は、シルバー・クロウを《浄化》するため、《オーダー・メイデン》救出作戦を発動した。

難度の高いミッションの中、決死の覚悟でシルバー・クロウは《オーダー・メイデン》と接触するも、《帝城》を守護する《エネミー・スズク》の火炎プレスにより、禁断の不可侵領域——《帝城》内部に突入してしまう。絶体絶命の危機に陥ったハルユキだが、彼はそこで不思議な《夢》を見る。《クロム・ファルコン》と《サフラン・プロクサム》。二人のアバターが望み、砕け散ってしまった《災禍》の物語を——。

アクセル・ワールド

川原礫

イラスト：はるなつ

07

災禍の鎧

accel world 07

か-16-13



アクセル・ワールド7

災禍の鎧

川原礫

電撃文庫

⑤50

電撃文庫

アクセル・ワールド

災禍の鎧

川原 礫
イラスト/HIMA
デザイン/ビィビィ





9784048702768



1920193005509

ISBN978-4-04-870276-8
C0193 ¥550E



発行 ● アスキー・メディアワークス

定価: 本巻 550 円

※表紙裏表紙に貼付の予定です

かわはら めろ
川原 礫

今年ももう2月ですが……。こりゃ2011年もあつという間だな! 2000年代ももう11年ですが……。こりゃ21世紀もあつという間だな! あつという間ですが今年もよろしくお願いします!

【電撃文庫作品】

アクセル・ワールド1 一閃の姫姫姫
アクセル・ワールド2 紅の姫姫姫
アクセル・ワールド3 夕陽の姫姫姫
アクセル・ワールド4 蒼空への姫姫姫
アクセル・ワールド5 星影の姫姫姫
アクセル・ワールド6 赤大の姫姫姫
アクセル・ワールド7 炎姫の姫姫姫
ソードアート・オンライン1 アインラッド
ソードアート・オンライン2 アインラッド
ソードアート・オンライン3 フェアリィ・ダンス
ソードアート・オンライン4 フェアリィ・ダンス
ソードアート・オンライン5 ファンタム・パレット
ソードアート・オンライン6 ファンタム・パレット

イラスト:EHMA

1973年生まれ。神崎はシリーズが初のイラストレーター。『電撃魔王』小荷子への依頼を見た文庫編集者が、今回の挿絵依頼をオファーしたことがきっかけ。本業仕事の合間を縫って、ブログやSNSサイトなどでイラストを発表している。

シノブ ムスビ ユウイ
四埜宮謡

旧作『ネガ・ネビュラス』所属の
デュエルアバター
《アーダー・メイデン》を繰る
小学四年生

「クーさん、言つたはずなのです。負けて、転んで、失敗しても、
それでも諦めずに前に進むことが本当の強さだと」





「……うん、きつと、どうにかしてみせる。生きて帰るまで……」
現実世界で待ってる、みんなのところに」

ハルユキ

《風雲の龍》によって
閉塞されてしまったアバター
《ルバー・クロウ》を探る
半空内格差最底辺の少年



「非礼は謝罪します。しかし、どうか黙っていてください。
私にあなたたちと戦う意図は一切ありません」

トリリード・ テトラオキサイド

《帝城》内部で出会った
謎の《特務》型アバター



「ぼくはずっと、きみが羨ましかった。」

糸子にも純粋な願いを、希望を體現したその姿、
その力で、不可能を覆していくきみが……」



タクム

《ネガ・ネピュラス》所属の
デュエルズバター
《シアン・パイル》を極める
ハルユキの親友

「タク、オレはずっと、ずっと昔から
お前みたいになりたかった。
だから……それを伝えるために、
オレはいま、お前と戦う」



アクセル・ワールド 07

災禍の鎧

川原 礫
イラスト/HIMA
デザイン/ビィビィ



■高学年(バコウキとよ)＝高学年の部を指し、高学年の成績。その成績は星に表れている。学年アバターは作中プログラムの開発者で、デュエルアバターは星の主(プログラクローネス)に属する。

■ハルキキ＝高学年(アリター・ハルキキ)、高学年二年。いじめられてより強腕。ゲームは得意だが、成績は、学年アバターは「ビシクのアタリ」デュエルアバターは「シキキ・アタリ」に属する。

■デュー＝高学年(高学年・デュー)、ハルキキの成績。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュー」に属する。

■タカム＝高学年(高学年・タカム)、ハルキキ、デューと高学年からの知り合い。成績は星に、デュエルアバターは「高学年・タカム」に属する。

■デュー＝高学年(高学年・デュー)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュー」に属する。

■高学年(高学年・高学年)＝高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・高学年」に属する。

■デュエルアバター＝高学年(高学年・デュエルアバター)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュエルアバター」に属する。

■デュエルアバター＝高学年(高学年・デュエルアバター)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュエルアバター」に属する。

■デュエルアバター＝高学年(高学年・デュエルアバター)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュエルアバター」に属する。

■デュエルアバター＝高学年(高学年・デュエルアバター)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュエルアバター」に属する。

■デュエルアバター＝高学年(高学年・デュエルアバター)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュエルアバター」に属する。

■デュエルアバター＝高学年(高学年・デュエルアバター)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュエルアバター」に属する。

■デュエルアバター＝高学年(高学年・デュエルアバター)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュエルアバター」に属する。

■デュエルアバター＝高学年(高学年・デュエルアバター)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュエルアバター」に属する。

■デュエルアバター＝高学年(高学年・デュエルアバター)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュエルアバター」に属する。

■デュエルアバター＝高学年(高学年・デュエルアバター)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュエルアバター」に属する。

■デュエルアバター＝高学年(高学年・デュエルアバター)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュエルアバター」に属する。

■デュエルアバター＝高学年(高学年・デュエルアバター)、高学年二年。成績は星に表れている。学年アバターは「高学年の部」デュエルアバターは「高学年・デュエルアバター」に属する。

accel World 07

accel World 07

accel World 07

accel World 07

暗転。

スポットライト。

白い光の輪の中に、艶のない朱色に塗られた巨大な円柱が出現する。湾曲したその側面に背
中を預ける、小さな人影。生身の人間ではない。全身を濃い銀色の金属装甲で覆い、頭もまた
同色のヘルメットに包まれている。

続けて、弱い照明が周囲を照らす。夜、無数のかがり火が音もなく揺れる。円柱は最初の一
つだけではなく、同じものが無数に連なっているようだ。地面は純白の玉砂利。ずっと遠景に、
巨大な宮殿めいたシルニットが浮かぶ。銀色のヘルメットが動き、彼方の宮殿を向く。

……（絶対不可得）じゃなかったのかよ、まったく。

完全に自業自得な状況だと解（わか）っていて、頭の中でついそんなふうに愚痴（ぐち）ってしまふ。

残念ながら、声には出せない。それどころか、足音ひとつ立てる気にもなれない。なぜなら、
ほんのわずかな音を発した瞬間、城郭内のあちこちを行き交っている學（まな）びしげな武者型エネ
ミーが大挙して襲（せ）いかかってくるかもしれないからだ。

武者一体のサイズは、せいぜい全高三メートル程度。外界に検出する巨獣級ならその五倍に達する程も珍しくない。しかし、長い同廊や城壁の上を、三、四休ずつの集団を作ってガシャリガシャリと闊歩している武者たちは、巨獣どころか神獣級……いや、ヘタをすると、この城の門を守護するあの《四神》にすら迫ろうかというブレッツシャーを濃密に放散している。

もちろん、城——《無制限中立フィールド》の中央に屹立する荘嚴なる《帝城》の内苑にこうして侵入できているのは、四神の守りを破ったからに他ならない。しかし、だからといって、どれか一体でも倒せたわけではまったくない。隙を突いて忍び込んだ、あるいは、ものの弾みでうっかり入り込んでしまった、が法規としては止しい。

……せめて、脱出用のポータルくらい用意しといてくれないのに。

もう一度、無音の繰り目で、胸中に満ちようとする恐怖と焦燥を押しつける。

城内のかがり火を反射する金属アバターの全身は完全に冷え切り、やや黒みがかった銀色の装甲の奥では心臓がばくばく鳴り響いている。まさに絶体絶命、《BBブレイヤー》となつて以来最大の危機なのは間違いない。

しかし、同時に、少しばかりの興奮も確かに存在する。

加速世界が生まれてから——つまり、製作者不明のフルダイブ型対戦格闘ゲーム・アプリケーション《ブレイン・バースト》が東京都心在住の小学一年生約百名に配布されてから、はや十ヶ月、この間、レベル4に到達し、無制限フィールドへのダイブ権を得たブレイヤーの多

くが、世界の中央に熱庫する巨城へと挑んだ。現実世界の皇居に相当するロケーションといい、周囲の断崖に設定された絶対重力といい、どう考えてもゲームの最終目標——子供っぽい言い方をすれば（ラスボスの城）だったからだ。

しかし、あらゆるバーストリンカーの挑戦を、あの恐るべき超級エネミー（四神）はまさに鼻息一叠で吹き飛ばしてしまった。

北のゲンブ、東のセイリユウ、西のビヤッコ。そして南のスザク。彼らはそれぞれ五段階のHPゲージを持つ独立したエネミーでありながら、相互に支援・回復する能力を持っている。具体的には、具戦中の四神は、他の門で戦闘中の四神に向かってパフやらヒールを恐ろしい勢いで飛ばしてくるのだ。つまり、戦力を集中しての各個撃破は不可能。プレイヤー側も四隊に分かれ、四神全てを同時に攻撃せねばならない。現状でバーストリンカーはまだ総数五百に達さず、しかも無数の小レキオンを作って角突き合わせているとなれば、そんな大規模な作戦行動は不可能だ。中には、小規模部隊で無理矢理ひとつの門に突っ込み、大橋の奥深くで死亡してそのまま（無限エネミーデス）——という言葉ができたのはその後だが——に陥りバーストポイントを全損してしまった例すらある。

そんな状況で、四神を倒したわけではないにせよ、こうして初の密城侵入成功者になったとなれば多少はわくわくしてしまうのも仕方あるまい。

もしかしたら、このまま城の奥深くまで迫り着き、そこで最終フラグ・アイテムなりを手

入れることに成功すれば、ブレイン・バーストを初めてクリアした者として加速世界に永遠に名前が刻まれるかもしれないのだ。

大した能力も持たず、地味なメタルカラーとしていままで特に注目されることもなかった、この――

《クロム・ファルコン》の名が。

単を意味するアバターネームこそちよつと格好いいものの、あるいはそれだけに、クロム・ファルコンの性能および外見は長いこと《名前負け》扱いをされてきた。対戦相手だけではなく、自分自身もそう思っていた。

少しでも猛禽類らしいのは、下端がクチバシ状に鋭く尖ったマスクだけ。それとて、顔部分はアイレンズのないうつろりとした銀色なので、下っ端戦闘員っぽい印象は拭えない。体はひょろりと細く、手足に武器は一切なし。当然、背中にも翼らしきものは皆無。

攻撃力と言えばパンチとキック、そして小柄ゆえのスピードとボダイの硬さだけというこのデュエルアバターを「素敵」だと言ってくれるのは、タッグパートナーの《チフラン・ブロッサム》だけだ。その言葉を疑いはしないが、せめてもう少し、彼女の能力につり合う何かが欲しい。

ブロッサムは、その名の通り、《花を咲かせる》力を持っている。右手の小さなスティック

から数種類のタネを発射して敵——あるいは味方アバターに叩め込み、一定時間経過後に咲いた花は、体力ゲージや必殺技ゲージを削ったり脚を止めたり、逆に支援効果をかけたり障害効果を消したりと多彩な効果を發揮する。口舌がない者たちは（寄生属性攻撃）などと嫌な言い方をするが、關係系カラーでもあそこまで洗練性のあるデュエルアバターはなかない。

もちろん、それほど力があれば当然犠牲になる部分も出てくるわけで、プロッサムの場合には防衛力がかなり心許ない。その弱点を補うために硬いファルコンとタッグを組んでいる——のだが、一緒に戦うようになってもう半年近く経つのに、いまだ不安が消えないのだ。もし、より硬い奴がプロッサムにバートナーの誘いを掛けたらどうなってしまうのか、という不安が、いわゆる（ノーマルカラーサータル）とは別系統の（メタルカラーチャート）では、番左にプラチナやゴールドといった貴金属、右にスチールやアイアンの中金属が手に入っている。貴金属、と言っても同レベルならポテンシャルは同じで、左側配置なら毒や酸、腐敗といった特殊攻撃に強く、右側にいくほど拳や剣の物理攻撃に強くなる。

（タロム）はほぼ中央にある色だ。耐性はどっちつかずで、単純な装甲の硬さだけなら上をいくメタルカラーは少なからず存在する。それどころか、ノーマルカラーでも防衛に秀でた緑系なら、より上手く盾役がこなせる奴がいておかしくない。

つまり、ただ硬いだけでは、いつプロッサムを奪われるか判らないのだ。

この、胸が詰まるような感情が何なのか、自分でもなかなか把握できない。加藤世帯では、海岸エリアを根城にこれまでどうにか生き延びてきて、この頃は《黒鯨の牢》などという二つ名で呼ばれるようにもなりつつあるが、バーストアウトすればまだたった八歳の小学二年生なのだ。——いや、それもあるいは言い訳か。こと無制限中二フィールドにダイブできるようなってからは、この事実上無限の時間が存在する世界で、主観に於いてはすでに九年近い時を過ごしている。

だから、今はもう、頭のとこまでは理解できている。

先日、ようやくレベル5に上がり、とある必殺技を入手した時にすぐこの《帝城》のことを考えてしまったのも……そのアイデアを実行に移し、幸が不幸が成功して、こうして恐ろしいエネミー群の中で息を殺す羽目になっているのも、全てはサフラン・プロッサムへの恋情および独占欲ゆえのことだ、と。

——そろそろ移動しないと、一定パターンで城内を移動している武者集団の一つが、この隠れ場所に現れる。

朱塗りの柱の隙からマスタの塔を出し、素早く扶視を確認する。

現在地は、直径千五百メートルの真円を描く《帝城》内苑の南エリア、《朱雀門》と城本体の正面入り口を繋ぐ大路の片隅だ。入り口の両脇には、ひととき猛々しい外見の、武者というより鬼神めいたエネミーが控えていてとても突破できそうにない。代わりに、白塗りの壁に

設けられた窓の一つに狙いを定める。正規の通路でない以上、外側からは開けられない可能性が高いが、本物の窓でさえあってくれればきつと侵入できるはずだ。

背後からは、巡回の武者エネミー集団の足音が近づいてくる。大きく息を吸い、右胸を踏み出しながら、小さく――投名発声。

「（フラッシュ・ブリンク）」

最低ボリウム（声）を耳ざとく聞きつけたか、武者たちの歩行が駆け足に変わった。

しかしその時にはもう、黒銀のアバターは柱の壁から完全に姿を消している。青い残像の瞬きだけを残して一時消滅。三十メートルも離れた壁の壁際で音もなく実体化。

これが、クロム・ファルコンのレベル必殺技、《壁際瞬間移動》だ。壁際、なのはあくまで《高速直線移動》の延長線上にある能力だからで、《壁に見えていて》《空間が連続している》《場所には移動できない》。しかし、移動中はアバターは質量ゼロの粒子体へと変じ、物理攻撃や重力攻撃を完全に無効化する。

白塗りの壁に背中をつけた格好で再出現し、凡いた場所に殺到する武者エネミーたちの様子を見守る。自分たちを攻撃化した侵入者を見失い、盛んにあたりを見回しているが、やがて何もかも忘れたかのように元の巡回コースに戻ると、ゆっくりとしたペースで歩き始める。ふう、と安堵のため息。武者エネミーたちは、その戦闘力はともかく、A1の出来は明らかに《四神》に劣る。

張り向き、背後の壁に設けられた大きな窓を見上げる。

ワールド属性が和風の（平安ステージ）だった時から期待していたが、やはり窓は細い朱塗りの棧が縦横に組まれているだけで、ガラスの類は嵌めていなかった。桁目ひとつは三センチ四方はどしかなので、どんなデュエルバタもそのままではこの隙間を抜けることはできないが――。

境界左上の必殺技ゲージをちらりと確認、残り五パーセント。体力ゲージも二十パーセントしか残っていないが、どちらにせよ武者エネミーに太刀を一撃されればフル状態からでも即死確定だ。

慎重に軌道を定め、右足で強く踏み切りざま、ゲージを全て消費して最後の（フラッシュ・ブリンク）。

粒子化したタロム・ファルコンの体は、細い棧の隙間をすり抜け、ついに帝城本体への侵入を果たす。

この技こそが、そもそも（四神）の眼をこまかして絶対不可侵の帝城外壁突破を可能ならしめた手段だった。手順は至ってシンプルだ。事前に必殺技ゲージをフルチャージした状態で、まず四神の守る大橋――ではなく、帝城を取り囲む無限の間を満たした外堀に向かつて、最大距離の（ブリンク）を行う。といってもゲージを全消費してマックス百メートルなので、幅五百メートルの断崖を渡るにはとても足りない。

そのため、最初に軌道をやや上やに設定しておく、断崖の上に出現したとたん、問答無用の超重力がアバターを捕らえ、谷底に引きずり込もうとすると同時に目Pゲージをかりかり減らす。しかし同時に必殺技ゲージも再チャージされるので、ある程度貯まったところで再度斜め上空へ（ブリンク）。あとはその繰り返しで、谷を渡り切る。

——とはいえ、本今のところは、今日は偵察というか実験だけにしておくつもりだったのだ。ブリンク、チャージ、ブリンクのサイクルが可能なことだけ確認したら、あとはそのまま谷底に落下して死亡、断崖の手前で蘇生し、得たデータをもとに計画を再検討、実現可能だと確信できてから、改めて本番に挑む。

そのはずだったのが、こうして最初の一目で無謀な特攻をかましてしまったのは、ひとえに無限の谷に落ちるのが余りにも恐ろしい経験だったからだ。初めの落下で完全に我を忘れ、ひたすら前方へのブリンクを繰り返した結果、気づいたら帝城の外壁に夢中でしがみついていた——というわけだ。

狙いどおりの結果ではあるが、のんきに結果オーライと言ってもいられない。

加減世界が開闢（カクヘン）してからのこの十一ヶ月は、BBブレイヤーとなった子供たち同士の戦いの歴史であると同時に、全ブレイヤーと謎のゲーム開発者とのせめぎ合いの歴史でもある。子供たちはあらゆる情熱を傾けてシステムの穴、つまり（カクヘン）「面白いポイント（ポイント）探し」の方法を探し、見つかるそばから開発者がアップデート・パッチでそれを塞ぐ。ゲーム内でのヘエネミー

地形引っかけ狩り」や、現実世界で外部プログラムを利用した（ツール・チャイニング）など、わずかもインチキの匂いがする種々テクは、他のネットゲームと比べても驚異的なスピードで対策されてたちまち使えなくなつた。その反応の早さから、BBを開発・運営しているのは人間ではなくAIだと主張するプレイヤーも少なくない。

ともかく、正体不明の開発者は、ゲームの裏道抜け道を断固許そうとしない……というより、加速世界で何かを得ようとするプレイヤーには、それに値する代価を厳然と要求してくる。

となれば、絶対不可侵の（帝域）に、本来のルートである四方向ではなくお堀を飛び越えて入り込んでしまったクロム・ファルコンの所有もまた絶対に認めてはくれまい。すぐにパッチが当たり、あの断崖の超重力は、物理・重力攻撃無効の（フラッシュ・ブリンク）をも捕まえるようになるはずだ。いや、もしかしたら、今頃もうすでに――。

だから、これが、最初で最後のチャンスなのだ。

ここで何かを得、あるいは成し遂げて、サフラン・プロッサムのパートナーに相応しいパートナーになる。もう彼女を失うことに怯えずにすむように。彼女が僕を選んだことに満足してくれるように。

そして何より、この世界でも、現実世界と同じく下だけ向いていた僕に声を掛け、手を差し伸べてくれたプロッサムの気持ちに報いるために――。

窓の柵を抜けて入り込んだ先は、きれいに磨かれた板張りの廊下だった。奥の壁は、銅燦

華な鎧鎧に飾られた機、等閑間に黄金の舞台が立ち、オレンジ色の炎を静かに揺らしている。エネミーの妻は——今のところ、なし。

背後の窓を確認すると、下部に小さな掛け金があった。無意味な裝飾オブジェクトではあるまい。解錠し、そつと押してみると、朱塗りの窓全体が音もなく外側に持ち上がる。これで少なくとも、ここに戻ってくれば帝城本殿からは出られるわけだ。

しかし、出たところで脱出用ボータルは存在しない。そもそもここまで来て手ぶらで帰れるわけもない。かくなるうえは、精神力と幸運が持続する限り奥へ奥へと進むだけだ。

銀面の下で息を殺し、細身のアバターを底下の薄闇に溶かすように、慎重に歩きはじめる。

何時間——ことによると何十時間が経過したのだろうか、

小学校から帰宅してすぐ無制限フィールドにダイブしたので、理論的にはこの世界で数日としか数ヶ月を過ごせるくらいの猶予はある。実際、以前プロッサムと一緒に二ヶ月も連続でダイブ、いや《暮らして》しまったこともあるほどだ。

とはいえ、内死よりもいつそう恐ろしさを増した武者やら神官エネミーの探知範囲を避けて前進し続けるのは、想像を絶する難事だった。ファルコンが小型軽量タイプでなければとても不可能だったろう。同時に、この城はどうやら、数十、数百規模の大部隊による攻略を想定されているようだった。通路はやなちと広く、天井も高い。それゆえどうか、周囲するエネミ

一群をかわして進むことができたのだが、そろそろ集中力も限界だ。

大きく深呼吸。冷たい空気で頬をクールダウンし、太い円柱の陰から行く下を探る。

帝城全体の直径が千五百メートル、そして朱雀門から鬼神の守護する正面ゲートまでの距離はおおよそ四百メートルだった。ならば本殿のサイズは、最大でも南北七百メートル程度のはずだ。侵入して以来もう五百メートルは進んだと思われるので、そろそろ本殿の更に中核へと達してもおかしくない。

果たして――。

北へと延びる通路の先に、ひときわ広い空間と、その床面に輝く不思議な光が見えた。

並んで、二つ。水面のように揺れる、透明な柱。

あの色合いには見覚えがある。無制限中立フィールドの各所ランドマークに設けられている《離脱ポイント》。またの名を《規出口》の光に間違いない。

思わず安堵のため息をつきかけてから、ぐっと呑み込む。ここでただ現実世界に離脱しても、ゲームエリアの運営はおろか、帝城への侵入に成功した証ひとつ持ち帰れない。それでは何のために無限の断崖絶壁に向かって決死の「フロンタ」を挑み、数十時間に及ぶ隠密作戦の緊張に堪え忍んできたのか――……

――いや。

いや、この個人的ミッションを思い立ったそもそもの動機は、そんな即物的なものではな

ったはずだ。ただ、何かひとつ、自衛の械になり得るものが欲しかった。サフラン・プロクサムの隣に物を張って立ち続けるための力を与えてくれる、何かだ。

ならば、もう充分だ。加速世界でもっとも危険なエリアに潜入し、最奥部まで踏破、生還した。たとえそうと知っているのが自分だけでも、その事実は今後ずっと確かな力を与えてくれるはずだ。現在最強と目されている（純粋色）たちすらもできなかったことを成し遂げたという、確かな事実は。

それに考えてみれば、このブレイン・バーストという壮人かつ誠めいたゲームが（クリア）される時間が越えるのが、シスナム側からは一切明示されていないのだ。全加速世界にクリア者の名前がアナウンスされ、賞金代わりのポイントなり賞品代わりの強化外装なりが授与されて、その後もゲームは続く……のならばいいが、いきなりエンディングテーマとスタップロールが流れ、ENDマークとともに全BBプレイヤーのニューロシンカーからプログラムが消去されてしまう、というようなことも考えられなくはない。プロクサムとはもちろんリアルで会ったり連絡先を交換したりはしていないので、そうなったらもう二度と会えなくなってしまう。だからきつと、この域の中で仮にクリアフラタらしきアイテムを発見しても、手を触れることはなかっただろう。これでよかったのだ。ポータルからの生還こそ、このミッシェンで望みうる最大の報酬なのだ……。

と、殊勝にも自分に言い聞かせる地味なメタルカラーを、加速世界の本物の神様が憐れんだ

——のかどうか。

残された集中力を振り絞って周囲を警戒しつつ侵入した広間で待っていたのは、単なるボータルではなかった。

左右に二つ並ぶ、揺らめくブルーの光に満たされた楕円は、帝城の外側にいくつも存在する離脱ポイントで見つかるものとまったく同一だ。だがその手前に、それぞれ奇妙なオブジェクトが設置されている。

高さ一メートルほどの、黒光りする石柱。いや、台座と言うべきか。二つとも、上に何かが載っているのだ。足音を殺し、左側のものに近づく。

わずかに見上げた視線の先で、ポータル之光を飛びながら鎮座するのは——「振りの剣」あるいは刀だった。どちらとも言いつれないのは、鈐や握りの柄とは和風と思えるのに、鞘は一切反りのない完全な直線だからだ。全体が鏡のような銀色の金属製で、装飾はごく少ない。

それでもこの直刀が恐るべき威力を秘めていることは、ひと目で知れた。強化外装だとすれば間違いない最強クラス、いやその上を行くだろう。こうして見ているだけで、まるで神獣級エネミー……いや、かつて一度だけ見た《四神》に至近距離で相対しているかの如き圧力と息が詰まりそうだ。

苦勞して直刀から視線を引きはがし、もう一度黒御影石つばい台座を見る。

その前面には、四角い金属のプレートが嵌め込まれ、いくつかの図形や文字が刻まれている。

まずいちばん上に、Pの字を左に倒したような形に配置された七つの点と、それらを結ぶ線、小学校の理科の授業で、星座の軌跡をした時にこれと同じ図形を見た。四つの星で描かれた四角と、三つの星を連ねたしっぽ、柄杓の形の（北斗七星）だ。よくよく眺めると、柄杓部分の真ん中、左から数えて五つ目の星だけが他より大きく描かれている。

星座の下には、英語ばかりの加速世界では珍しい漢字が二文字、『玉衡』と読めるが意味は解らない。

更にその下に、もう一行、今度はアルファベットだ、

【THE INNITY】。

確か（無限）という意味だったはずだ、おそらくはこれが、この両刀型強化外装のシステム上の名称だろう。銀血の下で何度かその単語を転がしながら、数歩右にずれて、もうひとつの台座を見上げる。

こちらに横っているのは、どちらかと言えば洋風なデザインの新身防具——
鎧、だった。

新身なものではない。一般のVRMMORPGなら軽装鎧に分類されるだろう、先は肩紐タイプで、胸と肩、腕のパーツも最小限だ。下半身は膝までのブーツのみ。しかし安っぽい印象はかけられない。剣と同じく全体がミラシルバーに彩られたそれは、ありとあらゆる攻撃を跳ね返しそうな凄まじい情報密度を秘めている。周囲の空間すらどこことなく赤んで見えるは

どだ、これに比べれば、メタルカラーのタロム・ファルコンの装甲すらまるで玩具おもちゃのようだ。ため息を押し殺し、こちらのプレートも確認する。

全体のデザインは剣の白座と同じだ。上部に北斗七星ほくしうしちほくのレリーフ。しかし、人さくひとさくなっている星は左から六つ目だ。刻まれる漢字は「開陽」。やはり意味は解らない。

そして、いちばん下の英語名は――

『THE DESTINY』とあった。意味は確か……。『運命』。

そこまでを読み取ると、一歩後ろに下がり、今度こそ大きく息を吐き出す。

二つの、恐らくは加速世界最強クラスの強化外装、剣と、鎧。

手を伸ばし、触れば入手できるはずだ。無制限中立フィールドの各所に少なからず存在する『ダンジョン』の奥では、このように台座に載った強化外装が見つかることもあると噂うわさに聞いている。

だが、気になるのは台座のすぐ背後で揺れるポータルだ。当然無関係ではあるまい。一ひと中ちゆう八はち九きゆう、どちらかのアイテムに触れ、入手すると同時にポータルが起動し、現実世界に強制送還される。

しかもアイテムが起動キーとなっている以上、このポータルはたった一回しか使えない（ワンタイム・ポータル）だろうし、起動中は隣となりの台座はロックされるはずだ。つまり、個人または集団が一度に獲得できるのは、剣か鎧のどちらか片方だけだということだ。いかにもゲーム



らしい二者択一的な選択だ。

つい數分前は、入って出たという事実だけで充分と考えはしたが、この状況で台座に手を伸ばさずにいられるほど悟りきつてはいない。例せ現実年齢はまだたった八歳、加速ぶんを加味してもたかだか十三歳なのだ。そもそも、配置からして、どちらかの外装に触れねばポータルを使えないのもまた明らかだ。

では、どちらを？

剣でも鎧でも、装備すれば今までより格段に強くなれるのは間違いない。しかし、タロム・ファルコン単体が強化されても意味はない。あくまでサフラン・プロッサムとのタッグを前提に考えるべきだ。ファルコンの存在意義は、彼女を守ること。ならば剣か。もとより防衛型のメタルカラーが、これ以上硬くなったところで屋上屋を築すというものだろう。

左側、『THE INNITY』の台座に向かって踏み出した剣を――びたりと止める。

プロッサムを守る。真にそのことだけを願うなら、更なる最適解が存在するはずだ。装甲が薄いという彼女の弱点を打ち消し、もう奇烈な集中攻撃を浴びずとも済むようにしてあげられる方法が。

右拳を握り、胸の中央をいちごゴツンと叩いて米糠と私欲を追い出してから、右の台座に鎮座する純銀の鎧へとその手を伸ばす。

指先が触れた——と思う間もなく、視界内に紫色のシステムメッセージが軽やかな効果音とともに流れる。『YOU GOT AN ENHANCED ARMAMENT（THE DESTINY）』。

輝が光の粒となって消滅し、同時にポータータルの青い光が広がって、クロム・ファルコンを包み込む。

暗転。

スポットライト。

白い光の輪の中に、あまり広いとは言えない、しかし居心地の良さそうな部屋が浮かび上がる。

壁も床も、よく磨かれた板張り。片隅には黒い料理用ストープ。上に載ったポットから、ほのかな湯気が立ち上っている。反対側の壁際に、大きめのベッド。真っ白なシーツの上には、並んで腰掛ける人影が二つ。

やはり生身の人間ではない。片方は、濃い銀色の金属装甲に体を包んでいる。そしてもう片方が全身にまとうのは、まるで太陽のような明るい山吹色。短めの髪や肩、腰まわりの箇所は、隠れたばかりの花の蕾を思わせる。

叱られた子供さながらに項垂れる銀色に向かって、山吹色がかわいらしい右手を軽く振り上

げる。

「も——う、ばっかじゃないの?」

ばかり、とヘルメットに何度目かのげんこつ。思い切り首を締めながら、これも何度目かの言い訳を口にする。

「だ、だから、最初は実験だけのつもりだったんだってば」

「なら、すぐに同じ方法で戻ってくればいいでしょ! なんてそのままお城の奥にのこのこ入ってくかなあ!」

「だ、だから、HPもかなり減ってたし……谷の内側から〈フリンク〉して途中で死んだ場合でも、ちゃんと外側で蘇生できるか確信なかったしさあ……」

「仮に内側で蘇生しても、その時はHPゲージ全回復してるんだから、改めてその〈フリンク〉で外側まで跳べばいいでしょ!」

「う……ま、まったくその通りですが……」

この手のやりとりでは、理論派のパートナーに勝てた訳がない。剣を盾としてしょげ返っている、ふうつと大きなため息が聞こえ、跳けてげんこつの代わりに拳をずのひらがヘルメットのでっぺんを叩くくりと絶てた。

「……まあ、あの〈帝城〉に入ろうっていう挑戦心と、奥まで行って戻ってきた精神力は褒め

てあげろわ。頑張ったわ、ファル」

その優しい声に、思わず胸を締め止らせながら顔を上げる。すぐ目の前で、サフラン・ブロッサム（サフラン・ブロッサム）の可憐なフェイスマスクが徳やかな微笑みを浮かべている。

あ……ありがと、フラン」

淡い水色のアイレンズをじっと見つめながらそう呟くと、ブロッサムは思えたように肩をすくめ、クロム・ファルコンの頭から手を離して立ち上がった。

「お茶、いれるわ。そだ、無事帰還のお祝いにケーキも切っちゃう。こないだ、銀座エリアの（フードショップ）で美味しそうな買ってきたんだ」

ばたばたと部屋の反対側のキッチンへと走っていくパートナーの姿を見ていると、あらためて胸の奥に色々な感情が込み上げてきて、声が出せなくなる。

無制限中立フィールドの流線エリア、現実世界ではお台場と呼ばれる埋め立て地の片隅に存在するこの小さな家は、二人で数年に及ぶ——もちろん加速時間だが——エネミー狩りをこなしてようやく鏡を買ったものだ。ファルコンとしては、そのポイントでレベルアップするか強力な強化外装のひとつも買ったほうがいいという気がしなかつたが、初めて新居のドアを開けた時のブロッサムの感激ぶりに、そんな子供っぽい未練はあっさり吹き消されてしまった。

以降、更に一年近くをかけて少しずつ家具アイテムを揃えたこの部屋は、いまやファルコン

にとつても、現実世界の自居よりも居心地のいい場所だ。何より、兄弟がおらず両親の裕きも遅いために毎日独りきりの自宅マンションと違って、この部屋にはいつもプロツサムがいてくれる。さすがに、一掃のベッドで眠るのはしばらく気配すかしかったが。

彼女が、なぜ当時、あれほどまでに家を買うことに拘ったのか。

その理由を教えてもらったのは、現実時間一ヶ月前のことだ。

サフラン・プロツサムは、生まれつき、細胞内のミトコンドリア機能が低下するという難病に罹っているのだという。遺伝子性の疾患なので、最先端のマイクロマシン治療も効果はない。今はまだ後れやすかったり、頭痛がしたりといった程度の症状しか出ていないが、やがては痺や麻痺などの発作を起こすようになり、病変はいずれ心臓にも及び……恐らく大人にはなれないと、医者には言われているらしい。新発見の頃から、発売されたばかりのニューロタンカーを装着し続けてきたのも、症状の継続モニタリングのためなのだろう。

今座っているのと同じベッドの中で、ただ両眼を見開くことしかできなかったファルコンに、プロツサムは明るく笑ってみせた。

——そんな顔しないで、ファル。もし何かあるとしても、十年とか十五年先の話だからさ。それに、私たちには（フレイン・バースト）があるじゃない。私はこの加速世界で、他の人の一生ぶんをちゃんと生きてみせる。可愛くて素敵な家を買って、大好きな人とふたり、いつまでも一緒に……。

そう言つて、もう一度恥ずかしそうに笑うプロッサムに、つい「それ、僕のこと？」と訊いてしまつてばかりと叫ばれたものだ。

暗しかった。しかし同時にかすかな怯えも感じた。本当に僕でいいのか、と、プロッサムの（生）を共有する資格が、本当にこのタロム・ファルコンにあるのか、と、昨日、無謀極まる帝城侵入に挑んでしまったのも、その怯えがずっと心の底に居座っているせいだ。

だから、あの城から生還した今、目の前の小さなナーブルにお茶とケーキの用意をしているバートナーの横顔に向けて、どうしても問わずにはいられなかった。

「ねえ……、フラン。何で……どうして僕なの？ こんな、大した能力もない、メタルカラーとしても中途半端な僕を、君はなんで選んでくれたの？」

するとプロッサムは、一瞬きょとんとした表情を作ってから、すぐにきゅつと唇を尖らせた。

「あーっ、忘れてる！ あのねえファル、最初にタッダの誘いにかけてきたのはそっちなのよ！ ギヤラリィ中に、すっごい小声で話しかけてくるもんだから、私なんども聞き逃しちゃったんだよ」

「え……そ、そうだったけ」

慌てて記憶を探るが、何せ体感時間ではもう九ヶ近くも昔のことだ。それでもおぼろげに憶つてきた遠い情景の中で、プロッサムに話しかけているのは確かに自分だった。よくもまあそんな度胸があつたものだ、とアバターの全身にただならぬ仮想の汗を流していると、お茶のボ

フトを置いたプロッサムが歩み寄ってきて、両肩にぱんと手を置いた。

「なら、私も訊くわ。ファル、あなたはなんて私を選んでくれたの？ あの頃は技もぜんぜんなくて、高火力型に狩られるばかりだった私を、なんで？」

「……どうして言えよう。ひと目見て、この人だと思つた、などと。」

だが長年のタッグパートナーには、そんな胸中の感情すらも隠せないようだった。優しく微笑んだ太陽の色のアバターは、細い両腕をファルコンのヘルメットに回し、胸にきゅつと抱きしめた。

「……私も。私も、そう思つたの。それ以外に理由なんかないし、一度だって後悔したこともないよ。……さ、お茶にしようよ。その後、海見にしよう。いま外は（黄昏ステージ）だから、きつと夕焼けがきれいだよ」

暗転。

スポットライト。

白い光の輪の中に、寄り添って立つ人影が、つ浮かぶ。クロムシルバーとサフランイエロー、焼いて点された光が、遠景を広く描き出す。穏やかな海と、水平線に沈まんとする太陽。波間に揺めく夕陽の反射光は、それを映める。一人が身にまとう色ととてもよく似ている。

お台場の南西の角、晩鐘類公園から眺める東京湾の夕景は、これが本当にソーシヤルカメラの映像から再構成された3Dグラフィックスなのかと疑いたくなるほど美しい。

しかし、現実世界ならば対岸の羽田空港をひっきりなしに離着降しているはずの航空機はまるで見えず、かわりにオレンジ色の空を大型の発電エネミィがゆったりと舞っている。湾の沖合で高々と潮を吹いたのは、鯨ではなく首長竜だ。

こうして、プロッサムと一緒に広大な無制限中立フィールドを眺めるたび、どうしても考えずにはいられない。

いったい、この世界は何のために生まれたのか。何を目的として、幼い子供たちだけがここに誘われたのか。

これはと巨大なシステムを構築・運営するのに費やされたであろうコストの総額を、小学生の知識では想像することもできない。しかるに今まで、あらゆるBBブレイヤーは一円のブレイ料金も支払っていないのだ。大手ゲーム会社の市場リサーチだとか、広告会社の新卒のマーケティングだとか色々な噂が流れたが、だとすればプログラムの配布数が少なすぎる。

約一年前に、追跡不能の発信元からクライアント・パッケージを受け取った子供が約百人。そのうち、《親》として同数無制限のコピー・インストール権が行使できるレベル2に上がったのはたった三割——二十人。そこから、ゲーム好きな子供のコミュニティを購買として再度広まり、現在では、二十三区南部を中心に総数五百人にまで拡大しているものの、企業の販売戦

略としてはあり得ない小規模さだ。

そもそも、このブレイン・バーストというゲームは、プレイヤーになるための条件が厳しすぎる。生まれた直後からずっとニューロリンカーを装着し、長時間のフルダイブ経験がある子供などそうそういるはずもない。一応、BBプログラムには「ヘインストール適性チェック」なるモジュールが搭載されていて、有線直結なりアドホック接続なりで適当なファイナルを転送するパッタグラウンドで相手が条件を満たしているかどうかこっそり確認できるのだが、ファルコンの国境では今まで一人の適格者も見つかっていない。おかげで、もうレベル5にもなるのに、最近ではすっかり《魔》になる努力を放棄してしまっている。

なぜ——、この時間的・空間的無限を内包する異世界は、何のために……。

「また考えてるの、ファル？」

不意に、寄り添って立つサフラン・プロクサムが呟いた。銀面の下でばちばちと瞬きし、とりとめない思念を中断する。

「あ……うん……。一般ファイナルじゃ特に感じないんだけど、こうやって無制限ファイナルを見ていると、どうしても気になっちゃうんだ。僕は……僕たちは、どこに連れて行かれるんだろう、ってさ」

「……そうね。その気持ちは解る……かな。私も最近、現実世界の友達や家族と話してるとたまにヘンな顔されることがあるから。自分では何も変わってないつもりだけど、昔は使わ

なかった言葉とか、知らず知らずに使ってるみたいで……」

心細そうに体を預けてくるプロッサムの肩を、強く引き寄せる。

「それは……仕方ないよ。僕らはもうこの世界で、五年も過ごして……いや、暮らしているんだ。その間にいろんな物を見たし、いろんな話をしたし、いろんなことを考えた。魂の年齢だけなら、もう六年生だって追い越しちゃってる。でも……たぶん、悪いことばかりじゃないさ。昔の僕なら、君みたいな女の子とこうして話すどころか、一緒の場所にいることすら恥ずかしくてできなかったよ。」

「ふふ。私から見ればまだまだ子供だけだね。ハヤブサくん」

プロッサムは小さく微笑んだが、可憐なフェイスマスクにはすぐにまた優しい色が染み込んだ。

「……ね、ファル。あなた、聞いたことある……？ パーストポイントを手損して、BBプログラムを強制アンインストールされたプレイヤーがどうなるのか……」

その場に、一瞬体を硬くしてしまう。しかしすぐに緊張を解き、鼻息して平靜な声で答える。

「ただの噂……だと思っよ、プロッサムをなくしたプレイヤーは、加速世界に関する記憶もなくなっているよ。だって、いくら何でも有り得ないよ、人間の記憶を操作するなんて……」

「でも、それを言うなら、思考を十倍に加速する技術だって、最初は何じられなかったわ。」

正由、今でも仕組みについてはちゃんと理解できてないと思う。だから、もしかしたら、『記憶消去』のほうも……」

そう言われると、同じくブレイン・パーストの根幹技術については理解がかなり曖昧なファルコンも黙り込むしかない。

二人とも、今ではすでに二十人を下回ると思われる、『親』のいない『第一世代B型プレイヤー』でありまた『子』を持ったこともない。だから、プログラムを喪失したプレイヤーが記憶をも失うという噂の真偽を實際に確かめる機会は今までなかった。

いや、仮にその機会があっても、確証を得ることは難しいかもしれない。なぜなら噂によれば、加速世界から退場した者は、関連する記憶を完全に喪失するというよりも『ブレイン・パースト』に対する興味及び細部の知識を失う」という感じらしいのだ。本人の記憶に空白を作らず、周囲の人間にも大きな違和感を与えない、いわば緩衝装置としての精神操作。

それは、もしかしたら、完全な記憶消去より恐ろしい措置かもしれない。

今までは同じレギオンの仲間、あるいは『親子』として強い絆で結ばれていた相手が、ある日突然自分のことを忘れる——のではなく興味を示さなくなる。その他大勢、どうでもいい知り合いの一人として扱われる。そんなことになるくらいなら、いっそ完全に未知数の他人にされたほうがましかもしれない。もう一度出会い、また友達になれる可能性がわずかでも残るのだから……。

うそ寒い思考に、ついぶるとアバターを震わせる。と、耳にいつそう密やかな囁きが届いた。

「ファル、私ね、もう少ししたら、(子)を作ろうと思うの」

「え……………」

思いがけない言葉に、まじまじとパートナーの顔を見てしまう。プロッサムは風れたように一瞬微笑んだが、すぐに表情を改め、静かに話しはじめた。

「今までは、(子)を守る自信がなくなかなか踏み切れなかったけど、最近是一般対戦の勝率も安定してきたし、対エネミー戦國のノウハウもだいぶ蓄積できたでしょ？ これなら、もし下のポイントが危なくなっても、ある程度は供給できるはず。って言っても、もちろん無情誤滅みたいな甘やかしはないけどね。レベル4になったら、エネミー狩りて返してもらう感じかな」

「は……………ははあ、なるほど……………」

プロッサムならきつと、厳しくも優しいしつかり者のママ……………ではなく(親)になれるだろうと思いつながる。そんなファルコンから、東京湾の彼方に望める太平洋へと視線を移し、サフラン・プロッサムは史に驚くようなことを言った。

「それとね、これはずつと先の話になるだろうけど、いずれはレギオンも作ろうと思うの」

「えっ……………領土戦争をするつもり？」

慌ててそう訊ねると、山吹色のショートヘアが大きく左右に振られる。

「違う違う。お台場のこのエリアはずっと空白地帯だから、もしかしたら領土宣言はするかも知れど、目的は別。戦争レゾオンじゃなくて……何て言うかな、互助レゾオンみたいのを作りたんだ」

「ゴジョ……って、互いに助け合って意味？」

「うん、そう。さっき、へず」が危なくなったらポイントを提供して、いざれ返してもらって言ったでしょ？ それを、もっと大規模にシステム化できないかなって」

パートナーの言っていることがいよいよ理解できる城を超えてきて、大きく首を捻ってしまふ。すると、ブロッサムはくると振り向き、正面からファルコンの両手を握って、いっそう真剣な表情で言った。

「あのね……ファル。私たち、レベル1の頃からタッグ組んできたでしょ？ 二人、無我夢中で戦ってるうちにレベル2になって、3、4と順調に上がって、気づけばもうレベル5よね。でも、私たちは物凄く幸運だったって今になって思うの。だってさ……、あんまり考えたくないことだけど、私たちがレベルアップしてきた裏側では、何人ものBBプレイヤーがポイント全損して加速世界から退場してるんだよね……」

「……………」

確かに、それはそのとおりだ。今まで誰かのポイントがゼロになる瞬間を見たことは数え

るほどしかないが、ゲーム開始後わずか十二ヶ月で、《第一世代》の五人に四人がすでに消滅しているのは種かな事実なのだ。

語られる言葉の重さに、相づちすら打てずにいると、手首を握る小さな向子が慰撫するように優しく動いた。同時に、柔らかな囁き声。

「ごめんね、ファル。別に、後悔してゐるわけじゃないの。《フレイン・バースト》は対戦格闘ゲーム……誰かが勝って、誰かが負ける。その根幹を否定する気はないよ、でも……、でもね、ポイントがゼロになったら、プログラムも記憶も何もかもなくして、もう二度とこの世界に生まれないなんて……あまりにも厳しすぎる。ポイントが残り少なくなった人たちを何人も見たけど、ぜんぜん楽しそうじゃないもん……楽しくなかったら、もうゲームじゃないよ……」

——もしかしたら、その厳しさこそが、謎のゲーム開発者の望んだものなのかもしれない。一瞬そんなふうに思ったが、言葉には出せなかった。代わりに、そっと訊ねる。

「だから……《互助レギオン》を作りたいの……?」

「……うん。ポイントをたくさん貯金しておいて、なくなりそうになった人に貸し出す。安売したら、エネミー狩りに参加して返してもらう。この五年で、狩りのコツは纏ってほど学習したものだ。そのノウハウがあれば、エネミー戦の事故率は大幅に減らせるはず」

「でも……、でもさ」

頭の中で、プロッサムの構想が目指すところを必死に理解しようとしながら、おそろおそろ

なく——プレイヤー持り。

言葉を抑うファルコンを至近距離から見つめ、プロッサムは張り詰めた歯を放つ。

「事実だとしたら……そんなの間違ってる。シスナム的に可能なんだとしても、絶対に間違ってるよ。私には、まだ何の力もないけど……でも、何かしなきゃ、少しずつでも、できることをしなきゃ、どれくらい時間がかかるかわからないけど、《子》を作って、ポイント賣し出しの仕組みを試して、レギオンを立ち上げて……いつかは、いつかはこの世界のみんなが、ゲームを笑って楽しめるように……」

気づいた時には、プロッサムを両腕で強く抱きしめていた。

腕の中の草薙なアバターに向かって、懸命に囁きかける。

「……僕も手伝うよ。僕こそ、何の力もないちっぽけなメタルカラーだけど……でも、約束する、君のために……この世界のために、できる限りのことをする。ブレイン・バーストは対戦格闘ゲームだし、ゲームは楽しくなきゃだめだ。僕は……今まで、フランと一緒に戦えて楽しかった。君と出会ってからずっと、明日がくるのが楽しみだった、それを、他のプレイヤーにも伝えたい……」

「うん。うん……私も、ファルと一緒に楽しかったよ。これから、きつと、ずっと楽しい。」

二人で、この楽しさを広げよう。二人なら、きつとできる……」

震える声でそう答えるプロッサムを、もう一度強く抱いてから、そつと肩を押す。

ちよつと待ってて、というように指を一本立ててから、視界左上の自分の体力ゲージに触れ、メニューウインドウを開く。所持品欄に指を走らせ、一つのアイテムをオブジェクト化。

それは、鏡のような銀色に輝く一枚のカード。無制限中立フィールドで入手できるアイテムは、最初はたいていこのようにカードの形をしている。強化外装も例外ではなく、ダンジョンやエネミードロップで手に入れると、カードに封印された形でストレージに移動する。所有権が設定されるのは、初回に誰かが整備した時だ。

ウインドウからカードを取り上げ、プロツサムに向けて差し出す。

表面に刻まれた小さな文字は――『THE DESTINY』。帝城の奥深くで手に入れた、恐らくは世界最強クラスの白銀の剣。

「フラン、これをあげる。きつと、君の夢を叶えてくれる……」

プロツサムがおずおずと持ち上げた両手に、そつとカードを載せる。

その余りにも強い力が、二人の運命をねじ曲げてしまうことを、この時はまだ知るすべもなく……。

暗転。

スポットライト。

白い光の輪の中に、華奢な人影がひとつ浮かび上がる。



THE DESTINY

全身を彩るのは、春の目差しを思わせるサフランイエロー。しかし、以前は存在しなかった色合いが体の各所に見て取れる。顔や胸、両手両足に焼めく、鏡のような銀色。

綻びかけた蕾のような影のショートヘアは、深く削けられている。両腕は左右に大きく開かれ、細い両脚はだらりと力なく伸びる。そんな不安定な姿勢なのに小揺るぎもせず直立しているのは、背後から何かが彼女を拘束しているからだ。

大きな板を切り抜いたかのように薄く、艶のない薄黒に染まるそれは——十字架。何らかの磁力でも発しているのか、サフラン色の人影をがっかりと吸い付けている。

越く照明が、ようやく周囲を照らし出す。

緑がかった金属光沢を放つ地面。同様にメタリツクな色合いを帯びた奇怪な虫たちがカサコソと這い回る。十字架は、すり鉢状に凹んだ広い窪地の底に立てられている。すぐ近くには、巨大な縦穴が黒々とした口を開ける。穴の側面は、透明な粘液に覆われているように見える。

照明が更に範囲を広げる。

直徑三十メートルはあろうかという窪地の縁には、数十もの人影が輪を作っている。動くてもなく、喋るでもなく、皆押し黙って窪地の底の十字架を見詰めている。まるで、これから何が起こるのかを知っているかのように。息を溜め、眼を見開いて、恐れ——あるいは待ち望んでいる。

それらシルエットの中に、一つだけ地面に倒れているものがある。

黒みがかつた銀の光沢を持つ、小柄な体。細い手足と、丸いヘルメット。懸命に起き上がろうとしているのだろうか、鋭く笑った指が金属の地面を強く抉る。しかし動けない。穴の直の十字架とよく似た、マッドブラックの薄い板一枚が左右から彼を挟み拘束しているからだ。

不意に、窪地の中を緩慢に這い回っていた金属虫たちが、蜘蛛の子を散らすように走り出す。地面のあちこちにある生物のユラめいた膜に入り込み、たちまち姿を消す。

ずずず、ずずず、という低く重い振動音が、窪地の中央に開いた巨大な縦穴から響いてくる。

「やめろ……、やめろ、やめろ————ッ!!」

もう何十回、何百回叫んだか解らないその言葉が、無制限中立フィールドの空にむなしく吸い込まれていく。

目の前の地面には、指先で引っ掻いた細い傷が無數に刻まれている。だが、それは力を込めようと、動かせるのは肘から先だけだ。両肩から二の腕を挟み込む漆黒の板は、厚みなどほとんどないのに、まるで巨人な方力の如く絶対的な圧力でクロム・ファルコンのアバターを締め付けてくる。

しかも信じがたいことに、この一枚の板を操るプレイヤーは、同時にずっと離れた窪地の底に漆黒の十字架を出現させてサブラン・ブロッサムをも拘束しているのだ。

ブロッサムは、ぐったりと項垂れてもう動く力もないようだ。それも無理はない。この数十

分に彼女が味わった苦痛の凄まじさは、これまで加速世界で経験した痛み全てを足しても遠く及ぶまい。

そしてまた、ファルコンの意識を駆け巡る激しい怒りと絶望も、生まれてこのかた経験したことのないものだった。

「やめろ……やめろ、やめてくれ……」

食い縛った面の周から、ひび割れた声を押し出す。同時に、《煉獄》ステージの硬い地面にアバターの指で新たな平行線を刻み込む。しかし動けない。その無力感が、絶望をいつそう深める。

体を感じる、おどろおどろしい震動。またあいつが来たのだ。

森地の真ん中、プロッサムを拘束する十字架のすぐそばに開いた直径二メートル以上もある穴の底から、何かが這い出そうとしている。まず、先の尖った触手が一本以上現れ、ゆらゆらと揺れる。続いて、二列に並んだ赤い光点が闇の奥で瞬く。底なしの飢えを感じさせるその光は、あいつの腹だ。触手がすぐ近くのプロッサムを感知した瞬間、無数の眼が強烈に瞬く。直後――。

溜った音と粘液の滴をまき散らしながら縦穴から飛び出したのは、余りにも巨大なワーム型のモンスターだった。帝城の四方門を守護する《四神》を除けば加速世界で最強の存在、神獣級エネミーの一角――地獄の長虫（ヨルムンガンド）。

《煉獄》や《疫病》、《腐蝕性》といった一部の有機体、ステージでしか出現しないが、それゆえに出会ってしまえばほぼ死は免れない。しかし、果は、伸張膜としては狭い直徑三十メートルのクレーター内だけなので、たとえ一度殺されても、一時間後に蘇生してから再度ヨルムンガンドが現れるまでの約十秒の間に離脱は可能だ、何かが——諺（ことわざ）かが、意図的に移動を妨害しなければ。

黒い十字架に拘束され、まったく動けないサフラン・ブロッサムに、ヨルムンガンドがその頸部を近づけていく。二列に合計十六個も並ぶ、レンズのような赤い眼の下には、長い触手に取り囲まれた四角の口、いや捕食孔が存在する。銀の歯のような牙を幾層にも備え、止めどなく粘液を滴らせる底なしの孔が、要害なアバターへと迫る。一瞬体を震わせたブロッサムが、より深くこうべを垂れる。

「やめ……あ……やめあおおっ……」

フアルコンのヘルメットから漏れる掠れた声を、人ならぬエネミーが聞き入れるはずもない。直徑一メートル以上もある長虫の口が、ブロッサムの頭上でいっばいに開かれる。分泌された粘液が止めどなく滴り、山吹色の装甲に降りかかるやもうもうと白煙を上げる。あの液体には、アバターの物理防御力を一時的に大きく減少させる効果がある。身にまとった白銀の鎧の輝きが急激に失われる。それを待たぬように、ヨルムンガンドが十字架ごとブロッサムの上半身を咥え込む。

灼熱した感情のあまりか薄く染まった視界の中央で、長い時間を共に過ごしたパートナーが切れ切れの悲鳴を上げる。

強化外装（サ・ディステイニー）の力は、予想を遥かに上回るものだった。

物理攻撃は、切断・打撃・貫通・銃撃・爆発を問わずほぼ無効化。エネルギー攻撃も、レーザー系は反射。冷気・炎熱・電撃に耐性。唯一、金属装甲の天敵である腐食酸だけは弾けなが、そんな攻撃技を持っているデュエルバターがそもそもほとんどいない、無敵。そう言っても決して大げさではない、空恐ろしいほどの防弾力だ。

しかし考えてみれば、あの鎧は、それこそ絶対無敵の超級エネミー（四神）を撃破し帝城の最奥部まで攻め上った者のみが手にできる、このブレイン・バーストというゲームの最終アイテムだったはずなのだ。それを、偶然と幸運、そしてシステムの不備に助けられ、ゲームの進捗度としてはまだまだ序盤であるはずのこの時期に入手してしまった、圧倒的な力を發揮してもまったく不思議はない。

ゲームバランスそのものを崩壊させるほどの（ディステイニー）のパワーを、所有者となつたサフラン・ブロッサム本人すらも恐れた。何せ、今までは一発で体力ゲージをほとんど持たせていかれていた赤糸や青糸のフルチャージ必殺技を、直撃されてもわずかな隔りダメージしか受けないのだ。一般対戦を数回行っただけで噂は加速世界中を駆け巡り、ブロッサムの元には

鎧を買いだいたいというオファアや有力レギオンからの加入要請が殺到した。それにもちろん、インチキ、チートという悪魔の数々も。

もし、ファルコンと二人でただタッグ対戦を繰り返していた頃だったら、プロクサムは鎧を封印、あるいは処分していたかもしれない。

しかし、今の彼女には見果てぬ夢があった。ポイント全損を防ぐための《互助レギオン》を立ち上げ、加速世界から殺伐としたデスゲーム要素をなくして、みんなが楽しく対戦できる……いや、生きられる場所にした、という。

それはもしかしたら、大人になるまで生きられないと宣告され、自分ではその運命を受け入れていたと言っていたプロクサムの、密やかな抵抗なのかもしれない。加速世界の荒涼とした大地にたくさんの種を撒き、いっぱいの花を咲かせたい——。BBプレイヤーとなったその瞬間から、彼女はずっとそんな夢を見ていたのだろうか。

互助レギオンの中核となる《バーストポイント冒険システム》を実稼働させるには、まず充分なポイントプールが必要だ。そして、必ず出てくるであろう、最初から踏み倒すつもりで悪魔の参加者を牽制するための戦闘力も。

対戦はもちろんエネミー狩りにも圧倒的なパワーを発揮する《ディステイニー》は、プロクサムにとっては夢の実現を約束するチケットに他ならなかった。さすがに鎧を装備しての乱入は持えたものの、挑戦してくる数々の猛者たちを、プロクサムとファルコンは例外なく退けた。

最強と言われる（純粋色）の一人をすら、二対一ではあったが撃破してのけたその日、プロッサムはついに自らの構想を加速世界に広く宣言した。同時に、新レギオンの加入希望者を広く募った。

そして、昨日、実に三十人以上のBBプレイヤーが連名で、具体的な話を聞きたいというメッセージを送ってきたのだ。

二人は大いに喜び、しかし一抹の不安をも感じた。彼らが話し合いの場所として、無制限中立フィールドを希望してきたからだ。安定したエネミー狩りが本来に可能なのか確かめたい、というその理由には一応納得したが、無制限フィールドでは何が起こるか解らない。最悪の場合、二十数人全員が一斉に攻撃してくるということもあり得るのだ。

だが、假にそうであっても、（アイステイニー）を装備したプロッサムが一撃死するとは考えられなかった。だから二人は、話し合う場所を離脱ポイントのすぐ近くに指定するという保険をかけた。最悪だったら、脚座にポータルに飛び込めばいい。

本当は、それでもまだ万全とは言えない。デニエルアバターの能力は直接攻撃ばかりではないからだ。プロッサム自身がそうであるように、脚を止めたり視界を奪ったりという障害系の技を持つ者がいれば、ポータルからの脱出を妨げられる可能性はある。しかし二人は、敢えてその危険を無視した。メッセージに並んでいた名前の中には、昔からの知り合いも少なからず含まれていたからだ。この全員が話し合わせて悪意の足を張るとは思えなかったし、思いたく

なかった。

今日の話し合いの会場となった、現実世界ではレインボーブリッジ北の芝浦パークキングエリアにあたる建物のポータルを、近づく前に念のため遠くから確認もした。すでに集まっていた三十以上のアバターは、確かにメッセージに記されていたとおりの顔ぶれだった。

はっと安心し、首都高台場線の高架下に出て歩きはじめたプロッサムとファルコンの足下から、突如、一枚の看板が出現し――

二人を、有無を言わさぬ強烈な圧力で拘束した。

「やめろ……やめてくれ！ なぜ……どうしてなんだ……！！」

《神像》の汎称が持つ神聖なイメージとはかけ離れたおぞましい長虫が、最愛のパートナーに無数の牙を埋め込んでいく光景を凝視しながら、タロム・ファルコンは何度目とも知れぬ絶叫を送らせた。

間いかけは、長虫の巣である洋地の縁に立ち並ぶ数十名のBBプレイヤーに向けたものだ。

彼らの大部分は顔見知りだし、ギヤラリーで一緒になれば親しく会話を交わす仲の者も数名いる。無論対戦したことも何度もあるが、勝ち負けはほぼ五分だったはずだ。これほどの悪意ある罠を仕掛けられるほどの遺恨を残した覚えはない。

だが、彼らはそろって沈黙を守り、地面で拘束されるファルコンを見ようともしない。ただ

じつと、窪地の底で繰り広げられる惨劇に視線を注いでいる。そのフェイスマスクには、一樣に惨憺と鐵煉の色が浮かんでいる。だがそれだけでは足りない。仕えの裏に、とてもとても嫌な何かが存在することをファルコンは強く感じる。

不意に、すぐ背後から低く滑らかな声が聞こえる。

「済まないね、ファルコン君。彼らの代わりに、せめて私が答えよう」

どこか学校の教師を彷彿とさせるその声の主は、二枚の薄板と一つの十字架を操りファルコンとプロッサムを拘束するその当人だ。名前は解らない。それ以前に、これまで加速世界で一度たりとも見かけたことはない。黒いシートを切り抜き、縦に並べて人型を作ったような奇怪なフォルムのデュエルパター。

「あの強化外装の力は、いまだ黎明期にあるこの世界に於いては余りにも規模外すぎるんだ。それは、ここ数日の対戦を通じて君たち自身も如実に体感したところだろうか」

BBブレイヤーは、現実世界では最年長でもまだ小学二年生のはずだ。《生まれれた直後からニューロランカーを装着し続けていること》がブレイン・バーストをインストールするための必須条件であり、民生用ニューロランカーの市販が開始されたのが、ファルコンたち《第一世代》が生まれたその年だからだ。

しかし漆黒の精鋭アバターの口調は、とても子供のそれとは思えない。現実世界のクラス担任である二十代の青年教師と比べても、実に年上にすら感じられる。そのプレッシャーに抗い、

懸命に声を押し出す。

「なら……（頭）を、シヨラブで処分する。手に入ったポイントは全部、公平に分配する。それでいいだろ……ここまでする必要はない、そうだろう……!!」

「残念ながら、その方法だとシヨラブに強化外装が残ってしまう。再びあれを手に入れ、ゲームのバランスを崩す者が出てこないと限らない。あの鐘は、元あった場所に戻されなければならないんだ。そのためには、ブレイヤー以外の力によって、所有者を消滅させるのが唯一の方法なんだよ、ファルコン君」

どこまでも穏やかな声がそう告げたのと、ほぼ同時に――

ヨルムンガンドの口元で、サフラン・プロッサムのアバターが無数の細片と化して砕け散った。山吹色の光の柱が高々と屹立し、刹那の墓標を描いて消えた。

たった一瞬で侵入者を駆った地獄の長虫が、満足げに触手を振り立てながらずると黒穴に戻っていく。漆黒の十字架も、地面の濃い影の中に音もなく沈み込む。

後には、サフランイエローの小さな光だけが残される。無制限中立フィールドのルールに従い、プロッサムは一時間の《幽霊状態》に置かれたのち、あの場所で蘇生する。――はず、なのだ。しかし。

左側、ファルコンからは黒い板に覆われて見えない位置で、密やかな騒ぎが発せられる。

「ヘリザレクト・バイ・コンパッション」

人のそれとは思えないほど無情で清らかな声に乗せて、小さな光の粒子たちが宙を流れ、窪地の底に舞い降りていく。それらが山吹色の《残り火》に触れた瞬間、眩い白光の柱が空から降り注ぎ、凝縮して、一つのアバターを实体化させる。本来ならあと一時間は生き返らないはずの、サフラン・プロッサム。そのままだ地面に崩れ落ちようとする事者なシルエットを、足下から出現した十字架が再び拘束し、長虫の巢穴のすぐ隣に直立させる。

これと同じことが、すでに数限りなく繰り返されている。対エネミー戦での死亡で失われるバーストポイントには10で固定なので、ここしばらくの連勝で蓄積されたポイントはそう簡単には尽きない。残骸を死と、それ以上に残酷な蘇生の終わりなきサイクル。

神獣級エネミーのテリトリイ奥深くに入り込み、脱出できずに何度も死んで、そのままだポイントを全損してしまった例はこれまでも存在する。その現象を、BBブレイヤーたちは《無限エネミー・デス》と呼び恐れた。しかし、ファルコンとプロッサムを尻にかけた黒い積層アバターたちは、黒い十字架と白い光によって意図的に現象を引き起こしているのだ。結果としての死ではなく、能動的な処刑。《無限エネミー・キル》。

……………もう、やめてくれ。

懇願を声に出す力すら失われ、銀面の奥でただそう念じる。

無制限フィールドでは、被ダメージ痛覚は現実世界とはほぼ同等にまで引き上げられている。プロッサムはヨルムンガンドに殺されるたび、本当に全身を噛み砕かれるに等しい激痛を味わ

っているはずだ。たとえ現実の体にはかすり傷一つ付かなくとも、意識——魂に刻まれる痛みは記憶は消えないのだ。

いや……

彼女が真に感じている痛みの源は、怪物の牙ではなく、窪地の周囲に立ち並んでいる数十人のブレイヤーたちの視線かもしれない。偽りのメッセージでプロッサムをおびき出し、この風に変き落として、おぞましい長虫に何度も何度も喰い殺されるさまをただ眺めている、かつて友人だった者たち。

彼らのフェイスマスクには、恐怖や怯えだけではなく、仄かな興奮の色が確かに見て取れる。子供らしい《怖いもの見たさ》もあるだろう。だがその裏側に、もっとずっとリアルで醜悪な感情が隠されている。それは、現実世界の学校の教室で、異質な生徒を排斥しようとする集団が漆ませているものとまったく同じだ。

そして、同時に。

排斥される者を、安全圏から何もできずに見ているだけの生徒とまったく同じなのが、今のクロム・ファルコンだ。

ファルコンが《審美》に忍び込みさえしなければ、強化外装（サ・ディステイニー）を持ち出さなければ、それをプロッサムに読まなければ、こんなことにはならなかった。全ての原因を作っておきながら、自分は傷一つ負わず、ただ愛する人の苦しむ姿を眺めている。

強制的に蘇生させられたプロファサムを感知し、果穴の奥深くからまたしてもあの長虫が近づいてくる。どろ、どろという低い震動が地面を揺らす。山吹色のアバターはもう身動き一つしない。漆黒の十字架架上で力なく項垂れ、何度目とも知れない（死）を待っている。あるいは、それらの死の先にある、ポイント全損、記憶消失という名の（終わり）を、

………僕は、

僕はまた、おなじ過ちを、

もう、見えないふりはしない。傷つけられ、疎外されて、居場所を失おうとしている人から二度と眼を逸らさない。そう決めたはずなのに、僕はまた、何もできず、ただ大切なものが損なわれるのを、こうして………

「……………いやだ」

摩擦する寸前の意識から、懸命の声を絞り出す、

「もう、いやだ、もう、僕だけ残るのは絶対にいやだ」

アバターを拘束する二枚の薄板は、まるで世界そのものに固定されているかの如き絶対的な重さを伝えてくる。ファルコンのパワーでは、どんなに力を振り絞ろうとも一ミリたりとも動かせないことはすでに思い知らされている。だが、まだ一つだけ脱出の可能性がある、

漆黒の板ではなく——自身の金属装甲を破壊できれば、

「う……………お、お、おおお……………」

軋むような唸り声に乘せ、残された力の全てを振り絞る。両腕で、左右の板を押す。押す。クロムシルバーの装甲が、圧力に耐えかわて甲高い唸鳴を上げる。今までは、ここで諦めてしまっていた。だが、自分が砕ける予感を無視して、更に押す。

「やめておきたまえ、ファルコン君」

横断アバターの、本気で心配しているような囁き声。

「我々に君をも排除する意図はない。作戦が終了すれば、ちゃんと解放する予定なんだ。おそろくあと一、二回だから、それまでおとなしくしていてくれないかな」

「だ……まれ……!!」

勝負な言いぐさへの反響をも力に変えて、黒い板にぶつける。ついに、両腕の装甲に細かいヒビが走りはじめ。スパークにも似た痛み。だが、こんなものでは足りない。まったく足りない。

「……………っ……………!!」

無音の咆哮とともに、あらん限りの力を解き放った。その瞬間。

両腕の装甲が、硬質な金属音とともにこなこなに砕け散った。内部の、ダークグレイの基本構造体からも鮮血に似たダメージエフektが迸り、息が止まるほどの激痛が神経を駆け巡り――そして、HPゲージが大きく減少するとともに、必殺技ゲージが二割はビチャージされた。

掠れた声で、叫ぶ。

「ヘフラッシュ・プリント」!!

クロム・ファルコンのアバターは、実体を持たない量子へと変じ、ついに薄板の拘束から脱出する。そのままテレポートに等しい速度で加速し、十五メートル先で実体化。

目の前に、壁にされたサフラン・ブロッサムと、その相い体を噛み砕かんとするヨルムンガンドの頭があった。

最後の方で、右足の鋭い爪先を巨大な長虫に叩き込む。殺つても重ぶ辛い單眼の一つが、粘液をまき散らして粉砕される。視界に表示された、エネミーの二段HPゲージが絶望的なほどわずかに減少し、しかし不意打ちに驚いたのか、長虫はブロッサムを解放して大きく頭を振り動かす。

エネミーが轟かせる怒りの咆哮の下で、かすかな声が弱々しく空気を揺らす。

「ヘタル・シエルター」

十字架の足下から、巨大な緑色の花びらが幾つも生まれ、二人を包み込むように丸い蕾を作る。サフラン・ブロッサムのレベルも必殺技、強固な花卉が、あらゆる攻撃から内部を完全に守る。効果時間——二十秒。

穏やかな黄緑色の光が満ちる球体の中で、消滅した十字架から落下しようとするブロッサムを、ファルコンは装甲の失われた両腕で抱き止める。

そのまようずくまり、最愛のパートナーの顔を懸命に見詰める。この三十秒が、二人に与え



られた最後の時間だ。花びらが消えれば、再びあの十字架が現れて二人を拘束するだろう。そしてヨルムンガンドは、増えた獲物を本能に従って磨り続けるに違いない。

自ら死地に飛び込んだことに、無論後悔はなかった。しかしこの貴重な時間に使われるべき言葉を、ファルコンは見つけられなかった。だから歯を食いしばり、鳴咽を押し殺して、懸命にプロッサムのフェイスマスクに見入り続けた。加速世界から消えた後も、この美しい顔を、輝く空色を、絶対に忘れないために。

「……………ごめんね」

ぽつり。零れた、かすかな声。

「ごめんね、ファル。私……あなたの後しきにかけてた。現実世界で奪われた未来を、この世界で取り戻したくて……そのための大人ごっこを、あなたにも押しつけてた。この結末は……私の能りが呼び寄せたんだよね。ごめんね……」

プロッサムのアイレンズから、透明な光の粒が次々に滴り、空気に溶けて消えた。

——そんなことない。そんなこと、ない。

そう言いたかったのに、熱い頬が喉を牽いで声を出せない。せめて懸命にかぶりを振る。そのヘルメットを、細い指先がそつと撫でる。

「でもね……、でも、これだけは信じて。私、あなたが大好きだったよ。最初に出会った時から、ずっと好きだった。だって、すぐに解ったから。あなたが、弱い私を守りたいと思ってく

れたこと。みんなが、誰かのポイントを守ろうとだけ考えてる中で、あなたが……あなただけが……」

その先は言葉にせず、プロッサムはにこりと微笑んだ。

そして、頬から滴かした右手で、ファルコンの右手を包み、導く。ホルムンガンドの牙で傷たらしく傷つけられた、自分の胸の真ん中へと。

「最後の、お願い。ファル、あなたが、私を消して」

「……え……」

ようやくそれだけを吐いたファルコンに、プロッサムは微笑みながら告げた。

「私のポイント、もうあと少ししかないの。あのエネミーに殺されてこの世界から消えるくらいなら、あなたに送って欲しい。そうすれば、ブレイン・バーストを強制アンインストールされても、きっとあなたのこと、憶えていられるから。たとえ記憶を消されても、あなたのことだけは、ずっと」

ここで、ついに技の効果時間が終了し、緑の雷は天頂からゆっくりと解け続ける。球体を満たしていた静寂を、長虫の怒りの咆哮が破る。

「……………フラン」

胸に満ちる思いの全てを言葉にするには、残された時間は余りにも短すぎた。傷ついた、太陽の色のアバターを左胸で思い切り抱き締め、ファルコンはありったけの感情

を込めて囁きかけた。

「ありがとう」

ありがとう。こんな僕の差し出した手を取ってくれてありがとう。僕に色々なことを教えてくれてありがとう。僕のちっぽけな世界を広げてくれて、ありがとう。

握られた右手の指を、まっすぐに伸ばす。猛禽を模して鋭く尖った指先が、サフラン・プロッサムの胸の中央、タリタイカル・ポイントの一つである心臓の真上に触れる。

「……愛してる」

これまで、一度として口に出しては言えなかったそのひとことを告げながら、鋭く右手をつき下ろす。

ホルムンガンドの牙と消化液によって無力化された《ディステイニー》の鎧甲を、ファルコンの貫手が深く深くつらぬく。

……さよなら、ファル。大好きだよ。

そんな声が、ささやかな微風となって意識に流れ、消えた。

サフラン・プロッサムのアバターは、これまでのように千の細片となって爆散するかわりに、はらりとその影を解いた。暖かい、春の日差しを思わせる色の光の中で、華やかなシルエットは無数のリボンへと分かたれ、空に舞い上がっていく。それらのリボンは、更に繊細なコードの縋り糸へと還元され、大気に溶けて——消える。

《最終消滅現象》。ポイント全損者の、加速世界からの不完全なる退場。

ふと気づくと、腕の中は空っぽになっていた。

自分自身が消えてしまったかのような、余りにも深い喪失感に打たれてうずくまるクロム。

ファルコンの背中を、ヨルムンガンドの無数の牙が音高く喰え込んだ。

そのまま、高々と持ち上げられる。全副装甲がオレンジ色の火花を撒き散らす。ざし、ざしとアバターの全身が軋み、視界左上の体力ゲージがみるみる減少していく。同時に、眼も眩むような激痛。

でも、悲鳴は上げない。上げられない。この恐ろしい痛みを、プロッサムは無限に等しいほどの回数味わったのだ。奥歯を噛ませ、必死に耐える。ぼやけ、歪む視界の彼方に、ぐるりと輪を作って並ぶプレイヤーたちの姿が見える。

彼らの腰には、一様に驚きと――震みの色が浮かんでいる。無意味に命を捨てる愚か者と笑っている。

この状況からの脱出は、実のところ不可能ではない。機ダメージと同時に蓄積されていく必殺技ゲージを使用して、再度《フリンクス》すればいいのだ。

しかし、もう逃げる……いや、生きる意味があるだろうか？

サフラン・プロッサムは消えてしまった。また独りになってしまった。ここから逃げのび、ソロプレイヤーに戻って無目的に戦闘を重ねても何になるだろう。それならばいいぞ、ここで

プロッサムと同じように、この長虫に喰い殺されたほうがいい。何度も、何度も。彼女と同じようにポイントが尽き、世界から追放される、その時まで……。

ふと、気づく。

隅り取られていくHPゲージと、充填されていく必殺技ゲージの下に、小さな光が点滅している。首を動かしても、光はびたりと追隨してくる。これは……システム・メッセージだ。四角いカーソルが、何かを告げようとしている。

はやけた視界をその一点にフォーカスさせた瞬間、會もなく文字列が流れた。

『YOU ACQUIRED AN ENHANCED ARMAMENT (THE DES
TINY)』

しばらく、理解できなかった。

強化外装の入手メッセージだ。しかも、封印カード状態での手すを示す『GOT』ではなく、所有者になったことを示す『ACQUIRED』。対象は——（砲）。サブラン・プロッサムと一緒に消え去ったはずの（サ・ディステイニー）。

しかし、なぜ、強化外装を譲渡するには、（ショック）で売却・再購入するか、直接封戦で受け渡す以外の方法は……。

いや、もう一つ、曖昧な噂を聞いたことがある。所有者であるプレイヤーが加速世界から最終消滅した時、ごく低い確率で、最後の攻撃を行ったプレイヤーの所持品欄に強化外装が移動

することがある、という。

プロクサムが、自分に止めを刺してくれるようファルコンに頼んだのは、この結果を願ってのことだったのかどうかを知るすべはもうない。

しかし、ファルコンには、これが彼女からの最後のメッセージだと感じられた。

生きろ、と、生きて戦って、と。

無意識のうちに、銀面の下で呟いていた。強化外装の整備を指示する、デフォルトの音声コマンド。

「着装……（サ・ディステイニー）」

小型の恒星の如き強烈な光が生まれ、世界を銀色に染めた。

アバターの手足と胴体を、分厚い追加装甲が鋭い金属片とともに覆っていく。そのデザインは、プロクサムが装備していた時の〈砲〉とは大きく異なる。もともと強化外装は、それを身につけるデュエルアバターの体格によってサイズを自動調整するが、この程の変わりようは調整の域を超えている。かつての優美さと軽快さは失せ、今や鋭くエッジが立ったプレートアーマーの翹だ。

最後に顔部を覆った装甲も、元の円型ではなくオーブンタイプの兜だった。ファルコンの体の八割以上を包んだ重厚な鎧は、がきいん!! という強烈な衝撃音とともに、アバターを噛み砕く寸前だったヨルムンガンドの牙を全て跳ね返した。

神像に列せられる巨大なエネミーは、怒りの雄叫びを上げつつ再度ファルコンを喰い込みと同時に、牙の間にある隙から透明な粘液を大量に分泌する。それらは銀の装甲にばたばたと滴り、腐食効果で強度を奪おうとする。

だが、一瞬、禁じかけたミラーシルバーの輝きは、薄皮を剥がすかのように黒みをおびたクロム・シルバーへと変化し、腐食を拒否する。その色合いは、ファルコン本来の装甲と完璧に一致している。

《クロム》は、メタルカライチャートでは貴金属と卑金属のはば中間に位置する色だ。物理攻撃にも特殊攻撃にも中途半端な耐性しか持たない。ただ、唯一の特徴として、腐食系攻撃だけはほぼ完全に弾く。

それは、意志なき強化外装であるはずの《鋼》が、装備者の属性を吸収することによって怪物の粘液に對抗した——としか表現できない現象だった。だが、そんなロジック面の推測などもうファルコンにはどうでもよかった。

何かに導かれるように両手を持ち上げ、自分の胸を貫かんと火花を散らしている巨大な牙を一つずつ握る。

胸の奥で、ぼっ、と音を立てて燃え上がるものがあつた。

加速世界に降り立ってからの十一月、主観時間では五年以上の歳月で、ほとんど抱いた覚えのない感情。サフラン・ブロッサムへの思慕と、彼女の死に対する絶望を簡明にして生まれ

たそれは——怒り。

「う……うああ……」

喉の奥から、しわがれた声^{こゑ}が漏れる。

タロム・ファルコンは、現実世界でも、怒るということをしない子供だった。大人の言うことを聞き、周りの顔色を窺い、自分を殺して生きてきた。

だから、幼稚園の頃からの親友が、同じ小学校に入った途端にクラスで苛めのターゲットにされた時も、何もせずにただ彼から離れた。眼をつぶり、耳を塞いで、自分以外の誰かが何とかしてくれるのを待った。しかしその誰かが現れる前に、親友だった少年はいなくなってしまう。

本当は、せめてその時怒るべきだった。苛めを主導した子供たちに。何も気づかなかった教師に。そして、見て見ぬ振りをした自分自身に。でも、そうせずに、あらゆる記憶と感情を小さな石になるまで押し固め、深いところに埋めた。

「う……ああ……ああああ……」

今、その石が細かくひび割れ、内部から赤熱したものが溢れようとしているのを感じながら、ファルコンは正んだ歯を上げ続けた。

両手の十指が、じゃきっ！ と音を立てて巨大なかぎ爪へと変ずる。鋭い先端が、ヨルムンガンドの牙にみしみしと食い込む。腕から肩にかけて、装甲のエッジがいつそう尖り、ポリユ

ーム感を増す。

偽のレギオン加入メッセージを送ってきた三十人が、なぜ一人を裏切り國に掛けたのが、今なら解る。彼らにはチートとも思えるであろう強化外装を手に入れたからだけではない。

サフラン・ブロッサムが、自分たちと違うから、理想と、それを実現するための強さを持っていたからだ。

「でも……お前たちだって……」

——お前たちだって、BBブレイヤーである以上、現実世界では多かれ少なかれ異物扱いされてきたはずだ。集団から弾かれ、心に傷を抱えてこの加速世界に來たはずだ。なのに、ここでもまた諍かを導くのか。自分たちと違う者を囲んで石を投げるのか。

「フランは……そんな、お前たちのために………居場所を………作ろうと………」

肺臓から怒りを絞り出すにつれ、アバターの両手が青い光を帯びていく。

いや、それは何かを照らすエネルギーではない。熱を、光を奪うマイナスの波動。

闇色のオーラ。

デュエルアバターが、このような離隔的エフェクトをまとうのは、ゲージを消費して必殺技を発動している時だけのはずだ。なのに今、ファルコンの必殺技ゲージはほぼフルチャージされたまま一ドットも減っていない。

しかし、そんな異常を意識することもなく、ただ切れ切れの言葉を放ち続ける。

「お前たちが……ずっと、この世界で遊べるように……全損の恐怖に怯えなくてもすむように……」フランは、ただ、それだけを……」

いつしか、十本のかぎ爪に深々と抉られたヨルムンガンドの牙は、ファルコンの体から完全に離れている、怪物は「列に並んだ車輪を激しく明滅させ、遂に巨体をくねらせているが、闇のオーラをまとったアバターの両腕は微動だにしない。

「それだけを、願って……いたんだぞ!!」

血を吐くような咆哮。

心の深いところで、凝り固まった感情の石が粉々に砕ける音をファルコンは聞いた。

怒り、物心ついてから今日この瞬間までずっと押し殺してきたありとあらゆる物への怒りが炸裂し、アバターの内側で荒れ狂い、無明のオーラとなって外界へと放たれた。

闇の波動は、まるで物理的圧力をも備えているかの如く、長虫の分厚い外皮を震わせ、ひび割れさせた。甲高い咆哮を撒き散らすエネミーの、内い口の上端が大きく裂けた。

「あ………あああ………あああああ——ッ!!」

金属質の歪みを帯びた絶叫とともに、ファルコンは牙を握った両腕を大きく開いた。

異様な音を立てて、ヨルムンガンドの頭部が左右に引きもぎられた。車輪の大部分が内側から破裂し、深い裂け目からは大量の体液が噴き出す。機わすその亀裂に両手を突き入れ、内部の柔組織を掴み、更に引き裂く、引き裂く。

地面に両脚がついた時、地獄の長蛇はその半ばまでが左右に断ち割られていた。のたうち回り、巣穴に引っ込もうとする巨体の右半分を両手のかぎ爪で捕獲し、左半分は同じく爪先が突つた足で踏んで固定する。全身の力を振り絞り――尻尾まで、一気に裂き尽くす。

ついに完全に分断されたエネミーの体は、一瞬不自然な形で停止してから、幾千もの断片と化して砕け散った。

真地全体を覆う規模の爆散エフェクトの中心から、何か細長いものが實體化し、ファルコンの眼前に突き立った。それは、清冽なクリスタルホワイトの刀身を持つ、一本の長剣だった。エネミードロップの強化外装だ、内部に星を閉じ込めたかのように煌めくその剣に、ためらわず手を伸ばし、柄を握る。

途端、長剣は小さなカードへと姿を変じ、消える。視界上部に、小さなシステムメッセージ。
「YOU GOT AN ENHANCED ARMAMENT (STAR CASTER)」
 軋むような声で、呟く。

「着装、(スターキヤスター)」

右手の中に、神々しいデザインの長剣が再出現する。しかし顔色のオーラは即座にその剣をも覆い、色合いと形状を正めていく。透き通るクリスタルは、ざらつくクロムシルバーへ。直線的な柄は、縞々しくうねる。刀身そのものも幅と厚みを倍増させ、刃の数箇所が牙状に尖る。新たな姿を得た大剣を両手で握り、体の前にかざす。

黒ずんだ銀色の刀身に、ひとつのデュエルアバターが映っている。それはもう、シンプルな細身に丸いヘルメットを載せたクロム・ファルコンではない。破壊の意志そのものをオブジェクト化したような、凶悪極まるシルエット。

唯一、もとのつるりとしたマスクだけが、オープンヘルムから露出している。しかし闇のオーラはヘルメットの顔部分に凝集し、顔全体を覆えるサイズのバイザーを作り出す。

それが下りたら、もう元には戻れない。直感的にそう悟る。

……僕が変わってしまったら、きっとフランは悲しむだろう。

……でも、もう彼女はこの世界にはいないんだ。

今この時を最後に、クロム・ファルコンの名前は捨てて。サフラン・プロッサムと一緒に、この地に葬る。彼女の理想も、懐しさも、思いやりも、全部ここに埋めていく。

なぜなら、それを拒否したのは、崖地の周囲に立ち尽くしているブレイヤーたち自身なのだ。共存ではなく闘争を、手を繋ぐのではなく、命の奪い合いを。親愛よりも、怒りと憎しみを彼らは望んだ。ならば――

応えよう。

両手の剣を高々とかざし、体の奥底から吹き上がってくる憤怒のままに、もう一度吼える。

「お……おとおおお……」

全身から迸った闇のオーラは濃黒の雷を生み出し、金属質の地面を次々に穿つ。足下から放

射状にひび割れが走り、びりびりと大地が震える。地鳴りと共鳴するほどの音響で、向も呼ぶ。

「おおお……オオオオオアアアア——！！」

無限に湧き上がる怒りそれ自体が何らかの物質となり、世界そのものに干渉していく感覚。それが錯覚ではない証として、視界左上に表示されたままのシステムカラーのフォントすら小刻みに明滅している。装束中の強化外装を示す(「THE DESTINY」及び「STAR

」行に重なり、融合し、新たな単語を削り出す。

(「THE DISSASTER」)

「グ……、ル、アアアアアア！！」

その咆哮は、最早人のもものではなかった。飢え、猛る、獣の咆哮だった。がしやり、と激しい音を立て、顔のバイザーがひとりでに下りた。

視界が、濃いグレーのフィルタに覆われる。しかし解像度は増し、輪を作って並ぶデュエルフアバターたちの表情がくつきりと見て取れる。そこには途端いと驚き、そして不安の色が濃く滲んでいる。しかしもう、ファルコンには彼らが何を感じ、考えているかなどまるで意味を持たない。彼らは殺戮の対象でしかないからだ。バイザーの下で、両眼を細め、最初に狩るべき個体を探る。

輪の一端所に意識を向けた時、そこに立つ数人が交わしている囁き声の会話が、まるで高指向性のマイクを向けたかのように増幅されて聴覚に届く。

「……ージの全回復を確認。必殺技「ゲージ」の消費なし。間違ひあらへん、イマジネーション回路による（メイン・ビジュアルライザー）のオーバーライド現象や」

声の土は、やけに巨大なアイレンズを四つも充ちるごく小柄なアダターだ。それに答えるのは、ファルコンとプロッサムを奇怪な技で拘束したあの黒い横眉アダター。

「やはりコンセントレーションの深化よりもセンチメントの爆発のほうが圧倒的に早く現象を起こせるようだ。制御可能かどうかは別問題だが」

四つ眼アダターが頷く。

「そうやね。それと、一定レベルを超える強度の（心傷）を持つもんがメタルカラー化することもほぼ確実やわ。ただ、あの融合現象が（七重外装）固有の力なんか、単にあいつがメタルカラーだからなんかは、うちの（アナライズ）でも何とも言えんなあ」

「ふむ。可能なら、時間をかけて分析して欲しいところだが……」

その時、二人の背後から、異なる声。

「確保できますが、バイス？」

一切の雑味のない、まるで雪解け水のようにクリアな甘さを漂えるその声は、間違ひなくプロッサムを強制蘇生させ続けたプレイヤーのものだ。バイザーの下でいっそう眼を凝らすか、

不思議な光が邪魔をして姿を捉えられない。

「やってみましょう」

精層アバターは、薄板を並べただけの頭部を動かせると、同じデザインの左手を持ち上げた。その腕を構成する数枚の板が、順に滑るように地面に消える。直後、ファルコンの直後ろにあの黒い十字架が音もなく出現し、奇怪な引力で全身を貼り付けようとする。

だが、

「ダ……ルアッ！」

短い唸りとともに、右手の剣で背後を一突きすると、ガラスが砕けるような音と手応えを生んであつけなく十字架は破壊された。直後、彼方の術者の左肩から、ダメージエフェクトの閃光が逃る。

「おっと、これは凄いな、ノーマルな技ではとても押さえられない」

そんな呟きを漏らす精層アバターを、ファルコンは強く見据えた。

会話には意味不明な単語が多すぎたが、一つだけ明らかながある。それは、奴らが全てを固めたということだ。何らかの企てに基づいてサフラン・プロッサムを呼び出し、《無限エネミー・キル》で開き殺したということだ。

ならば、最初に狩るべきは奴らだ。

人柄を両手で握り、重々しい動作で人上段に振りかぶる。クレーター外周で遠隔つたよう

にびわめく数十人は完全に無視し、漆黒の精層アバターに向かって、一歩踏み出す。同時に、無音の技名発声。

——フラッシュ・プリンター！

超速のレポートと同時に斬り下ろされた刃は、漆黒のアバターに残された右腕を根本から断ち切った。しかし、顔らしい顔を持たない相手は、さしたる動揺の気配も見せずに一歩退くと、いきなり両腕を失った体そのものをばらりと分解させた。

それらは二枚の巨大な板へと変わり、隣に立つ四つ眼アバターと、背後の光に包まれた何者かを左右から挟み込む。いかなるロジックなのか、板はそのまま薄い一枚へと閉じてしまう。

すうっ、と地面の影に沈み込もうとする漆黒の甲板に、ファルコンは剣を横薙ぎに叩き付けた。だが、上端を一部斜めに切り飛ばすに留まる。板は影にささやかな波紋を作って完全に沈降し、フィールドから隠れいた三人の気配が消える。

「ク……ルル……」

敵を逃がしたことに怒りの唸り声を漏らした、その数秒後。

ぎいん！ と耳障りな金属音と、軽い衝撃が右肩で発生した。

ゆらりとした動きて振り向く。そこに立っているのは、中型の青系デュエルアバターだ。両手で、木刀と長刀のあいこのこのような大型の近接武器を握っている。よく顔を見知った、親しい、と言っている相手だった。数少ない（第一世代）の一人で、その長柄の直撃は、かつての

タロム・ファルコンの装甲すら砕いたものだ。

だが、ちらりと確認した右肩には、ヒビはおろか凹み一つ存在しない。

信じられない、という顔で何かを言おうとしている相手の名前を思いだそうとすらせずに、ファルコンは闇のオーラをまとう大剣を無造作に斬り下ろした。

ドマ、という重苦しい音が冷たい空気を揺るがす。青果アバターの携える武器がまず中程から上下に離れ、次いで所有者自身の上体もずりずりと滑って、地面に転がった。埋れて傾いた下半身が途中で停止し、上半身と同時に爆散。あとに、装甲色の小さな光だけが残される。

この場に存在する三十数名の中では間違いなく最高レベルに達していたブレイヤーが、たった一撃で居られる光景に、残る者たちは直しく動揺する気配を漏らした。どうなってるんだ、話が違うだろ、というような震え声が、次第に音量を増していく。

「やべえ………に、逃げろ目」

誰かが叫んだ途端、壘を切ったように一方向へ走り始める。数十メートル先の芝薙パーキングエリアに存在する離脱ポイントから現実世界へと逃げるつもりなのだろう。——しかし、

フラッシュ・ブリンク。

そう念じると同時に黒銀の鎧はかき消え、逃げる者たちのすぐ目の前に出現する。再度の斬撃。三つの首が同時に落ちる。

「う………うわ………うわああああ！」

悲鳴、叫喚、尚も逃げようとする者も、周囲のビルに隠れようとする者も、反撃を試みる

者もいたが、闇の力は何れもなく彼らを襲い、一撃でダメージを奪い尽くしていく。

ファルコンを突き動かしているのは、最早単なる怒りではなかった。恨みや復讐心すら超えた、計絶なる決意——あるいは呪詛だった。

この世界を破壊する、という。

もし後年の、ブレイン・バーストの秘匿されたロジックに通じたバーストリンカーがこの時のクロム・ファルコンを見たら、こう判断したであろう。あの闇色の過剰光は、純粹なる負の心意の顕現だ、と。絶対的な否定の意志によってあらゆる存在を砕く、心意システムの暗黒面そのものだ、と。

わずかに数十秒の殺戮が終了した時、窪地の周囲には無数の残り火が音もなく揺れるのみだった。

黒鯉の破壊者は、たっぷりと血を吸った大剣を地面に突き立てると、その場で静止した。

一時前後、彼らが蘇生するのを待ったために。

この日、加速世界から、一気に三十人以上のプレイヤーが完全消滅した。

たった一人、幸運にもポータルから生還してきた者が、恐怖に震えながら語った恐るべき顛末

——凶暴な鎧をまとったヘタロム・ファルコンに仲間全員が皆殺しにされた、という話は、

当初半信半疑で受け止められた。

しかし、その噂を確かめるためにファルコンに一般対戦を挑んだ者が例外なく大剣のたつた一撃で倒られるに及んで、誰もが認めざるを得なくなった。

ほぼ一年にわたって成長してきた加速世界に、恐るべき災禍が生じたことを。

いつしか、ブレイヤーたちは誰も破壊者を本来のアドバイザーネームでは呼ばなくなっていた。名前の下半分に強化外装の名称を冠し——こう呼んだ。

ヘタロム・ダイザスター。

略転。

スポットライト。

白い光の輪の中に、ダークメタルの鎧に身を包み輝々しい大剣を構えた騎士が浮かぶ。うずくまるその全身はぼろぼろに傷つき、ひび割れ、剣も激しく刃こぼれしている。

彼をここまで追い詰めるために、加速世界最強のブレイヤーたちが数限りなく対戦を挑み、時には一対多数のバトルロイヤルモードで消耗させたのだ。

だが破壊者は一度たりとも対戦を拒否せず、それどころか（一日一回）の乱入制限すら解除して、あらゆる条件の戦いを受けた。普通ならば、一般対戦でも十回も連続すれば精神的疲労でまともに動けなくなるはずなのに、一日に軽く百を超えるデュエルを喰い抜き、魂そのものの

を摩滅させていった。

いつしか剣のまとう闇のオーラは薄れ、鎧も輝きを失ったが、それでも破壊者は戦い続けた。勝率は低下し、ポイントを少しずつ削られ、そしてついに無制限中立フィールドに於ける最大最後の戦いで全員の調停まで追い詰められた。

うずくまる騎士の周囲から、じりじりと複数デュエルバターが同合いを始めてくる。

全員が現在最強と言われる子練たちだ。大レギオンを率いる（純粋色）すら数含まれて
いる。

絶死の破壊者が、剣にすがってよろよろと立ち上がる。

凶暴なデザイナーのバイザーが一部欠け落ち、内側から滑らかなヘルメットの曲線がわずかに
覗く。

そのマスクが加速世界の空を見上げる。

僕は——かつてクロム・ファルコンという名前だったBBプレイヤーは、今日ここで消える。
記憶消去、あるいは思考操作処置の噂が本当なら、僕は加速世界のことを何もかも——あれ
ほど愛したサフラン・ブロッサムのことすらも忘れて、難しい言葉なんか一つも知らない、た
だの小学二年生に戻るのだろうか。

でも、僕のこの怒り——悲しみ——そして絶望は残していく。

僕も、そしてプロッサムも、権力なんか求めてなかった。(龍)の方で加速世界の覇権を握ろうなんて、少しも思ってたなかった。ただ皆と一緒に、いつまでもこの世界に居続けられさえすれば、それでよかった。

鏡のような(龍)の表面に、支配や破壊、略奪の欲望を見たのなら、それは見る者自身の欲が映っていたに過ぎない。

力を望んだのは彼らだ。サフラン・プロッサムを残酷な方法で何度も何度も殺した者たちのほうだ。

ならばさよう。

僕の怒りと、プロッサムの苦しみを、この(龍)——(サ・ディザスター)に残す。今後、力への渴望に駆られてこれを身につける者は、あらゆるパーストリンカーを襲い、壊し、喰らうようになる。喰らって力を奪い、無限に強くなる。最後の一人になるまで。どこまでも広がる加速世界の荒野にただ一人残る、終焉の時まで。

それが、お前たちの望みの本質なのだから。

僕は、この世界を喰う。穢す。たとえどこでいつとき消えても、僕の怒りと憎しみは——何處でも、廻る。

2

細い指先が頬を撫でる感覚に、有田春雪は薄く両眼を開けた。

ぼやけた視界がゆっくりと焦点を結ぶ。純白の装甲を持つ小さな下、同じ色の、小袖を模した形状の腕。可愛らしいフェイスマスクと、つぶらな緑色のアイレンズ。

膝立ちになって手を伸ばす、かつてのネガ・ネビュラス（四元素）にして浄化能力者であるレベル・パーズトリンカー（アーダー・メイデン）の姿を、ハルユキは白銀のヘルメット越しにしばし見詰めた。

メイデンの華奢な指先には、透明な雫が一滴光っている。気がかりそうな彼女の表情に首を傾げてから、ようやくその雫が自分の頬に流れているものであると察する。

「え……あ………」

揺れた声を漏らしながら、慌てて右手で頬を撫り、半分オープンにしていたヘルメットのシールドを全部閉じた。ハーフミラーの銀歯に包まれたデュエルバイター（シルバー・タロウ）の顔を俯けさせ、もともと「言い訳する」。

「あの、すいません、大丈夫です……寝てたり、なんだかすごく……すごく長い夢を……」
そこで口を止め、眉を寄せる。

夢を――見ていたのだ。

その長い長い夢の中で、ハルユキはシルバー・クロウではなかった。とてもよく似た、しかし色合いがわずかに異なるメタルカラー。だが、覚えてるのはそれだけだ。どこに行き、何をして、どうなったのかは真緑のように白く柔らかい陸地に阻まれて思い出せない。

ただ、胸の奥に、ぼつかりと穴の開いたような感覚だけがわずかに残っている。磨りきの中にもくもりと鋭い痛みが走るこれは……喪失感……。

……………大好き、だよ……………。

聞き覚えのない誰かの声が耳元を過ぎり、なぜかまだしても滲みそうになった涙を、きつい瞼きでどうにか堪える。大きく頭を振り、ついでに冷たい空気を思い切り吸い込んで奇妙な切なさを押しやると、改めて周囲を確認した。

いつのまにか暗くなっている。頭上には、現実世界の東京では望むべくもない鈴なりの星。空が見えるのは、ここが建物内ではなく中庭的な空間だからだ。

足を投げ出して座るハルユキが背中を預けているのは、直徑一メートルほどもありそうな太い円柱。すぐ右手には、空まで届きそうな高い壁がそびえる。

蹴り込む前に見た地形と、何も変わっていない。だが、最後に自分の脚の間を見下ろし、そこにあったはずの分厚い氷が真っ白い土砂利に変わっているのに気づいて首を傾げる。慌てて振り向くと、後ろの柱も、薄青い氷ではなく木造りの木製だ。

「あれ……僕が寝てる間に《変遷》があつたんですか？」

目の前のアーダー・メイデンにひそひそ声で訊ねると、白と緋の二色を持つ巫女型アバターはこくりと頷いた。幼くも凛とした響きのある声で、こちらもひそつと応答する。

「そのようなのです。でも、私もターさんの隣で寝ていて気づきませんでした」

《変遷》とは、この世界——ブレイン・バースト・プログラムによって創出される《無制限中克フィールド》のステージ属性が、一定時間で切り替わる現象のことだ。シルバー・クロウとアーダー・メイデンがこの場所では獣を取り始めた時は、あらゆるものが凍てついた《氷室》ステージだったはずなのだが、今は雪も氷もひとかけらも見つからない。

まるで季節が戻ってしまったかの如く木々は色鮮やかに紅葉し、柱は木製、壁は白塗りだ。純和風、とても言いたくなるこの属性は……

「(不安) ステージなのです」

そう囁きながら、緋色のアーマースカートを広げてべたりと止座するアーダー・メイデンの姿は、余りにも周囲の光景にマッチしていてまるで一幅の絵のようだ。思わずほけーっと見入っていると、小柄な巫女は気恥ずかしそうに驚いてしまうので、慌てて眼を逸らす。

この可憐にして奇麗なデュエルアバターを導くのは、いま中学一年のハルユキより四学年も下の少女、四葉宮崎。梅郷中の系列女子校・松乃木学園初等部に通う四年生で、つまりは本物のお嬢様だ。年上の男子からじろじろ見られる経験などほとんどないであろう彼女から外し

た視線を、再び開国に泳がせる。

ずらりと南北に並ぶ朱塗りの柱、その奥に伸びる、石敷きの大路、オレンジ色に揺れる無數のかがり火。そして、北の彼方に重厚なシルエットを見せる巨大な宮殿。

この場所には、和風の《平安》ステイジ属性は究極的に相応しいと言える。

なぜならここは、現実世界の千代田区千代田、一番すなわち皇居に相当する加速世界の中心――絶対不可侵の《帝城》の中なのだから。

ハルユキと、所属するレギオン《ホガ・ネビュラス》の面々は、今日――二〇四七年六月十八日大晦日の午後七時二十分過ぎに、現在の陣客になってから間違いない最大のマッションへと挑んだ。

帝城の南門を守護する超級エネミー、《四神スザク》の祭壇に封印されてしまったアーダー・メイデンを救出するというその困難極まる作戦は、しかし手順的にはごくシンプルなものだった。

頭首たる闇魔導／ブラック・ロータスが、疑似回復能力を持つチユリ／ライム・ベルの支援を得てスザクに遠距離攻撃を行い、ターゲットを取る。南門から伸びる大橋を前進するスザクを飛び越える形で、楓子／スカイ・レイカーをブースター代わりにハルユキ／シルバー・クロウが全速飛行し、タタム／シアン・パイルの合図でダイブする謎／アーダー・メイデンを出現

と同時に回収、上空に百八十度ターンして橋から脱出する――。

作戦は、上手く行くかと思えた。

しかし、最後の最後で、余りにも予想外の現象が発生した。ハルユキは一切手出ししていないのに、スザクが攻撃対象をブラック・ロータスからシルバー・クロウへと移動させ、後方から超威力の火炎ブレスを放ってきたのだ。

アーダー・メイデンを地上から拾ったハルユキは、背中を高熱の炎に炙られてターンすることでもできず、そのまま前へと突進した。スザクを倒さねば聞かないと言われる帝城南門に激突して果てるしかないのか、と覚悟したその時――いかなる理由によってか、門が一瞬、わずかな隙間を作った。ハルユキと謎は、選択の余地なくそこに突入した。

背後で門の閉まる音を聞きながらハルユキは墜落し、一瞬意識を失ったあと、両腕で強く抱き締めた誰に訊ねた。

「あの……、僕たち、生きてるのかな……?」

その問いに対する謎の答えを聞いた時の衝撃は、今も頭の奥に強い余韻を残している。

「……生きています。でも……、ああ、でも……」

「……………」は……………」の場所は、《帝城》の中なのです」

「……今でも、信じられないよ。僕たちが、あの《帝城》の中にいるなんて……」

円柱に寄りかかったままハルユキが唸くと、すぐ明て正座する諦もこくりと頷いた。

「中に入れたことも驚きですが、こうして六時間以上も生き延びていることが更に驚きなのです」

「ま……ば、僕、そんなに寝てた？　じゃあこの暗さは、ステージの特性じゃなくてもう夜になつてゐること……う」

慌てて言い返す。無制限中立フィールドでは、メニュールウインドウを出せば累計ダイブ時間は解るものの、正確な内部時間——（この世界の時間で今何時何分なのか）を知る方法はいく少ない。フィールドのどこかには、この世界が始まって以来過ぎ去った全ての時を刻んでいる大時計があるらしいが、見るのが恐ろしい気もする。なぜならその時計は、七年の一千錠、つまり七千年を超える年月を表示しているはずだからだ。

諦はこくりと頷くと、小さな手で頭上の夜空を指した。

「（中略）ステージでは星が見えますから、星座の位置からすると、すでに真夜中に近くなつていふと思われるのです」

「は、ははあ……なるほど……」

唸きつつ、ハルユキは満天の星空を振り仰いだ。

約六時間前——もちろん加速時間で、だが——赤城南門に接する中庭の一角に落下した二人は、身を寄せ合つたままそれぞれの衝撃と感慨をしばし噛み締めたが、いつまでもそこでじっ

としている訳にはいかなかった。なぜなら、南門からまっすぐ北に伸びる大路と、その彼方に鎮座する帝城本宮、そして大路の各所をゆっくり移動する人型のエネミー集団が眼に飛び込んだからだ。

エネミーは、全高三メートル程度と《四神》に比べれば遥かに小型だったが、戦国武者を思わせる重厚な具足をまとい長大な太刀を佩くその姿は、ハルユキを真え上からせるに充分な迫力を放散していた。しかもそいつらが最低三体の集団を作って闊歩しているのだ。

更に、南門の左右、城壁の内側に沿って伸びる屋外回廊にも武者エネミーの影があり、がしやりがしやりと鎧を鳴らして近づいてくるとなれば、即座に行動を開始する必要があった。と言つても、戦うのは無謀すぎる。ハルユキのHPゲージはスザタの炎に灼かれてほぼ半減しているし、誠として無傷ではない。

ゆえに二人は、とりあえず大路と回廊を避けて遠路状の庭園エリアに逃げ込み、一本の円柱の陰にとりあえず安全と思われる休憩場所を確保したのだった。折しも日没となり、城門の外に分かれてしまった黒雪姫たちがどれほど心配していることかと気に掛けながらも、精神的疲労からか柱の根本に座った姿勢で眠り込んでしまい——そして今に至る、という訳だ。

この安全地帯に潜り込んだ頃には夕陽が「氷雪」ステージの曇り空を紫に染めていたのだが、今やその色もすっかり消え去り、漆黒の天蓋に星々がしんしんと光っている。

満の言葉どおり、それらの星たちは、昔フルダイブ授業で習った星座の配列を完璧に再現し

ているようだった。背中を柱に預けたまま、東の空を見上げていくと、ひときわ明るい純白に輝く星が眼に留まった。あれは、確か……

「こと座の……ベガ、かな」

独り言のつもりで呟きに、正座したまま空を見上げた隣がこくんと頷く。

「ご名答、なのです。日本ではおひめ星とも言います」

無星な時間とばかり思っていた学校の授業から得た知識が、よもやこんなところで役立つとは思わず、ハルユキはつい嬉しくなって星空を指さしながら続けた。

「てことは、その右下に、わし座のアル……アルティルがあつて……」左下が、はくちよう座のデネブだね。ええと……ひこ星はどっちだっけ……」

くすりと笑い、誰も星女装束の小袖様の服を持ち上げた。

「アルティルなのです。その三つを合わせて〈夏の大三角〉と言います。今は六月ですから、まだちよつと位置が低いですか」

「そっか。てことは、加速世界の星空は、現実の季節に準拠してるんだ……」

死地のただ中にあることも東の間忘れ、ハルユキはある種の不思議な感慨に打たれて一心に星空を見詰めた。

ソーシヤルカメラ・ネットの映像から現実の地形を再現する仕組みには、ゲームの戦術戦略要素を増す意味があるかもしれない。しかし夜空はどう考えても単なる背景だ。光点をランダ

ム生成した一枚絵を貼り付けておくだけでも、文句を言うプレイヤーはいない。

しかし、敢えて現実世界と同じ位置に星々を配置し、しかも季節による星座の移り変わりまで再現するからには、そこには何らかの意図あるいは主張が込められているはずだ。おそらくは——ただのゲーム、ただの仮想世界ではないのだ、という……。

「初期のバーストリンカーたち……昔は（BBブレイヤー）」という言い方をしていたそうだが、彼らも……」

不意に、両手を膝の上に戻した露が、静かに語り始めた。

「加速世界の夜空に、現実のそれとまったく同じ……いえ、人工光が明るすぎる東京では本来望めないほどにクリアで美しい星々が煌めいていると気づいた時、一様に感じるものがあつたそうです。主立ったレギオンに、宇宙を連想する名前が付けられているのは、それが理由なのです」

「えっ……宇宙関係の名前、そんなに多かった……?」

ハルユキが首を捻ると、幼い巫女は清純なマスクに仄かな苦笑を浮かべる。

「七王のレギオンは、全部そうなのです。私たちの（ネガ・ネビュラス）も、暗黒星雲……英語では厳密にはダーク・ネビュラと言うらしいですが、それをイメージした名前ですし、赤のレギオンの（フロミ・ネルス）は太陽表面に噴き上がる紅炎、青のレギオンの（レオニーズ）は獅子座流星群のことです」

「へ……へえ……そうだったのか……」

——きつとチユやタタは最初から気づいてて、言わずもがなと思つてたんだろなあ。「知らなかったの？」とか言われる前に教えてもらえて本ッ當によかったなあ。

などと内心でコソソリ胸をなて下ろしながら、ハルユキは続けて訊ねた。

「つてことは、白のレギオンの……ええと、(オシラトリ・ユニヴァース) つてのも、別にその、白鳥さんがレギマスってわけじゃなくて、やっぱ宇宙関係の名前なの？」

すると議は再び、ほんの少しアキラ要素を含有する笑みを滲ませたが、すぐに表情を収めた。視線を伏せ、なぜかかすかに張り詰めた声で、囁くように言う。

「はい。(オシラトリ・ユニヴァース) は、振動宇宙……という意味なのです。でも、私はまだ学校で習っていないので、正確な意味は解りません……」

「し……んどう、うちゅう……」

——宇宙つて、別に揺れたり流れたりしないよなあ。

左右に首を捻るが、中学二年生のハルユキも理科の授業でそんな単語を聞いた覚えはないし、そもそも義務教育で教わるレベルの言葉なのかも微妙だ。覚えていたらあとで検査してみよう、と思いつつ、ハルユキは改めて満天の星空を見上げた。

夏の太三角の上、ちやうど天頂あたりには、やや光の弱い恒星たちが幾つも固まっている。あれは確かヘルタレス座か、その左に、英雄ヘルタレスに退治された百頭竜ラドンが天に上つ

たという、りゆう座。

そして、その更に左には、大三角に迫るほど明るい光を持つ星たちの並びがあった。
おおくま座だ。とくにしっぽ部分が強く輝いている。ゆえに、古代中国ではあのしっぽだけを単独の星座としていたと授業で習った。

長い柄を持つ、ひしやくの形。

北斗七星

——どくん、と不意に心臓が跳ねた気がした。頭の奥深くで、小さなスパークが断続的に発火する感覚。眼が、ひしやくの柄を作る三つの星の真ん中へと吸い寄せられる。名前も知らないその星だけが、スパークと同期して脈打っているように感じられる。

脈動する疼きは、脳の中心から、ゆっくりと中枢神経を下っていく。首を流れ、肩を通過し、背中の真ん中、左右の肩甲骨の間に達し——ずきん、と痛む。ずきん。ずきん。自分自身の体が痛んでいるようでもあり、異物を埋め込まれたようでもある。この感覚………

「……さん、クーさん」

そつと右腕を揺すられ、ハルユキははつと顔を上げた。

すぐ近くで、アーダー・メイデンが紺色のアイレンズに気がかりそうな光を浮かべている。慌ててかぶりを振り、口こもりながら答える。

「ご……ごめん、ちよつとぼーつとしちやつて……」

「そう……ですか。なら……きつと私の見間違ひなのです。すみません、ターさんの体を……
一瞬、影みたいなものが包んだように思えて……」

「……………」

どこかで聞いた気がする言葉だ。そう昔のことではない。一週間の、ヘルメス・コード
縦走レースの途中、シャトルがワープ空間を走っている時に……スカイ・レイカーがそれと
同じような指摘を……。

「……き、気のせいだよ。僕、何もしていないよ」

あの時とはほぼ同じフレーズを口にしてから、ハルユキはそこはかない不安を無意識に糊塗
するかのようになを覆ねた。

「それ、より……そろそろ、これからどうするのか考えないとね。いつまでもこの安全地帯で
じっとしてゐるわけにも行かないだろうし」

「……ええ、それは……そうなのです」

誰かまた、懸念を振り払うためか大きな仕事で領き、くると周囲を見回した。

二人は今、帝城南門内側の広場から、北東に五十メートルほど移動した場所に隠れている。
すぐ西に立ち並ぶ朱塗りの円柱の向こうは、南北に伸びる石敷きの大路。東には日本庭園ふう
の、入り組んだ迷路が広がる。南は、円形の城壁に沿って連なる回廊。

広い大路と回廊は、恐ろしげな武者エネミーたちが一定コースで巡回しているので、かいく

ぐって移動するのは困難だ。東の庭園も、時折ばしやんと大きな木や、ずりずりと重いものが運びずる音が聞こえてきて、とても奥に入り込む気はしない。

どうにか移動できそうなのは、円柱の列と庭園通路のあいだの狭い空間を、柱に隠れながら北に向かうコースだが、北にあるのは出口ではなく密城の本体たる宮殿だ。巨大な神社を連想させる《平安》ステージの意匠に従えば、本殿とても呼ぶべきであらうその内部には、武者エネミー以上の怪物たちが闊歩しているのは間違いない。目的は密城攻略ではなく、演——アーダー・メイデンと共にポータルから生還することなので、うかつに本殿に近寄って、更なる《無限EK》状態に陥ることだけは避けねばならない。

「……恐らく……」

周辺からハルユキに視線を戻した際は、ちよこんと正座したまま考え込むように口を開いた。「ロータスやレイカーたちは、すでに監視庁のポータルから現実世界に帰還しているはずなのです。無制限中立フィールド内で、戦陣中に仲間とはぐれてしまった時は、危険を冒して留まり続けずに脱出できる者から脱出するのがセオリーですから」

「うん……それは、そうだよな」

ハルユキが頷くと、年下の少女は、幼くも明晰な口調で続ける。

「そしてその場合は、《緊急回避切斷》が設定してあれば、先に離脱した者がそれを発動させ、現実世界で状況確認を行うこととなります。なので、こうしてここで持ち続けていれば、その

うちデイスコネクションして、とりあえず有田さんのお家に帰れることは帰れる……はずなのですが……」

（緊急回避切断）とは、ニューロリンカーをグローバル接続させる時、無線ではなく有線でホームサーバーなりモバイルルーターなりを経由させることだ。そうしておけば、たとえ無制限中立フィールドでポータルまで辿り着けなくとも、先に脱出した仲間の操作で踏み台機器の回線を切断し、ひとまずログアウトだけはできるからだ。

現在、ハルユキと説、そして黒雪姫・楓子・タタム・チユリの六人は、ハルユキの自宅リビングルームに集合し、ニューロリンカーを数珠つなぎさせている。だから、密城南大橋のすぐ外にある警視庁のポータルから帰還した黒雪姫たちが、ハルユキのニューロリンカーと有田家ホームサーバーを繋ぐXSSBケーブルを引っこ抜けば、その瞬間ハルユキと説は自動バースト・アウトすることになる。

しかし説は、尚も考え込むようにアバターの口を動かした。

「……でも、状況が状況なので、ロータスたちもきっと迷っているのです。なんと言っても、私とターさんは、あのスザクの守護を方に一つの命懸けですり抜けてしまったのですから、（番城）の内部を偵察できる機会など、きっともう二度とないのです」

「二度とない……かな？ さっきとまったく同じ作戦で門に突っ込めば、もしかしたらもう一度……」

もちろん一度とやりたくはないが、あくまで可能性の話としてハルユキがそう口にする、
 誠は左手を持ち上げ、ハルユキの肩越しに南西方向を指さした。

「ターさん、あそこを見てください。南門の内側です」

「う、うん」

振り向き、背後の円柱の陰からそっと顔を出して、五十メートル先にそびえる巨大な城門を
 見やる。

左右二枚の大板で構成される門扉は、とてつもない質量及び密度で密城の内と外を絶対的に
 隔てている。六時間前、わずかに数十センチにせよ緩んでハルユキたちの通過を許したことが今
 更ながらに信じられない。

誠が指をさしているのは、門扉のちょうど中央あたりだった。地上のかがり火の明かりがど
 りどり届くその箇所に眼を凝らすと、確かに何か大きなものが見えた。

レリーフ、だろうか。一辺三メートルはあろうかという正方形の金属板が、左右の門扉を繋
 いでいる。表面には何か細かい彫刻が施されているようだが、単なる装飾的オブジェクトとは
 思えない重厚さだ。

「……………あ……………」

眼を凝らしていると、不意にレリーフの図柄がくつきりと浮き上がって見えた。

左右に大きく翼を広げ、長い首の先端で鋭い嘴を開いている巨鳥。あれは《四神スザク》そ

のものだ、

「門の……封印……」

ハルユキが無意識のうちに呟いた言葉に、誰がこくりと頷く気配が伝わった。

「私も、そう思います。……ターさんは、恐らく気づかなかったと思うのですが……実はあの封印は、私たちが門から中に突入した時点では、何者かによって破壊されていたのです」

「え……ええっ!?」

思わず驚きの声を上げてしまい、慌てて口を押さえる。ポリュームを落としつつ、急ぎ込むように聞き返す。

「は、破壊……!? 元々左右に割れる構造とかじゃなく……壊れてた、の?」

「私には、そう見えたのです。中央が真っすぐ縦に分離していたのではなく、まるで巨大な剣が二度斬り付けたかのように、斜めの十字に断ち割られていました」

アーダー・メイデンは、その様子を再現するために、五指を伸ばした右手で空中にパターンを描いてみせた。手を下ろし、いつそう密やかな声で続ける。

「しかし、私たちが突入し、門が閉じた数秒後には、封印はあのとおりに完全に復元してしまいました。——この世界に於いて、鍵や封印のたぐいは全てシスナム的ロクタの比喩なのです。

もしあの封印が健在なら、大門は（スズク）を倒すことなしには決して開かなかったはず。つまり……何か、あるいは誰かが、内側から側であの封印を切断してくれていたからこそ、門は

私たちが近づいただけで「瞬にせよ開いたのだと……私はそう思うのです……」

「で……でも、待ってよ、ってことは……つまり……」

彼方（あな）でかがり火を反射する金屬レリーフを凝視（くわい）したまま、ハルユキは銀面の下で何度か口を開いたり閉じたりさせた。考えを整理し、ようやくその先を言葉にする。

「それってつまり、僕らより早くこの（帝城）に入ったバーストリンカーがいて……しかも、後からくる誰（たれ）かのために、わざわざ封印を破壊（はくわい）しておいてくれたって、そういうこと……？」

「……はい、私はそう考えます」

「だ……だけど、だけどさ、四神（しじん）スザクは健在（けんざい）だったよね。てことは、そのバーストリンカーは、いったいどうやって帝城に入ったの？ ああ封印が、メイさんの見たとおりに門の閉鎖（へいさ）ごとくに自動復元するなら、加速世界が生まれた時から壊れてたってことも有り得ないし……その誰かは、スザクを倒す以外に、門を破る方法はない……はずじゃあ……」

再び両手を膝（ひざ）の上で重ねた諭（のたま）は、そつと首を左右に振った。

「それは、私にも解（と）らないのです。——更なる情報を得るためには、恐らく……帝城本殿に入る必要があるのです……」

最後は囁き（ささや）にまでひそめられたその言葉に、ハルユキは視線を北——屋空を黒々と切り取る本殿のシルエットへと向けた。

——あそこに、加速世界の中心のそのまた核心に入る……だって……？

無理だ。そんな大それたこと、絶対にできない。だいいち、本殿の正面入り口は、あの恐ろしい^{おそろしい}鎧武者たちよりもっと凄^{こわ}いエネミーに守られてるに決まってる。そんなのを、どうやって突破しようって……

面影をぎゅつと締めながら、後方向きな思考をそこまで遅らせた——その、瞬間。

ハルユキは、顔のどこか深いところにあるスクリーンに、不思議な光景がうつすらと映し出されるのを見た気がした。

自分のアバターは確かに玉砂利の上に座ったままなのに、もう一人の自分が立ち上がり、北に向かって進んでいく。大路を巡回する武者エネミーたちの視線を円柱に隠れてやり過ごしながら、慎重に、しかし着実なペースで本殿に近づく。目指すのは、厳重に守護された正面口ではなく、そこから東に数十メートル離れた白壁にあるひとつの窓……。

——の封印のことはさておいても、どちらにせよ移動はしなければならぬと思うのです」耳に飛び込んだ誰の声が、ハルユキの奇妙な幻視を壊った。はっと眼を見開き、何度か瞬きを繰り返す。そんなハルユキの仕事に気づいた様子もなく、誰は自身も彼方の本殿を見据えたまま、ひそやかに語り続ける。

「こうして待つていれば、いつかはロータスたちが私とターさんを強制バーストアウトさせてくれるでしょう。でも、たとえいつとも現実世界に戻れても、次に《アンリミテッド・バースト》コマンドを使った時は、またこの審城内^{さいえい}に出現してしまうのです。それでは《無限E

「K」状態と大差ないのです……」

「あ……う、うん、そうだね……」

どうにか思考を立て直し、ハルユキは相づちを打った。

「僕としのみ……じゃない、メイさんがどこかのポータルから正堂に離脱しないと、今回のミッションは終わらないんだ。そのためには、もう一度あの門を開けて外に出て、スザクの攻撃をかわして機向こうの監視席まで辿り着くか……それとも、この帝城の中で新しいポータルを見つけるしかない……」

「はい、その……通りなのです」

こくん、と頷くアーダー・メイデンの緑色の面影をじっと見詰め、ハルユキは大きくひとつ深呼吸してから、おもむろに口を開いた。

「メイさん、何の相談も、確信もない提案なんだけど……僕は、帝城の本殿を目指してみたいんだ。なんてかは解らないけど……行けるって思えるんだ」

軽く首を傾げる幼い巫女を監視しながら、上砂利の上であぐらをかいていた自分のアバターを、無意識のうちにきちんと正座させる。膝の上で両手をゆるく握り、背筋を伸ばして話続ける。

「もちろん、あの武者たちや、それより強いエネミーに殺されれば、（帝城内滞りの無限EK）っていう最悪の状況になっちゃうことは理解してる。その危険を、あやふやな手感だけで冒す

べきじゃないことも解ってる。でも、それでも、僕は行きたい……行かないかならないって、そんな……気が、して……」

ハルユキとしてはかなり頑張った言説も、最後のほうでいつもどおりのモゴモゴ声になってしまい、こんなんでレベルも上の大先輩バーストランカーを説得なんかできるわけないと肩を落としたけた、その時、

「解りました」

と誠が頷いたので、ハルユキは逆に「えっ!?」と問い返してしまった。巫女はくすりと微笑むと、正座したまま器用に移動し、双方の膝と膝をびったりくっつける。その位置から右手を伸ばすと、ハルユキの握り拳の上にそつと被せる。

「ターさん、あなたはあの時、スザクの炎に追われながら、ロータスの撤退命令をも無視して、祭壇に出現した私を助けに来てくれました。あの瞬間、私には解ったのです。あなたは信じていい……信じるべき人だと。いえ……本当は、初めてお会いした時から……梅郷中学校の裏庭で、たった一人、一生懸命に飼育小屋の掃除をしているあなたを見た時から、解っていたのかもしれない……」

「そ……そんな、僕は……僕なんて、ぜんぜん、そんなんじゃない……」

モゴモゴ喋りをブーストさせながら、ハルユキは深く俯いた。

「僕は、いつも考えなして……失敗ばかりして……掃除の時だって、メイさんに水ぶっかけ

ちやつたし……」

その時のことを思い出したのか、顔はくすりと笑みを漏らすと、ハルユキの下をいつそう強く握った。

「言っただけなんです。負けて、転んで、失敗しても、それでも諦めずに前に進むことが本当の強さだと、もし本殿の奥を目指してエネミーに殺されても、あなたならそこからどうにかしてくれると私は信じます」

優しく、そして優しい言葉だった。だがハルユキは顔を上げ、至近距離できらきらと光っている瞳の両眼をしっかりと見返し、深く頷いた。

「……うん。きっと、どうにかしてみせる。生きて帰ろう……現実世界で待ってる、みんなのところへ」

《帝城》南門——すなわち《朱雀門》から、本殿の正面入り口まで続く石敷きの大路は、長さ約三百メートル。

その左右に立ち並ぶ朱塗りの四柱は、約八メートルごとに一本。

四柱の直径が二メートルもあるので、柱と柱の間隔は六メートルだ。大路を巡回している武者エネミーたちは、侵入者が柱の陰でじつとしている間は存在に気づかないようだが、移動中の姿を見られたり玉砂利を踏む足音を聴かれたりした瞬間襲いかかってくることは想像に難くない。

ゆえに、ハルユキと護が帝城本殿まで決り着くためには、およそ三十五本の四柱の陰から陰へと、武者たちの反応圏を避けつつ微つていくしかない。もちろん、背中の翼で高空を飛んでいくことも真つ先に検討したもの、夜空を叩くりと舞う鷹のような鳥たちの姿が気になった、ステージの地形の一部として配置されている無害な小動物オブジェクトならいいが、警戒型エネミーだったりしたら大変なことになる。

しかしながら、幸い翼がまるで役に立たないということにはなかった。

十何本目の四柱の陰にうずくまり、アーダー・メイダンの小さな体を両腕で抱えたハルユ

キは、懸命に耳を澄ませてタイミングを計った。左に五メートルほど離れた大踏を、武者たちがガシヤリ、ガシヤリと鼻足を鳴らして南下していく。

その重々しい足音が、柱の真横に差し掛かり、通り過ぎ、更に遠ざかった、その瞬間。

壁の中の謎が、ごく小さく頭を傾かせた。同時にハルユキは背中の金属フィンを最低限の出力で振動させ、ふわりと無音の飛行、いやロングジャンプ。八メートル先の柱の陰に、爪先からさうっと着陸する。背後の武者たちは、曲者に気づいた様子もなく同じペースで歩み去っていく。

「ふう……………」

面れかけたため息を途中でこらえると、謎が心配そうな視線を向けてきた。河玉のようなアイレンズを見返し、だいじょうぶ、と頷く。

無制限中立フィールドでエネミーと戦った経験はそれなりにあるが、これほど神経を使う隠密行動を強いられたのは初めてだ。二十分以上をかけて、進めた距離はせいぜい百メートル。しかし焦ってはいらない。集中して、ジャンプひとつひとつを丁寧にこなすのだ。

困難な状況だが、味方してくれる幸運もある。まず、ハルユキの《飛行》が、発動に技名発声が必要な必殺技ではなく常時起動型のアビリティであること。ゆえに、武者たちに声を聴かれる心配はない。

そしてもう一つの幸運は、息を殺し身を潜めることが、現実世界の有田春雪の最大の得意技だ

ということだ。梅郷中三百六十人の生徒の中で、ハルユキほど「非目立ちスキル」を磨いてきた者はいるまい。そのコッは、才盾するようだが、「(家々とコソコソすること)」だ。一年の頃のハルユキは、過剰なまでに周りの生徒たちの眼を気にしていたため、不良たちの嗜虐性を刺激してしまった。何てあれ過剰でいいことは一つもない。

そう、警戒はしつかりと、しかし無用には使えず、自然な流れに乗って——次のジャンプ。スザクの炎に灼かれて貯まった貴重な必殺技、グージは、残り六割ほど。燃費よく使えば充分間に合う。然らず、地道に柱ひとつ分ずつ跳べば、いつかはゴールに着く。あの飼育小屋の掃除で学んだことだ。

新たな武者集団が近づき、柱の向こうを通過する。該が強く、頻き返し、そっと翼を震わせる。ジャンプ。

四十分後、ついに最後の円柱の根本に迫り着いたハルユキは、今度こそ長く大きなため息をついた。

返国武者たちは、この柱の横まではやってこないようだ。腕の中のアーダー・メイデンが、周囲にエネミーの気配がないことを確認してから、それでも最小限のポリニウムで爆く。

「おつかれさまなのです、ターさん」

「うん……メイさんも」

そう答へ、ハルユキは華奢なアバターをそつと玉砂利の上に降ろした。二人身を寄せ合つてしゃがんだまま、柱の隙から慎重に前方を覗く。

無制限中立フィールド、すなわち真の加速世界の真ん中の更に真ん中——《雷城本殿》が、ほんの五メートル先に屹立していた。

和風の《平安》ステージゆえに、建物のデザインもまた、日本史の授業でフルダイブしたところのある平安京大極殿の再現モデルとよく似ているようだ。ただしサイズは遥かに大きい。

屋根は黒々とした瓦葺き、壁は白塗り、柱と格子窓は朱塗り。

左方向、大路の真ん中と接するあたりに止闇入り口がある。しかしそこからの侵入は多分、いや絶対に不可能だ。なぜならゲートの左右に、武者たちより遥かに巨大な、鬼神——または仁王^{にぎわ}としても形容すべきエネミーが、文字通り仁王立ちしているからだ。

「……ターさん、一応お訊ねしますが……あのヒトたちに挑戦するおつもりなのですか？」
謎の密やかな問いに、ハルユキはヘルメットを高速水平往復運動させた。

「ままだままだととととんでもない、これ以上一センチも近づきたくないよ……」

「……私も、なのです。でも……それでは、いったいどうするおつもりなのですか？ やはりあの本殿に入らねば、ポータルも見つからないと思いますか……」

「……えーとね……」

ヘルメットの下で一瞬唇を噛む。

これからの行動とその模範を、言っても傳じてもらえるかどうかは解らない。しかしハルエキは、四壁宮謡という幼く、無垢で、それなのに二年以上も巨大な重みを背負ってきた少女に、いかなる嘘もつきたくはなかった。だから、事実をそのまま口にした。

「さっき、南端の柱の陰でうたた寝してる時……夢に、見たんだ。僕とよく似てる、でも僕じゃない誰かが……僕らとまったく同じルートで、本殿に入るのを……」

夢の全容はまだまったく思い出せない。だが先刻、玉砂利の上を這んでいく銀色のアバターを幻視した時、その少し先のシーンまでが頭に刻み込まれたのだ。

不思議そうに見詰めてくるアーダー・メイザンの右腕に手を添え、一緒に立ち上がらせる。そつと抱え、左右に視線を走らせて安全を確認。残りわずかなゲージを消費して、最後のロンダジャンプ。

目指したのは、左の正面口ではなく右——白壁に並ぶ格子窓のうち、左から五つ目。

朱色の襖が縦横に組み合わされた窓のすぐ手前にハルエキが着地すると、一歩進み出た誰か振り返り、小さくかぶりを振った。

「聞かない……と思うのです。堪すのも、きつと無理です。この手の窓は、システム的にロックされた破壊不能オブジェクトであることがほとんどなのです……」

その言葉は、まったく正しい。ブレイン・バースト・プログラムの生成する無制限中立フィールドは、格闘ゲームスタージである一般対戦フィールドと異なり、攻略や冒険をするための

ロールプレイングゲームの性格を備えている。一般フィールドなら大概の建築物を破壊できるが、無制限フィールドはその限りではない。スタンドアロンのフルタイプRPGで、施設された《屋》は対応する《鍵》を持っていなければ開かないように、この世界でも閉ざされた場所には、そこに入れる《理由》がなければ絶対に入れないのだ。

しかしハルユキは、誠（まこと）に一度頷きかけただけで、もう一度格子窓を見上げた。

手を伸ばし、朱塗りの細い棧を握む。軋む、と念じながら、そっと手前（てまへ）に引く。

果たして――格子窓は、中央の積木を軸にして、音もなく回転した。

「……………」

論（ろん）が鋭く息を呑む。緑色のアイレンズが、信じられないというように見開かれる。

壁（かき）くのも当然だ。格子窓の内側下部には、しっかりした掛け金が金色に輝いている。だがそのロックボルトは完全に収納され、この窓がシステム的にアンロック状態であることを示している。

アーダー・メイデンが無言のまま数歩移動し、背伸びして隣（となり）の格子窓に手を伸ばした。同じように引き開けようとするが、朱塗りの棧は窓枠に固定されたまま揺るぎない。明らかに、五つ目の窓だけが、内側から何者かによって解放されていたのだ。

「…………この窓が開いているのも、夢（ゆめ）で見た…………のですか？」

戻ってきた隣に揺れ声（こえ）でそう問われ、ハルユキは小さく頷いた。

「うん……、夢の中で、誰かがすり抜けるようにこの窓から中に入って……錠を開けたんだ」

「その誰かは、南門の封印を破壊したのと同じ人なのですか？」

「それは……解らない。でも、夢に、そんなシーンはなかった気がするし……僕が見た人影は、刺つぽいものは持ってなかったかも……」

あやふやな口調で答えながら懸命に記憶を探るが、何せうたた寝の時に見ていた夢の話だ、浮かんでくるのは混沌としたイメージの断片だけで、時系列順に整理することすらできない。ニューロリンカーのキャリア各社が研究しているという〈夢録画アプリ〉でもあれば話は別だろうが、そもそも外部プログラムを起動できるのは古い〈基本加速フィールド〉の中だけだ。

いや、それ以前に——あれは本当にただの夢だったのだろうか？

夢というのは基本的に、自身の記憶から生み出されるものだ。だから本人の知らないことを夢に見られるはずはない。ハルユキは、もちろん帝城に入ったのはこれが初めてだ。ならば、この窓のロックが解除されているという記憶はどこからやってきたのだろうか……？

そこまで考えた時、東側からかすかな音が届いてきて、ハルユキははっとそちらに視線を向けた。

どこまでも続く白壁と、紅葉した木々の並ぶ庭園の間の細道を、がしやりがしやりというあの音が近づいてくる。間違はなく武者エネミーの集団だ。この道も、頻度は低いが巡回コースに入っていたらしい。今すぐに移動しなくてはならない。

半秒ほど眼を見交わしてから、ハルユキと諱は同時に頷いた。ここまできて後退は有り得ない。誰かがアンロツタしてくれていた窓に、まずハルユキが首を突っ込み、内部の広い廊下にエネミーの姿がないことを確認。そつと体を滑り込ませてから、両手でアーダー・メイデンも引つ張り上げる。すかさず格子窓を元通り閉め、その下に重んじてしやがみ込む。

外の玉砂利敷きの小径を、重々しい足音がいったん通り過ぎ、正門近くでターンしてきて再び通過し、東へと去っていった。

「ふー……………」

何度目か判らないため息を同時に吐き出し、もう一度顔を見合わせてから、そつと互いの拳をぶつけて微笑む。

ついに――

とうとう、絶対不可侵と謳われる《常域》のそのまた本殿への侵入に成功したのだ。二人は今、加速世界の核心に、限りなく近づいている。

とはいえ、残念ながら、ここまで辿り着いたパーストリンカーがハルユキと諱の前にも存在したことはほぼ確実だ。しかも、南門のスザタの封印を破壊した者と、この格子窓のロツタを開けた者が別人ならば、侵入者は二人もいたことになる。

彼らが何者なのかを知ろうと思つたら、本殿の更なる深部を目指すしかない。きつと守護エネミーの数も恐ろしきも外とは桁違いだろうが、やるしかないのだ。

ぎゅっと一度瞬きしてから、ハルユキは小声で誰に訊ねた。

「えっと……、僕らがここにダイブしてから、現実時間ではどれくらい経つか……」

「内部時間で約七時間と見積もると、二万五千一百秒の千分の一……約二十五秒なのです」

「そっか……じやあ、先輩たちが向こうに戻ってからほきつと二十秒くらいだね。僕らのケーブルを抜くまで、どれくらい待つかな」

「早ければ、三十秒で強制切斷すると思うのです。現実時間であと十秒……こちらでは、残り一時間四十五分です」

さすがにベタランバーストリンカーらしい調の回答に、いまだ加速時間の臨界がやや苦手なハルユキはごくごく頷いた。

「生きて奥まで行けるか、途中で死ぬか……どっちにせよ、それだけあれば充分だ。行こう、メイさん。多分、右に行ったほうが安全だ」

片膝立ちになり、左手を差し出したハルユキを……

誰は、鳥っ白いフェイスマスクに輝く緑色のアイレンズで、しばし監視した。

「……………」

首を傾げるハルユキに、微笑みの混じった声が掛けられる。

「なんだか、ここに来てから、ターさんがどんどん頼もしい感じなのです。まるで……兄様のようです」

突然そんなことを言われ、あつという間にオドオドメーターが急上昇してしまう。視線を泳がせつつ、うわずった声で訊ねる。

「へ、へえ、メイさん、お兄さんがいるの。何年生？」

だが、誰はその問いには答えないまま、ハルユキの手を握ると立ち上がった。もう一度強く――しかしどこか寂寥感のある笑みを渗ませ、言う。

「さあ、行きましょう。生きるか死ぬか……私の命、クーさんに預けます」

「……………うん」

途惑いを押しのけ、ハルユキは強く頷いた。

本殿を口指そうと主張したのは自分だ。だから、誰は全力で守らねばならない。パーストリンカーとしては圧倒的に誰のほうが強いが、それとはまた別の問題なのだ。たとえ自分の身を犠牲しても、誰が再び（無限E.K）状態に陥ることだけは絶対に防ぐのだ……。

ひそかにそう決意しつつ、しんと冷える板張りの廊下を歩き始めたハルユキの耳の奥に、小さな声が聴けた。

――ハルユキおにーちゃん。あたしたちのどっちかが……………もしかして両方がブレイン・パーストを無くしたら……………

――きっと相手のこと全部、何もかも忘れちゃうよね……………

これは不思議な夢の断片ではない。現実時間、二日前の六月十六日日曜日、一般ワールド

の皇居東御苑で開かれた《七王会議》のあとに突然ハルユキの家にやってきた、二代目赤の王《スカーレット・レーン》——上月由仁子が口にした言葉だ。

あの時、彼女はどこか怯えているように見えた。いや、「フレイン・バーストを無くす」という言葉を口にしたのだから、実際何かを恐れていたのだろう。

だが、何を？ 最強のレベル9で、加速世界を支配する《純色の七王》の一人たるニコが恐れぬはならないものなど存在するのだろうか？ 強化外装の恐るべき火力に加え、《射撃拡張》と《移動拡張》の心意技をも使いこなす彼女なら、たとえ四神スズタのテリトリイからでも独力で脱出してのけそうなのに。

……いや、王といっても現実のニコはまだ小学校六年生の女の子なんだから、心細くなる時くらいあるだろう。それに彼女は、半年前の《災禍の館》事件のおり、五代目《クロム・ディザスター》となってしまった親ランカーの《チニリー・ルータ》を自分の手で斬罪している。ルータは、現実世界の全寮制学校に於ける数少ない友達だったらしい。その彼が、フレイン・バーストの記憶を失い、速くに転校していったのだ。寂しくならないほうが不思議というものだ。

「……あのさ、メイさん」

長い廊下を歩きながら、ハルユキは無意識のうちに口を開いていた。

「はい？」

見上げてくる幼い少女に、しばしモゴモゴと言葉を探してから、改めて語りかける。

「ここでポータルを見つけて脱出できて……みんな問題が全部解決したら、紹介したい友達がいるんだ」

「お友達さん……ですか？ 現実世界で、なのですか？」

「うん、メイさんより二つ上で……いま六年生なだけだよ。ちよつと生意気で、乱暴なところもあるけど……でも、すごくいいヤツなんだ。よければ……よかったら、メイさんも、友達に……」

不意に――

胸の奥から湧き上げてくる痛みに似た感覚があった。ハルユキは息を止め、眼を見開いた。これは……予感？ 今口にしたことが、夢らく実現しないだろうという……その前に、何らかの恐ろしい……悲しい戦局が訪れるだろうという……

――そんなこと、あるものか！

僕は、僕の世界を守るんだ。もう誰にも不幸にしない。誰か悲しませない。先輩も、同級生も、チユも、タタも、四葉君さんも……そしてバドさんや、もちろんニコも。このさきやかな、でも何よりも大きく温かい絆の環を、僕は守る。守ってみせる。

「ターさん」

不意に張り詰めた声で呼ばれ、ハルユキはハッと眼を見開いた。隣に視線を向けると、幼い

軍女は廊下の行く手をじっと注視していた。

つられるように前を見たハルユキは、行く手の暗がりに、複数の巨大な気配があることに気づいた。すぐに、みし、みしという重い移動音が耳に届く。

「やつぱり、中にもエネミーがいるようです」

壁の端々に素早く動き、左右を見る。右の壁には朱塗りの格子窓が並んでおり、掛け金を解錠すれば外に出られるだろうが、その先にも武者エネミーがいる可能性がある。

左は、壁ではなく複雑な隙隙面が描かれた機だ。ロツタの類は見えないので引けば開くだろうが、ずらりと並ぶ機のとれを開ければいいのか……。

その時、再び、奇妙な幻視。薄い人型のシルエットが、二メートルほど先の機を引き開け、中に滑り込む。

「……あそこだ」

ハルユキは疑うことなく、幻のアバターを追った。躊躇わずに引いた機奥は、同じく板張り。廊下のようだった。今度は左右ともに機の間隔が、北に伸びているその空間に滑り込むと、ずとんと背後の機を閉める。

息をつく間もなく、行くすからもぎし、ぎしと板を軋ませる大量の移動音。すぐ目の前を、自分とよく似た形の影が滑るように進み、右手の機を開けて消える。

いったいあの影は誰なのか。なぜ自分にだけ見えるのか。解らないことは山ほどあったが、

もはや倒れて追うしかない。

いまだ胸に壓れる痛みの余韻を吞み下し、無理矢理に集中力を呼び起こして、ハルユキは顔の手を引きながら次の襖を開けた。

密城本殿の屋内マツブにひしめく武者や神官型の守護エネミー群を、もし強力で回避しつつ前進しようと思つたら、丸一日かけても到底足りなかっただろう。

通路は広く、身を隠せる柱や彫像オブジェクトには事欠かなかったものの、エネミーの巡回パターンは複雑で数分の観察ではとても読み切れない。そのうえ、似たような襖と廊下が連続する構造は実に迷いやすく、無論オートマッピング機能もないので、東西南北の感覚があつという間に失われてしまう。

そんな高難易度の迷宮を、わずか一時間と少してどうやら踏破できたのは、ハルユキの視界に浮かぶ奇妙なシルエットの助けがあつたからだった。

名も知らぬ小柄なデュエルバターは、針の穴を通すようなタイミングで巡回エネミーの死角を突き、目印も何もない襖を次々に開けて、ハルユキと道を導いた。最早、それがただの夢や幻ではないことは明らかだった。

おそらくは——（記憶）だ。ロジャタは不明だが、かつてこの密城に及び込んだバーストリンカーの記憶がハルユキの意識内で再生されている。それ以外に、この現象には説明がつけら

れない。しかし、だとすれば、その何者かは帝城の警備部への侵入に成功し、しかもそこから生還したのちに何らかの媒体に記述を残したということになる。

ならば、魔なシルエットが辿り着く最終地点には、必ず現実世界へと繋がるポータルが存在するはずだ。

ハルユキはそう信じ、アーダー・メイデンの手を引きながら一心不乱に記憶の影を追った。数回危うい場面はあったものの、ついに一時間以上にわたって一度もエネミーにターゲットされることなく、二人はゴール附近と思われる大広間の入り口まで辿り着いたのだった。

「……………ここは……………」

試かそう呟き、繋いだ手にきゅっと力を込めた。

大御殿、とても表現したくなる巨大な広間だ。朱色の柱が高い天井を支え、四方の壁はひときわ絢爛な鎧紋に飾られている。いかにもヘラスボスの部屋といった趣だが、どうやらエネミーの姿はない。

にもかかわらず、広間には無意識のうち息を詰めさせる何かが濃密に漂っていた。ハルユキも謎の手を握りぬぎ、銀面の下で懸命に眼を凝らした。

二人をここまで導いてきた記憶のシルエットは、ゆっくりと広間に足を踏み入れ、真間の中央を奥へと向かっていく。意を決し、ハルユキも後を追う。

立ち並ぶ円柱の間を、影は滑るように進む――。

ある一点に達した瞬間、ふっと音もなくかき消えた。

「あつ……」

ハルユキは小さく声を漏らし、足を止めた。記憶の影が消えたならば、そこにはポータルがなければならぬ。しかし広闊の奥には闇と冷気が満ちるのみで、揺れる青い光はまったく見当たらぬ。そんな——ここまで来て、出口がないなんて、まさかそんなことは……。

半ば走るように、最後の十メートルを踏破したハルユキは、危機が現実になってしまったことを認識せざるを得なかった。

そこには、確かに何かがあった。しかし、明らかにポータルではなかった。

二メートルほどの間隙を空けて左右に並ぶ、黒光りする四角い石柱。高さはシルバー・クロウの胸ほどか。上面に、色合いの異なる薄板が設置されているところを見ると、単なる柱ではなく、何かを載せるための台座だと思われる。

しかし——。二つの台座は、双方ともに空だった。

かつて何かが載っていたのだとしても、すでに両方とも持ち去られているのだ。二つのうち、少なくとも一つを獲得したのは、ハルユキたちをここまで導いてきた灰色の影だろう。そしてその何かは、現実世界へ帰還するキーともなっていたはずだ。たった一度だけ起動する、いわば（ワンタイム・ポータル）。

「そんな……ここまで来て……」

巨大な青胆に襲われ、ハルユキが肩を落としかけた——その瞬間だった。
 驚かれた左手が、机ほどの強さで思い切り握り締められた。

「……………」

慌てて隣を見ると、ここまですべて一度として冷静さを失わなかった年若い巫女は、両のアイレンズに緑色の光を漲らせて食い入るように右側の台座を監視していた。フエイスマスクが小刻みに震え、小さな唇から掠れきった声が漏れた。

「……………(七皇)のプレート」

「……………」

かつて聞いたことのない単語に途惑いつつ、ハルユキも改めて台座を見た。すると、これまでに注視しなかった前面に、小さな金属板が嵌め込まれているのに気づいた。一歩近づき、まじまじと眺める。幾つかの文字の他に、奇妙な図形も刻まれているようだ。

七つのドットと、それを繋ぐ六本のライン。それらが作るフォルムには見覚えがある。間違いない、つい二時間ほど前に、奇城内苑から見上げた星空に存在していた形だ。

おおよそ座のしっぽ。北斗七星。

……………ずきん。

またしても、背中的一点が鋭く疼いた。その痛みは、先刻のそれよりもやや存在感を増しているように思えた。軽く頭を振って意識から押しやり、小声で訊ねる。

「(七星) って、このプレートに刻まれてる北斗七星のこと？ この台座が、どうかしたの……」

すると誰はようやく顔を上げ、限界まで低めた声で告げた。

「この台座に載っていたのは、強化外装なのです。しかしただの武器や防具ではありません。加速世界最強と言われる伝説の装備群……(七星外装)、またの名を……(七の神器)」

「セブン……アークス……」

その名称には、聞き覚えがあった。

忘れるはずもない。一昨日の(七王会議)の席上で、ハルユキの顧問であるスカイ・レイカーが教えてくれた言葉だ。紫の王パープル・ソーンが持つ錫杖(サ・テンベスト)。青の王ブルー・ナイトが佩く大剣(シ・インバルス)。緑の下ダリオン・グランデが掲げる大盾(サ・ストライフ)。それらを含括して(七の神器)と呼ぶのだという。

その時、レイカーはこうも言った。神器は加速世界に合計で七つ存在すると推測されるが、現在存在が確認されているのは四つに過ぎない、と。その(推測)の根拠とされたのが、おそらくはこの台座に載め込まれているプレートなのだ。よくよく見れば、プレートに刻まれた北斗七星のレリーフは、左から六番目の星だけが大きくなっている。一つの星に、一つの神器が対応しているということなのだろう。

「……てことは、青の王とかが持ってる神器も、これと同じ台座に載ってたの……」

思考過程を省略したハルユキの聞いだったが、語はこくりと頷いた。

「ええ、《銅壁》^{（銅壁）}らが入手した神器は、無制限フィールドの新都府、芝公園、東京ドーム、そして東京駅の地下に存在する《四大ダンジョン》の最深部に祀られていたものなのです。私も、のちに《ジ・インパルス》の台座だけは見たことがあります。これとまったく同じデザインでした。クーさん、ここを見て下さい」

そう嘆き、語はプレート上の一点を指さした。七星のレリーフの下に、威めしい書体で漢字が二文字刻まれている。《開陽》^{（開陽）}と読めるが、意味はまるで解らない。

「この開陽というのは、北斗七星の六番星の中国名なのです。私が見た大剣インパルスの台座には、一番星の中国名《天枢》^{（天枢）}の文字が刻まれていました。同様に、錫杖テンベストの台座には二番星の中国名《天璇》^{（天璇）}が、大盾ストライフの台座には三番星の中国名《天璣》^{（天璣）}が刻印されていたそうです」

「……なるほど……」

連発される固有名称群を懸命に頭へと刻み込みつつ、ハルユキは大きく頷いた。

無制限中立フィールドの、帝城の東西南北に配置された四大ダンジョン。その奥深くに封じられた四つの強化外装。その台座に刻まれていたのは、北斗七星の本流み部分を構成する四つの星の中国名。

であるなら、それらを発見した古参バーストリンカーたちが、《七つ存在するであろう最強

外装のうち四つ」と判断するのは当然だ。

——ああ、ほんとうに、なんて僕ほもつと早くバーストリンカーになれなかったんだ。四大ダンジョンの探検とか、その奥にいたであうデカボスの攻略とか、最強装備の入手とか、楽しいようなイベントが全部終わっちゃってるなんて。

などと未練がましい思考を巡らせてしまつてから、すぐに思い直す。師匠スカイ・レイカーも言っていたではないか、「何もかもこれから始まる」のだと。それに、もし初期にバーストリンカーになっていたら、今頃はネガ・ネビュラスと……つまり黒雪姫と敵対する側に属していた可能性もある。あの人の〈子〉になれたこと以上の幸運が、この世に存在するはずはない。軽く顔を伏せ、自身の思考を深く反省してから、ハルユキは小声で誰に話しかけた。

「そういえば、七王会議の時には見なかったんだけど、《現在確認されてる神器四つ》のうち残り一つは何て言うの？ 当然、四大ダンジョンに隠されてた他の三つと同じく、もう誰かにゲットされちゃってるんだよね？」

「それが……芝公園人達百最下層に存在する、四星星《人格》の台座がすでに空になっているのは確認されているのですが……」

誰は一時言葉を切り、自身も考え込むような表情を浮かべて続けた。

「そこに載っていたはずの神器、銘《ザ・ルミナリー》を入手したのが誰なのか、現在に至るまで判明していないのです。少なくとも、私の知る限り、対戦で使われたという記録はありま

せん」

「えっ……」

意外な言葉だった。世界最強の強化外装の一つを苦勞して入手しながら、それを使わないことなどあり得るだろうか。目立って集中攻撃の標的にされることを恐れたのかもしれないが、巨大ダンジョンを突破できるほどの実力を持っているなら堂々と神器所有者の名乗りを上げてもよさそうなものだ。

それに、暗に落ちないことは他にもある。首を捻りつつ、誰に続けて訊ねる。

「……でも、レイカー師匠は確か、こう言ってたよ、『確認されている神器は四つだけ』って。お座しか見つかってないのに、その『サ・ルミナリー』を確認済み神器に数えてるの?」

「いえ……」

誰は単女アバターの髪パーツを小さく揺らしてかぶりを振った。なぜか躊躇うように眼を伏せてから、最小限の音で呟く。

「（ヘルミナリー）は未確認扱いなのです。現在までに加速世界に現れた四つの神器の、最後の一つは……この『開陽』の台座に載っていたはずの、『サ・ディスティニー』なのです」

「……………ディス……………ティニー……………」

その名を繰り返しながら、ハルニキは吸い寄せられるように台座前面のプレートを見た。六つ目の星が大きくなっている北斗七星のレリーフと、六番星の中国名であるという二つの漢字

の下に、確かに幾つかのアルファベットが刻まれている。『THE DESTINY』。

聞いたことのない名前だ。そのはずだ。

なのに、ハルユキは、再びあの奇妙な感覚が体の中心を貫くのを感じた。ずきん、ずきんと、魂の奥深いところが疼く。そのパルスは中枢神経を走り、背中の一点で小さな火花を生じ、

不意に、視界が揺れる。いや、形を崩しているのは、視線を集中しているプレート上のアルファベットだけだ。DESTINYの七文字が歪み、赤み、似ているが異なる他の文字列に変わりうとする……………

「ターさん」

ぞっつ、ともう一度強く左手を握られ、ハルユキは両眼を見開いた。

幻視が消え、金属プレート上の文字は元の並びへと戻る。いつしか背中の疼きも消えている。何度も瞬きを繰り返して、直視の金話を思い出してから、ハルユキはやや擦れの残る声で気がかりそうな調に謝った。

「あ…………、ごめん、ちょっと…………はーつとしちやって。ええと…………てことは、やっぱり僕らより前にここまで来たバーストリンカーがいて、そいつがこの台座に載ってた（サ・デイスティニー）を入手して、対戦で使ったんだよね？　なんて名前の？　やっぱり、王の一人だったりとか…………」

しかしその間に、アーダー・メイデンは小刻みにかぶりを振るのみだった。

「……すみません、私も直接見てはいないので……。私がバーストリンカーになる、ずっと前のことだと聞いています……」

「ほう……」

もどかしさを押し殺し、ハルユキは頷いた。相当なベテランであるはずの語が知らないというなら、まだバーストリンカーになってたつた八ヶ月のハルユキとはいかなる接点もない話のはずだ。だから、脳裏にくすぶるこの焦燥感（しやうそうかん）は錯覚（さくかく）だ。知っているのに思ひ出せないと言わんがばかりの、この幽暗（ゆうあん）さは。

無意識のうちに（デイスティニー）の名前から眼（まなこ）を背（そむ）けようとするかの如く、ハルユキは話の手を選ったまま数歩左に移動すると、隣（とな）の台座へと見入った。

こちらにも、まったく同じ金網（きんもう）プレート（プレート）が嵌め込まれている。北斗七星（ほくしちせい）が浮き彫りになっているのも同様だ。しかし、大きくなっている星は左から五つ目。刻まれた文字は「上衝」。

「ぎよく……しように、かな……？」

「ええ、五番星（ごばんせい）の中国名なのです。神壽（しんじう）の銘は……」

語と同時に顔を近づけた先には、『THE INFINITY』の文字列があった。口を揃えて、ジ・インフィニティ、と呟（ささや）く。

「私も、この名を聞くのは初めてなのです。台座は隣と同様に空なので、すでに誰（たれ）かが……もしかしたら同じ人が持ち出したのかもしれませんが……だとすれば、（サ・ルミナリー）と同

じく、一度も使われていない未確認神器ということになるのです……」

「そう……だよ、わ」

頷いてから、ハルユキはこっそり小さなため息をついた。

一昨日の七王会議の直前、議場となった千代田エリアにそびえる帝城を遠目に見たおり、黒雪姫が言っていた、帝城本館の最深部には、超スゴイ強化外装が隠されているという噂がある。

それはまさしく真実だったわけだ、しかも、恐らく青、緑、紫の三王が持つ神器よりも格的には上だろう。なのに、見つかったのが台座だけで、肝心のアイテムはとくに誰かが持ち去っていたとあっては、バーストリンカーとしてだけではなく鎧着入りのヘビーゲーマーとしても全力でガツカリしないわけにはいかない。

「……インフィニティ、か……。どんなスゴイ装備だったんだろうなあ……。せめてひと目見たかったなあ……」

素直がましく呟いた、その瞬間。

ハルユキはあることに気づき、びくっと顔を持ち上げた。

無制限中立フィールドに散らばった四大ダンジョンに、四つの神器、そしてフィールドの中央、帝城本館の最深部に、二つの神器、その数、合わせて六。しかし、台座に刻まれた星の数は七個なのだ。ゆえに（七星外装）と呼ばれる、と誰も言っていたではないか。つまり……と

いうことは……」

「ひとつ……足りない……？」

無意識のうちにそう口走ったハルユキに、隣のアーダー・メイデンがこくりと頷いた。

「私も……いまそれを考えていたのです。加速世界の中心であるはずのこの広間には、神祇の白座が二つしかない……。では、北斗七星の七番星、破軍の星アルカイドは……いったいどこに……」

顔を見合わせ、黙り込んだ二人の耳に――

「その問いには、私が答えましょう」

秋空を吹き渡る風のように澄明な、年若い少年の声が届いた。

その声が聞こえた瞬間、ハルユキはただ驚き、音源の方向——二つの台座の更に北側へと顔を向けただけだった。

しかし園庭宮譚の反応は速った。ずっと繋いだままだった右手を解くや、その掌でハルユキを一步下がらせる。自身は前に踏み出すと、半身になって左手をやや持ち上げ、広間の奥を満ちたす暗闇へと向ける。

無害な草女アバターの全身を、オレンジ色の光のペールが薄く包んだ。過剰光——心意システムが起動した証だ。しかし、かつてネガ・ネビュラス（四元素）の一人だった誰か、心意は心意で攻撃された時以外は使ってはならない、という第一原則を知らないはずがない。

相手の姿が見えない段階で、バーストリンカー究極の力を発現させた誰の行動は、たとえ誤犯を犯してもハルユキを守るという固い意志を示していた。そしてまた、アーダー・メイデンから放たれる空気をも焼き焦がすようなブレッシャヤーは、彼女とハルユキの間にある圧倒的な実力差を明らかにするものだった。

仮に、このレベルの戦いとなったら自分は足手まといにしかねないだろう。そう認識しつつも、ハルユキもせめて両手を持ち上げ、遅ればせながらイマジネーションを集中した。剣を

投して俾ばした指先に銀色の過剰光が湧り、どうにか前腕部の半ばまでを覆う。

完全な臨戦態勢を取り、身構える二人に向かって、再び何者かの声が投げかけられた。

「非礼は謝罪します。しかし、どうか信じてください、私にあなたたちと戦う意図は一切ありません」

この状況で、尚も涼やかなその声には、言葉どおりいかなる害意も含まれていないように感じられた。しかし、誰はわずかにも警戒を緩めようとはしない。

「ならば、まず姿を見せるべきなのです」

毅然とした態度でそう応じ、奥の暗闇を避けんとするかのように過剰光を強める。赤糸のスパクトルに揺れるその輝きが、生女の舞によって烈火と化しフィールドを焼き払ったことを思い出して、ハルユキは息を詰める。

「解りました。今、そちらに行きます」

声の主は、そう応じると、悍と高い足音を響かせた。

広間の奥から、わざと床板を鳴らすような足取りがゆっくり近づいてくる。左右の壁際に並ぶ燭台の炎が、風もないのに揺って揺らめく。

悍、悍。近づく足音との距離はもう十メートルもあるまい。遠隔型、あるいは高機動型のデュエルアバターならば完全に間合いの内だ。張り詰める空気の中を、何者かは絶えぬ足取りで更に歩み寄る。

やがて——蠟燭の光の中に、ついにその姿が浮かび上がった。

青。

深い深い湖のような、あるいは雲の上から俯ぎ見る天穹のような、澄み渡った紺碧。

声から受けた少年のイメージどおり、デュエルアバターとしてはかなり小柄だ。アーダー・メイデンよりも少し高いくらいだろう。しかし、緻密さは欠片もない。

四肢は、着物の袖と袴を思わせる重厚な装甲板を備え、後腰部から腰下にまで結わえ髪状のパーツが長く伸びている。前髪パーツの下に覗くフェイスマスクは、幼くも凄々しい。全体の印象は和風で、アーダー・メイデンを巫女とするならばこちらは（お侍）か。

その形容を確たらしめているのが、左腰に帯びる近接戦闘強化外装だった。

楕円形の鎧と、細身の鞘。剣でなく刀と呼ぶべきだろうが、刀身に反りはほとんどない。全体が鏡のような銀色で、アバターの装束を映した中に無数の明かりが揺れるさまは、まるで無限の星空を刀の形に凝縮させたかのようだった。

若侍は、二人から十メートルほど離れた場所まで足を止めると、左手を刀の鞘に添えた。諷か構えた手をびくりと動かすが、次の瞬間、ちんと軽やかな金属音を立てて強化外装は鞘ごと腰から外される。刀をそのまま足もとの床に置くと、丸腰となった侍は、空の両手を広げてそつとハルユキたちに示した。再び、静かな声。

「このとおり、戦うつもりはありません」

もしあのデュエルアバターに宿る少年が、外見とわり剣士のパーソナリティを備えているのなら、その魂であらう力を地に植たえるのは絶対的な不戦の意思表示だ。

ハルユキがそう考えたのとはほぼ同時に、誰もゆっくり左手を下ろした。全身を包む過剰光が、ふつと空気に溶けて消える。

「信じましょう」

えっ、と後ろで声を上げそうになるほどあっさりと言がそう応じたので、ハルユキも慌てて両手の横えを解いた。対ブッシュ・ウータン戦の時も感じたが、どうやらこの少女は、他人を信じる信じないに關してはかなりの理断主義らしい。

若侍のアバターは、青い輝きを湛える涼やかなアイレンズを大きく和ませ、小さく息をついた。穏やかさを増した声が流れる。

「よかった……本当は、対戦になったらどうしようって、心の中では物凄くどきどきしていたんです」

「えっ」

今度こそ驚きの声を漏らしたハルユキは、続けて少しばかり失礼な感嘆を口にしてしまった。

「こ、こんな所まで来られる人が、今からそんな……新米みたいなの……」

すると、若侍はにこりと微笑んでから、更に驚くべきことを言った。

「いえ、私は完全なる新米ですよ。だって、バーストリンカーになってから今まで、一度もノ

「マルな封鎖をしたことがないんですから」

床から拾い上げた刀を再び腰にマウントさせた紺色の若侍は、左の壁際に並ぶ燭台のひとつに照らされ、マルユキを導いた。

揺れる蟻場の左右には、壁から太い横木がベンチ状に突き出している。その片方に侍が、向かいに二人が腰掛けると、短い沈黙が訪れる。

マルユキは「ちよっと失礼」と呟いて自分のHPゲージに触れ、メインウィンドウを呼び出した。連続ダイブ時間は七時間を超えている。帝城本殿に侵入してからもすでに一時間半が経過し、仮に現実世界の黒雪組たちが、三十秒待ってマルユキたちのドロイバル接続を切断するとすれば、残されているのは恐らく一時間程度だ。

ウィンドウを消すと同時に、目の前に座る侍めいた少年アバターが、小さく首を振りながら呟いた。

「正直……まだ信じられない気持ちです。よもや、この宮殿で、誰かと出会う時が今当に来るなんて……」

驚いたのはマルユキも同じだ。しかし、説明してほしいことがありすぎて、いったい何から訊いていいのか解らない。君は誰で、どこから帝城に入って、どうやってこの広間まで来て、それができる実力があるのに封鎖が初めてとはどういう……

無数の言葉が脳内でぐるぐるさせていると、不意に隣で誰か「べこりと頭を下げた」。

「私の所属レギオンは（ネガ・ネビュラス）、名前はアードー・メイデンなのです」

そ、そうかま、すは挨拶からだ、とハルユキも慌てて一礼する。

「お、同じく（ネガ・ネビュラス）所属の、シルバー・クロウです」

すると君等は、ばちくりと瞬きしてから、小声でひとりこちた。

「ネガ・ネビュラス……」

まるで、その名を初めて聞くかのようにそう呟いてから、はっと背筋を伸ばし、一瞬口ごもる気配。ハルユキが首を捻る間もなく、さこちない会釈に続いて早口で名乗る。

「あ、すみません、挨拶が遅れて……。私は……（トリリード・テトラオキサイド）、宜しければリードと呼んで下さい」

「トリリード……」

その名を口中で繰り返し、ハルユキは内心で首を傾げた。デュエルアバターの名ミシング法則からすれば、それは装甲の色を表す単語のはずなのだが、果たして紺色や藍色にそんな言い方があっただろうか。

ちらりと隣の顔を見ると、彼女も何事か考える様子だったが、すぐにこくりと頷いた。

「それでは、リードさんとお呼びするのです」

一拍置いて――。

「リードさん、南門の（スザクの封印）を、帝城内側から破壊したのはあなたですね？」
 多かりと、しかし重大極まる問いが巫女の口から発せられ、ハルユキはぎょっと上体を仰け
 反らせた。

驚きの表情を見せたのは、トリリードを名乗る名侍も同じだった。深い青色のアイレンズ
 を数度明滅させてから、なぜか脱ぎ入るような上目遣いになり、小声で訊き返す。

「どうして……そう思ったんですか？」

「あれほど高耐久度のオブジェクトを、わずか二太刀で破壊するには、当人の技もさることな
 がら相応にハイレベルな強化外装が必要なのです。たとえば、いまリードさんの腰にある（七
 の神恵）のような」

「ええっ!?」

今度こそやや人さめな声を漏らしてしまい、慌てて口をつぐみながらも、ハルユキはトリリ
 ードの左腰に輝くミラーシルバーの直刀をまじまじと眺めた。最初に見た時からタダモノでは
 ないと思っていたが、まさか最強外装の一つだったとは。

「そ……それ、神恵……？　ってことは、あそここの台座に載ってたやつを、君が……？」

直刀と、十数メートル右側の薄間にたたずむ空の台座「一つを順に見ながらハルユキがそう口
 走ると、若侍はいっそう恥ずかしそうに顔を俯け、小声で答えた。

「は……はい。すみません、本当は私などにこの剣を手に入れる資格はなかったのですが……」



最初に見た時、我慢できずに手を伸ばしてしまい……」

全身で申し訳なさを表現する、おそらくは自分より年下であろう少年に向けて、ハルユキは慌てて右手と首を横に振り動かした。

「あ、いや、謝る必要はないよせんせん。最初に見つけた人が手に入れるのは当たり前だもん。ごめん、僕のほうこそ、変な言い方しちゃって」

最後にぺこりと頭を下げると、リードもおそろおそろというふうに顔を上げ、ハルユキと視線を合わせた。その涼やかなフェイスマスクに、はにかむような微笑みの色が浮かぶのを見た瞬間、ハルユキにしては至極稀少な種類の感情が胸にわき上がった。

——いいヤツだな、こいつ。

かつて、初対面でそんなふうにイーブンな親しみを感じた相手は、幼馴染の塩拓武と倉嶋千百合だけだ。このトリリードという右侍は、異常な状況で出くわした正体不明もいところのバーストリンカーなのに、仮に現実世界で生身を晒してもきつと仲良くなれるだろうという気がする。

ふと視線を感じてちらりと左に視線を向けると、こちらから仄かに微笑んでいるアーダー・メイデンと眼が合い、急に恥ずかしくなったハルユキは、暗喟に大して重要とも思えない質問を口にしてしまった。

「あー、えっと、リード……くん、その剣はどっちの台座に載ってたの？ たしか左が北斗七

星の五番目、右が六番目だったと思うけど……」

「リードでいいですよ、クロウさん」

答える前にそう微笑まれたので、ハルユキも慌てて「じゃ、じゃあ僕もクロウで」と言い添える。しかしトリリードは「たぶん年下だと思えますので」と頭を下げ、ハルユキが抗弁する前に説明を始めてしまった。

「この剣は左側の、五番星（玉璽）の台座に載っていました。鏡は、（ツ・インファイニティ）です」

ハルユキと鏡が広闊中央方向に視線を動かすと、トリリードも同じようにそちらを見ながら続けた。

「付け加えれば、私がこの剣を見つけた時には、隣の六番星（開陽）の台座はすでに空になっていました」

「ふうん……」

ハルユキが頷くと、隣で鏡が声を発した。

「神客（サ・ディスタイニー）が加速世界に出現したのは、ごく初期の……ブレイン・バーストが第一世代バーストリンカーに配布されて、まだ一年経たない頃だったと聞いているのです」

「えっ、そんなに昔なんだ、……じゃあ、（ディスタイニー）を手にいれたバーストリンカー

が、(密談)に入った一人目……ってことになるのかな。それで、リードが二人目で……」

ごく自然に呼び捨てにしてしまったことをほとんど意識もせず、ハルユキは右手の指を折りながら続けた。

「メイさんと僕が、三人目と四人目、か。なんか……絶対不可侵ってわりには、けっこう入ってるよね……」

そこで三人顔を見合わせ、同時に忍び笑いを漏らす。

だが、リードはすぐに表情を改めると、再び申し訳なさそうに肩を縮めて言った。

「数に入れて頂けるのは光栄ですが……すみません、私は御さんのように、(四方門)から堂々としてきたわけではないんです」

「え……それって……？　じゃあ、あの外堀と絶壁を越えてきたってこと……？」

ハルユキは首を傾げたが、リードに言葉の真意を訳ねるより早く、誠が口を開いた。

「それを言うなら、私とターさんも、リードさんが南門の封印を斬ってしてくれたからこそ中に入るこゝとができたのです。あの封印は恐らく、かつてのネガ・ネビュラスのように四部隊による四神同時攻撃を行った場合に、どれか一つの門さえ破れば、あとは市域内部から他の部隊を導き入れられるように設置してあるものと思われます。つまり、もし封印が健在だったら、あの時扉が開くことはなく、私たちはスズクに焼き殺されていたに違いありません」

「あ……、なるほど、そういうことなのか……」

背中に迫る超高温の炎を思い出し、ついぶるっと体を震わせつつ深々と頷く。そのまま、直前の疑問は忘れて、若侍に新たな問いを投げかける。

「つてことは、リード、君が封印を破壊したのは、あそこから帝城を脱出しようとしたから……？」

「いえ……、そうでは……ありません」

なぜか、仄かに寂寥感を漂わせる声でそう否定し、リードは含蓄のある笑みとともに答えた。

「むしろ、逆……ですね。もし封印を破壊してきたら、あの門から、いつか誰かが入ってきてくれるんじゃないかって思ってた……」

「入って……きてくれる……？」

リードもまた侵入者であるはずなのに、まるでもう脱出を諦めてしまったかのような、どこか奇妙な言い回しだった。ハルユキは銀面の下でぱくりと瞞きし、更に訊ねる。

「でも、リード、この帝城本殿にいるんだから、君だって僕らと同じ疑似（無限E.K）状態……つまり、閉じ込められてるってことだよね？ ……あ、いや、待てよ……」

その言葉を聞いたトリリードの顔に、何かを押し隠そうとするかのような表情が過ぎったのにも気づかず、ハルユキは若侍の腰に輝く銀の直刀に視線を落とす。

「（ハインフィニティ）……その神器は、人平時に一回だけ起動する（ボータル）になってたん

じやないの？ それを手に入れた時に、君はここから正常に離脱できたんじゃない？」

別に何を含むわけでもない、単純な疑問だった。しかしリードは、またしても恥じ入るように顔を伏せてしまう。唖然と見詰めるハルユキの左脇に、謎の小さな手がそっと触れた。

「たとえボータータルがあっても、いつもスムーズに離脱できるとは限らないのです、クーさん。その言葉を聞いた途端、自分の言い様がまるでリードの行動を責めているように聞こえなかったことに気づき、ハルユキは反射的に深く頭を下げていた。

「あ……ご、ごめんリード、別に文句を言うつもりはなかったんだ。僕だって、そういう経験何回もあるし……そもそも今ここにいることが、作戦どおり行動できなかった結果だし……」
懸命に口を動かすと、石竹はようやく頭を上げた。袴を換した脚の上で両手を重ね、再び一礼する。

「すみません、クロウさん、メイデンさん、いつか……時が来たら、お話しします。私がなぜこの場所にいるのかを……」

リードの声及び表情——そして全身の佇まいには、はっと息を呑むような端正さがあった。声を失うハルユキの代わりに、立ち居振る舞いのまじきでは引けを取らない説が、そっと礼を返した。

「解りました、リードさん。では、私たちもお話しするのです。なぜ私たちが四神スザタのテリトリに踏み込み、南門から帝城内に突入してしまったのかを。」

続く五分間で、ハルユキと註は簡潔に話った。

二年半の、レギオン（ネガ・ネビュラス）の挑戦と崩壊。

メンバーを離脱させるため、南門の直前で封印状態となつてしまつたアーダー・メイデン、

そのアバターを生還させるための、現メンバーによる救出作戦と、その結末――。

眼を丸くして聞き入つていたトリリードは、二人が口を閉じると長く息を吐き、やがてそつと呟いた。

「そんな……ことが、あつたんですね……。よもや、あの（四神）に挑み……撃破しようとした方々がいらしたとは……」

その声の奥深くに、かすかな確れの響きを聞いた気がして、ハルユキははっと両眼を見開いた。自分自身の深いところにある何かが共鳴し、その振動が音となつて喉から出ようとする。

――君も。

そう言いかけたが、しかし寸前で口を閉じた。長くべき言葉が見つからなかったからだ。

そんなハルユキの仕草に気づいたのかさうでないのか、リードは仄かな微笑みを浮かべると、

再び穏やかな声を発した。

「そういう事情ならば、ぜひ私も、お二人の冒險脱出に協力させて下さい」

「えっ……あ、ありがとうございます」

ひとまず頭を下げてから、ハルユキは身を乗り出し、急ぎ込んで訊ねた。

「君は、ここから正常離脱する方法を知ってるの!?」どこかにまだ使えるポータルがあるとか……!?」

「私自身は、離脱にはタイマー式の自動切断を用いていますが、ポータルの存在も、ひとつだけなら確認しています。しかし……」

リードは頷いたものの、いつとき考え込むように言葉を切った。すぐ顔を上げ、ハルユキと顔を軸に見ながら口を開く。

「……直接、見て頂いたほうがいいでしょう。同時に、私が最初に拘した事柄も果たせませうし」

「ええと……な、なんだっけ?」

ハルユキが首を捻ると、紺碧をまとう少年アバターは、滑らかな声で答えた。

「七番目の星……あなたがたの知る《神墓》の、最後の一つの所在をお答えする、という約定です」

ベンチ代わりの横木から立ち上がったトリードは、彼が最初に現れた広間北側の暗がりにはハルユキと話を導いた。

壁燦の光がほとんど届かない突き当たりの壇は、左右と同じく朱塗りの柱と白壁で構成されていたが、その中央には今まで気づけなかったものが存在した。

出入り口、あるいは門だ。小型の鳥居のような形に組み合わされた柱の内部が黒々と闇き、そこからしんと冷気が溢れ出ている。

無意識のうちに体を縮めながら、ハルユキは呟いた。

「この広間が……市域の一番奥じゃなかったのか……」

「ええ、これが、九重の門最後の一つ。くぐればそこが八神の住処です。……行きましょう」

トリリードはそう囁くと、捲状のアーチャーに覆われた左足を、密度のある闇の中へと踏み出した。躊躇う様子もなく論がそれに続き、ハルユキも意を決して追いかける。

鳥居を抜けてみると、真つ暗闇と思われたその奥にもほんの少しの光があった。廊下はすぐに地下への階段となっており、おぼろげな光はその先から届いてくるようだ。俯れた足取りでリードが階段を下りはじめ、二人が後に続く。

進むにつれて、これまで感じていたのとは別種の圧力がアバターを押し包むのをハルユキは感じた。四神スザタや龍武者エネミーが発していたような威圧感ではなく、空気そのものが何らかの霊的なエネルギーを帯びつつある感覚。

いや、加速世界には《霊的》などという言葉はそぐわない。なぜならここはブレイン・パイスト・プログラムが生成するVRワールドなのであって、五感が受け取るあらゆる情報はコードに置換可能なデジタルデータなのだから。ニコは、他のバーストリンカーから受けるプレッシャーに《情報圧》という言葉を当てていた。それに倣えば、つまりこの場所では、空気にす

ら何らかのデータが含まれているということになるのか、温度や匂い、風向きのような表層的情報ではなく——時間、いや（歴史）と表現するべき、無限に等しい存在の連続……。

黒板のような質感の階段は、三十段以上も下ったところで百八十度折り返し、なおも続いた。いったいどれほど地下に潜ったのか、そろそろ解らなくなってきた頃——。

行く手てついに階段が終わり、その向こうにやや広めの板の間があった。しかし、上階の、二つの台座があった大広間と比べれば面積は数分の一だ。

「え……あそこが、帝城の最後の部屋？ 案外狭い……っていうか、何もないような……」

思わずそんな感想を漏らしたハルユキに、前て階段を下りながら振り返いたトリリードが、かすかな微笑みを浮かべて答えた。

「いえ、下まで降りれば見えますよ」

何が？ と思いつつ、足を早める。リードに遅れること数秒、板の間についたハルユキの視界に飛び込んだのは、二つ目の、そしていつそう巨大な鳥居だった。

板の間の正面に、左右の壁と天井に接するように朱色の門が屹立している。しかし、二本の柱を繋ぐ、上階の鳥居にはなかったオブリエクトが存在する。とてつもなく太い純白のロープ、あれは——注連縄だ。現世と神域を区切るアドレス境界、

ごくろしと生唾を呑み込みながら、ハルユキは絶対的隔離を表すゲートに数歩近づき、その向こうの神域を見通そうとした。

「……………広い……………」

喘ぐように呟く。

鳥居の左右から奥に向けて、小さなかかり火が二列に横れているのだが、三方の壁はまるで見えない。格子状の天井もうっすらと望める程度だ。床は磨かれた石畳だったが、面積は物語中の体育館を遥かに上回り、いったい縦横が何メートルあるのか見当もつかない。

広くて、冷たく、静かなのに、決して空疎ではないこの感じには覚えがある。少し考えただけで思い当たる。古城南門から伸びる大橋——《四神スズタ》が出現する前のあの空間を満ちていた、巨大なる千光をはらんだ静謐さだ。

それ以上何も言えずに立ち尽くすハルユキと、無言を保つ謎の間に、音もなくトリリードが進み出た。右腕を持ち上げ、立ち並ぶかがり火の彼方を指さす。

「あそこを」

言われるままに眼を凝らすと、確かにその先に、揺れる炎とは異なる波振の光が見えた。息を殺し、両眼にいつそう力を込める。間がわずかに過ぎ、隠していたものを露わにする。

それは、黒い石を切り出した台座だった。

上の空間に二つ並んでいたものと同じだ。前面に、金属のプレートも嵌っている。しかし余りにも距離がありすぎて文字までは読み取れない。そして台座の上では、ポータルの青い光に包まれるようにして、温かな黄金色の光がゆったりと脈動している。喘ぐように、呼びかける

ように、

無意識のうちに、注連縄に一步近寄ろうとしたハルユキの肩を、リードの右手がそつと觸した。

「いけません、この先は危険すぎます」

「で……でも……」

焦燥、あるいは渴望に似た感情のあまり応答もままならないハルユキに代わり、諷がそつと訊ねた。

「リードさん、あれが最後の《神遊》……本年七星の七番星なのですね？」

「ええ、そのとおりです」

リードは顔き、ハルユキの左肩に手を置いたまま、玲瓏たる声でその先を口にした。

「台座の銘板に刻まれた文字が読める距離まで近づかんとするだけでも、無限にも等しい時間が必要でした。あの光の名は――」

「――中国名、《攝光》。神器としての銘は《THE FLUCTUATING LIGHT》です」

《揺れ動く……光……》

無意識のうちに、ハルユキは口中でその名を繰り返した。

一切記憶にはない言葉だ。そもそもハルユキは、一昨日の七王会議に参加するまで（神薙）の存在すら知らなかったのだ。

しかし、にもかかわらず、いま心の奥からあふれ出し胸に満ちる感情にもっとも近いものは（懐かしさ）だった。

「……僕……僕は……」

尚も意識せぬままに、ハルユキは口を動かし続けた。

「僕は、あの光を見たことがある……」

「……………!!」

ハルユキの左側で、小柄な二人が鋭く息を呑む。開いけるような視線を受け、ハルユキは懸命に記憶を探りつつ言葉を重ねる。

「あれは……そう、あれは……やっぱり無制限中立フィールドで……初めて（心霊システム）の修行をした時だった。僕は、レイカー師匠に、旧東京タワーの天辺から落っこたされて……自分の手だけで登ってくるように言われて……」

それを聞いた途端、誰が小さく息を漏らす。同じくスカイ・レイカーに色々やらされていたという彼女はきつと「さもありなん」と思ったのだろうか。今はその心情を忖度する余裕もなく、ハルユキは掠れた声を漏らし続けた。

「……………最初は、壁に傷もつけられなかった。でも毎日毎日、貫手くわてで突き続けている間に、だんだん指先が食い込むようになって……そのうちに指の根本まで貫けるようになって……一週間後に、タワローを登り始めたんだ。無我夢中で、右手左手交互に突きながら、何時間もかかって壁を登ってる……時に……あの光が……」

でも、あれはオブジェクトじゃなかった気がする……あれは……あの金色の光は……」

そこでようやく、ハルユキはリードと謎に視線を向けた。両眼を見開いて聞いている二人に、ハルユキは直ただえる声で最後の言葉を告げた。

「——あれは、人ひとだった。僕を、呼んでいったんだ」

しばし、沈黙しんもくだけが空間を満たした。

それを破ったのは、誰かの言葉ではなく——ハルユキの視界に広がった、深紅しんこうの文字列だった。『DISCONNECTION WARNING』。切斷警告。現実世界で、黒雪クロユキ総たちのバーストアウトから三十秒が経過し、今まさにハルユキの直結ケーブルが引き抜かれようとしているのだ。

ニューロリンカーの直結コネクタは、防水能力のある非接触型端子である。ゆえに、XSBケーブルが引き抜かれようとしても、ごく短時間なら通信が持続する。もちろんコンマゼロ秒単位の話だが、それでも加速世界なら警告が出てから数十秒の猶予まよひはある。

「あつ……えつと……」

突然記憶の彼方から引き戻され、口をばくばくさせることしかできないハルニキに代わって、今度は論が冷静な声を出した。

「リードさん、私たちの仲間が、現実世界で同種切斷セーフティを発動させました。申し訳ありませんが、まもなく私たちはいったんバーストアウトするのです」

「は……はい、了解しました」

額いた若侍に、早女はやや早口になりつつの更に言葉を述べた。

「外部からの強制切斷ですので、次に強制脱フィールドにダイブした時は、私たちはまたこの座標に出現します。つきましては、厚顔をお願いではありますが、できればもう一度ここで会いたいです。リードさんが次にダイブできるのは、現実時間でいつ頃になりますか？」

「そうですね……」

ほんの一瞬考え、リードはすぐに答えた。

「それでは、二日後……六月二十日木曜日、午後七時ちようどで如何でしょうか」

「了解なのです。ご助力に感謝します、ありがとうございます」

べこり、と頭を下げる議に倣って、ハルニキも一礼してからようやく言葉を発した。

「あ、あの、リード、僕からお礼を言うよ、色々教えてくれてありがとう。でも……まだまだ話したいことや、聞きたいことがあるんだ。だから……また君に会えるの、楽しみにして

る」

境界の切斷警告は、高速で点滅を始めている。現実世界では、ニューロリンカーからXSSB
ケーブルが完全に引き抜かれようとしているところだろう。焦りつつも懸命に口にした言葉に、
相澤の若侍アバターは一度騒ぎしてから、複数の感情を覆わせる笑みを仄かに浮かべた。

「私も——タロウさん、メイデンさんとお話できて、とても楽しかった。約束ですよ、明日、
必ずまたここで。私も、もつともつとお二人と話したいですから」

そして、トマリード・テトラオキサイドという不思議なアバターネームを名乗る少年は、一
歩退くと謎とハルユキを順に見た。

秋風を思わせる涼やかなその立ち姿が、ついに訪れた暗闇に覆われ、消えた。

現実世界に復帰したハルユキが真つ先に意識したのは、ソファに沈む物理身体の重さでも、エアコンの効いた空気の暖かさでもなく——左頬に触れるしなやかな指先だった。

正直距離に、つい数刻前に《雷城》内死て見上げた美しい星雲があった。いや、違う。まるで星層のような光の粒子を湛えた、漆黒の瞳。

その瞳がゆっくりと一度瞬くと、ごく小さな水溜が長い睫毛から弾かれ、空気に溶けて消えた。同時に、ひそやかな囁き声。

「……戻ったか、ハルユキ君」

其よりも敬愛する剣の主、レギオン《ネガ・ネビュラス》頭首たる黒の王《フラック・ロータス》——黒雪姫の訝え訝えとした美貌をしばし見詰めたのち、ハルユキは認め声で答えた。

「はい、先輩。……いま、戻りました」

ハルユキが目覚めた場所は、現実世界の杉並区北高円寺に建つ複合高層マンションの二十三

階「三〇五号室、すなわち有田家のリビングタートルームだ。

南の窓近くに置かれたソファセットの中央に座るハルユキの正面で、黒雪姫が左手をソファ

の背もたれに突いた格好で身を乗り出し、右手の指先をそつとハルユキの頬に添えている。その聲にはXSBケーブルのプラグが握り込まれ、銀色のコードは壁のコンセントパネルへと伸びている。

パネルは、有田家のホームサーバーと有線接続するためのものだ。今回のダイブにあたって、ハルユキたちは無線ではなく有線でホームサーバーを介してグローバル接続していた。そのケーブルを、黒雪姫がハルユキのニューロリンカーから引き抜いたため、ハルユキと諭は「ポータル」を使うことなく現実世界に帰還したわけだ。

黒雪姫は、指先をハルユキの頬に触れさせたまま、低く囁いた。

「……長い三十秒だったぞ。こうしている間にも、キミと諭が《帝城》の中でエネミーに追われているのではないか……あるいは蘇生と死亡を何度も繰り返してしまっているのではないかと、気が気ではなかった」

その声がほんのわずかに震えているのを意識した瞬間、ハルユキの胸にも強く衝き上げてくるものがあった。

上体をまっすぐに起こしてから、大きく息を吸い込み、口を開く。

「先輩……、あの時……《スザク》のターゲットが僕に移動した時、撤退命令を破ってすみませんでした。でも……でも僕、どうしても……」

あれほど、現実世界に戻ったらちゃんと謝ろうと決意したのに、いざとなると言語機能がま



つなくついてこない。唇を噛み締め、開き、また噛むことを繰り返す。

と、黒雪姫はソファから左手を離し、右手のケーブルも下に落とすと、空いた両手でそつとハルユキの両肩を包んだ。色の薄い、しかし艶やかな唇に、スイレンの蕾が綻びるような笑みが滲む。

「いいんだ、ハルユキ君。そういうキミだからこそ、私は私とレギオンの未来を託せると信じたのだからな。キミはあのスザクの炎すら振り切り、ただ前へと飛躍した。その勇気を、とうして私が資めるものか……」

「……せん、ばい………」

込み上げてくるものを堪えながら、ハルユキはただひたすら黒雪姫の瞳を見詰めた。ぎゅうつと両手を握りしめ、溢れてくる感情を懸命に言葉へ変えようとした。

「……先輩、僕……僕が飛べたのは、先輩が何度も飛べゆってひっへふれはひふ」

——と、せつかくの台詞の語尾が台無しになったのは。

左右から伸びてきた二本の手がハルユキの両頬をつまみ、ぬぐぐぐぐと思ひ切り引っ張ったからだだった。

「あのねえ！ いつまで——」

と左頬をつねるチユリが叫び、右頬をつねる楓子がその後を引き離いだ。

「——やってるんですか二人とも！」

三分後。

場所をソファからダイニングテーブルへと移し、南側にハルユキと説^{ツツ}、その向かいにタムとチユリ、左に黒雪姫、右に楓子という並びで席に着いたところで、一同は揃って現在時刻を確認した。

午後七時三十五分。

《アーダー・メイデン救出作戦》を開始してから、現実時間ではまだ十分足らずしか経過していない。しかしハルユキの実感では、無制限中立フィールドにダイブするための《アンリミテッド・バースト》コマンドを唱えたのはもう昨日のことのようだ。

いや、実際に《帝城》の内側で六時間も仮眠してしまったのだから、そう感じられても当たり前だろう。しかもあの脱りの中で、とてつもなく長い夢を見た気がする。六時間どころではない、数日……いや、数年にも及ぶ記憶を再体験したかのような……

「——まずは、皆、お疲れ様」

という黒雪姫の言葉が、ハルユキの思考を迷^{まよ}った。「おつかれさま……」の唱和に愧^{はづ}てて声を合わせる。

チユリが淹^ひれてくれたカフェオレを一口含む、黒雪姫は一同を見渡しつつ続けた、

『《食糧補給の純淨化計画》第二フェーズ、《アーダー・メイデン救出作戦》は、残念ながら全面

的に大成功とは行かなかった。その責任は全て、《四神スザク》のターゲットを取り続けられなかった私にある。——済まなかった」

そう言って深く頭を下げようとするレギオンマスターに、配下五人は声を合わせて「そんなこと！」と叫んだ。

すぐに、レギオン副長を務める倉崎楓子——スカイ・レイカーが代表で発言する。

「サツちゃん、スザクはあの時、鶴さんが一切攻撃していないのにタゲを移したのよ。あの挙動は誰にも予想できなかったわ。恐らくは、自分に最大量のダメージを与えた者よりも、テリトリーを深く侵した者に対してより大きな憎悪値を加算する設定になっているのでしょうけど……」

その言葉を聞き、いつとき顔を上げた黒宮姫は、再び考え込むように眼を伏せた。

短い沈黙を、ハルユキはおずおずと右手を上げて破った。

「あの……神匠、いまの、ヘイトの加算の話ですけど……」

《憎悪値》とはつまり、エネミーが攻撃対象を選択するロジックを数値的に説明する言葉だ。

直接攻撃したバーストリンカーはもちろん、妨害系の間接攻撃をしたり、他のバーストリンカーを能力で支援するだけでもヘイトは増加し、その時点で最大数値の相手をエネミーは攻撃する。——と、一般には考えられている。

スザクも、超級、四神、と言われているがあくまで人ならぬエネミーである以上、そ

のヘイト原理に基づいてターゲットを選択しているはずだ。今叫、大橋の上でスザクがターゲットを黒衝威からハルニキに移動させたのは、直接攻撃をした者よりも、審城南門に近づいた者のほうがよりスザクのヘイトを稼^{かせ}ぐ設定になっていたからだ、というのが楓子の発言の趣旨^{しゆい}なのだ^が。

「なんです、鶴さん？」

ふんわりとしたスタイルのロングヘアを揺らして首を傾ける楓子に、ハルニキはただたくしく誤^{あや}めた。

「……スザクは……いえ、スザクを含む《四神》は、ほかのエネミーよりもっと高度なAIで動いている、つてことはないでしょうか？ いえ、AIっていうよりも、なんていうか……ええと……」

自分の言いたいことを上手^{うすず}く言葉にできないもどかしさに、ハルニキが口をばくばくさせていると――。

右隣^{みぎとなり}に座り、一人だけホットミルクのカップを抱えていた四神^{ししん}高橋^{たかはし}が、それをテーブルに置くや両手を両^{ふた}に隠^{かく}らせた。

ハルニキの視界下部に表示されていた半透明ウィンドウに、桜色のフォントが驚^{おどろ}くべき高速で流れる。

「UIV 有用^{ゆうよう}さんが仰^{おん}りたいのは、おそらくこういうことなのです。四神には、AIの域を

超えた、本物の意志があるのではないか、と」

「そ………そう！　そういうことです！—」

こくこくと頷いてから、ハルニキは今史のように自分の意見の荒唐無稽さを自覚し、周囲からのアキレ光線を受け止めるべく首を縮めた。

——しかし、意外にも、テーブルを囲む仲間たちの一人として笑ったりため息をついたりしようとはしなかった。直接にはスザクを見なかったはずのタクムですら、リムレスの眼鏡の奥で考え込むように咽喉を締めている。

静寂の中、再び誰の十指が軽やかにホロキーボードを叩いた。

「UIV 少なくとも、第一期ネガ・ネビュラスを壊滅させた《四神攻略戦》の時とは、スザクの行動アルゴリズムに変化があったのは確実なのです。二年前には、スザクは間違いない最大ダメージを与えた者を優先的にターゲットしていましたが、サツちゃんとフリーねえが戦った西門の《ピヤツコ》はどうでしたか？」

「………ういういの言うとおりです」

呟きながら頷いたのは楓子だった。

「ピヤツコも、先の戦いでは、攻撃対象の位置にかかわらずメインアタッカー隊のみを照準していたように記憶しています」

「ああ………間違いない。だからこそ、駐後にメンバーを撤退させるために、私が囑になること

ができたんだからな」

櫃子の向かい側でそう応じた黒雪姫は、両の眼を鋭く細めて続けた。

「だが……確かに今回のスザタの挙動には、単にヘイトの増減に従わされているだけとは思えない部分もあったな……」と言って、第三者の遠隔操作や、単にアルゴリズムの異常という印象もなかった……」

すると、ハルユキの正面に座るタタムが、あさ先に右手をあてがいながら口を開いた。

「しかしマスター、それではまるで……スザタが、今回の僕らの目的は奴を倒すことではなく、四葉宮さんを救出することだと看破していたようではありませんか？ であるなら、それはもうA-1プログラムの域ではなく……ハルの言うとおり、洞察力すら備えた……（知性）と呼ぶべきでは……」

再び、数秒の沈黙。

やがて黒雪姫が、ふ、と小さく微笑んだ。続けて、いつそう低められた声。

「……今は、この疑問に答えは出せないな、だが、一つだけ情報を付け加えておこう。私の心意改革に反応し、前進していたスザタが、ハルユキ君にターゲットを移す寸前……私も見たように思うよ。あの鳥が、奴を嘲笑うように囁を聞いたのをな……」

——そう。

ハルユキも、確かに聞いた気がするのだ。火炎プレスを放つ寸前、スザタが落した声なき声

を、小さき者よ、尻になれ、と。

「——でも、さー」

漸き加減だった一同の中で、真っ先に顔を上げたチユリが、勢いよく言った。

「あのトリに意志だの知性だのがあるーと、ううん、たとえ本物の神様だろーと、あたしたちやられっぱなしじゃなかったじゃんー 作戦、大成功じゃないけど大失敗でもないよね、黒雷先遣、だってさ……ハルも、ういちやんも、生きてるじゃない。生きて、しかも、あの門の中に飛び込んだじゃない。——ねえ、ハル」

箱を思わせる器をさらきりと解かせ、テーブルに身を乗り出したチユリは、両手をきゅっと握った格好で叫んだ。

「あたしもう、これ以上ガマンできないよー《古城》の中ってどんなだったの!? 何があったの!? 早く教えないさ、最初っから最後まで……」

突然の尋問開始にハルユキが眼を白黒させていると、左で黒雲姫が笑い声を上げた。

「ははは……、相違わらずチユリ君は曲球投手だな。その話を聞けるなら……いやーもう……イントロからバーストリンカーが山ほどいるだろうと思うと、秘ですらちよっと考慮してしまっていたのに」

「ふふ、本当ね。絶対不可侵の《古城》に足を踏み入れ、内部の情報を持ち増ることに成功したバーストリンカーが目の前にいると思うと、私もさっさから心臓がどきどきしっぱなしで

す」

と、瓢子も大きな仕事で胸を締めて見せる。

ハルユキは、やや複雑な笑みを右頬に浮かべ、とりあえず陣の語と視線を合わせてみた。小学四年生にして旧木ガ・ネビユラス（四元素）の一角を占めていた少女は、お任せします、というように顔を傾けた。

考えてみれば、〈帝城〉の中であったことを全てチャットで説明しようとしたら、両手の指が撃つほどの文字数を打ち込まねばならないだろう。ここは僕ががんばるしかない! と腹をくくり、ハルユキはもう一度時計を見てから、まず前置きした。

「えーと……最初から最後まで話すと、相当時間かかると思うんですが……皆さん、門限は大丈夫ですか?」

時刻は火曜の夜八時になんなんとしていたが、小学生の語を含め、首を横に振った者は一人もいなかった。

帝城南門から、まっすぐ北に伸びる石敷きの大路と、そこを巡回する鬱ろしげな武者エネミ一群。

拘欄たる鎖窓に彩られた襦袢が幾重にも連なる巨大な〈本殿〉。その中心にあった大広間と、そこに設置された二つの白座。北斗七星の鏡板に刻まれていた、〈ザ・デイスティニー〉及び

「フ・インフィニティ」の名前

ハルユキがそこまで話した時、黒雪姫と楓子がはっと眼を見交わしたように思えた。しかし二人とも口を挟もうとはせず、またそこらが話の核心部分だったので、ハルユキは気にとめることなく説明を続けた。

広間で突如声を掛けてきた、紺碧の若侍アバター、

彼の案内で下りた階段の先の、広大な地ト空間、

そしてその彼方に横らめいていた、黄金の光、第七の神器、（サ・フラクチュエーティン・グ・ライト）――

最終的に同様切断によって無制限中立フィールドから離脱した所までを、折々に話の注釈を受けながらもどうにか語り終えた時は、たつぷり三十分以上が経過していた。

ハルユキが、ふうつと息をついてから二杯目のカフェオレを飲み干す間、誰も何も喋ろうとはしなかった。マグカップがテーブルに置かれてから数秒後、ようやく黒雪姫が囁くような声で言った。

「……第五の神器（インフィニティ）の所有者……（トリリッド・テトラオキサイド）……」

――フーコ、その名を聞いたことは？」

この場では黒雪姫と花んで最古参バーストリンカーの楓子は、その間にすぐかぶりを振っ

た。

「いいえ、強化外装も、バーストリンカーも、どちらも初耳。そもそも、《トリリード》とか《テトラオキサイド》なんていう英単語自体知らないわ。なんだか……分子式みたいな語感ではあるけれど……」

ただ一人高校生である彼女が知らない単語を、他の小中学生五人が知るよしもない。

「調べてみましょう」

眼鏡のブリッジを押し上げながらそう言ったタタムが、仮想デスクトップに指を走らせた。さすがの検索スキルで、十秒しないうちに該当単語を見つけたらしく、顔を上げて一度頷く。

「レイカーさんが正解です。これは分子式……《四酸化三鉛》のことです」

——と言われても、どんな物質なのか暗黙に想像しにくい。ハルユキは眉を寄せながら正面のタタムに小声で訊ねた。

「タタ、鉛ってのは、その、金属……だよな？」

すると、親友はやけに優しい笑顔で「そうだよ」と頷く。どうやらお馬鹿さんな質問をしてしまったらしいという顔を覗かいてごまかし、ハルユキはしかつめらしい顔を作った。「でも、あいつ……トリリードは、ぜんぜんメタルカラーっぽくなかったけどな、きれいに透き通った藍色っていうか紺色っていうか……武装も含めて、ガチ青系って感じ……」

若侍の凛々しい佇まいを思い出しつつハルユキが左右に首を捻っていると、左に座る黒雪姫

が卓上で両手を組み合わせ、「ともあれ」と声を発した。

「――目下、我々の急務は《帝城》の謎を解くことではなく、論とハルユキ君の脱出だ。次の日曜までに、シルバー・タロウに密生する《哀憫の館》の因子を浄化せねば、ハルユキ君は加速世界第二位の賞金首になってしまうからな」

そこでちらりとハルユキに視線を送り、一瞬の微笑みを浮かべる。

「……無論、そうなったところでキミをむさむさ狩らせはしないが、ね」

「……………先輩……………」

再び見つめ合いモードに入りかけたところで、チユリが両手をばんばん叩く。

「はい、カットカーット……………そういえば黒雪雪童、あたしその賞金首の話聞いた時からちよつと疑問に思ってたんだけど……………」

「な、何だい、チユリ君」

こはん、と咳払いする黒雪雪童に、チユリは両手を広げながら訊ねた。

「そもそも、ハルに密生してるっていう《哀憫の館》がちゃんと浄化されたかどうか、六十はどうやって確かめる気なの？ 他人のアイテム欄なんか見られないし、それ以前に《館》はアイテム欄には表示されてないんでしよう？」

「あつ……………そ、そう言えば……………」

と、声を漏らしたのはハルユキだ。自分自身のことなのに、そのもつともすぎる疑問をこれ

まで一度も感ずることがなかったのは狂亂以外のなにものでもない。

そんなハルユキの様子に墨雪姫は軽く苦笑したが、すぐに真剣な表情に戻り、言った。

「恐らく、日曜の会合には、（他人のステータスを見る）力を持つバーストリンカーが現れるはずだ。王選中は、その者にシルバー・クロウの浄化を模索させる気だろう」

「……そう、でしょうね……」

反対側で、楓子がゆっくりと頷く。いつもはにこにこ穏やかに笑っている両眼に、きらりと鋭い光が横切る。

「——（四重の分析者）、彼女が久々に姿を現すだろうと、わたしも思っています」

バーストリンカーとしての固有名ではなく通り名であろう、その名前を聞いた瞬間——。びりっ、と頭（かしら）の芯（こゝろ）が引き撃れた気がした。

間違ひなく初耳だ。そんな名前を聞いたことはないし、そもそも（人のステータスを見る）などという能力があることすら知らなかった。なのに、ちくちくと記憶の深いところが熱く、その感覚は、中脳神経にまで溢れ、脊髄（せきすい）を流れて背中（せなか）の一点に到達する。

ずきん。ずきん。鈍い痛みと同期して、遠く——誰かの声。

「……コワセ……」

「……ヤツラデ、コワシテ、タラエ……。ワレノ、イカリデ……。トキハナデ……」

いつしか、掌（てのひら）に爪（つめ）が食い込むほど固く握りしめていた右手に、不意に柔らかな何かが触れた。

見れば、隣に坐る證が、テーブルの陰でそつとハルユキの拳を押さえていた。ちらりと向けられた大きな瞳に、仄かな危惧の色がある。

ハルユキは慌てて両手を広げ、大丈夫、というように首を揺がせた。幸い、他の四人は《浄化》の機転について話していて、ハルユキの異常には気づかなかつたようだった。

「……最悪、帝城の中でアーダー・メイデンにシルバー・タロウを《浄化》してもらい、日曜の会合に間に合わせるという手もあるのでは？」

というタタムの発言に、證が引き戻した両手でホロキーボードを叩く。

『U』 絶対に不可能とは思いませんが、できれば帝城の中で大規模な心意技は使いたくないのです。強すぎる心意の波動は、高位のエネミーを呼び寄せてしまう危険があります』

「うむ……、エネミーは、巨獣級、神獣級と位が上がるほどに心意技が通じにくくなり、同時に心意の使い手に対する攻撃性も増すからな。恐らくは、心意システムによる局地的な異常負荷が、奴らの憎悪値をイレギュラーに増大させるのだろうが……帝城の警護エネミーともなれば、その反応もより強まっていると考えるべきだろう」

そう注釈した黒古雄が、椅子の上でびんと背筋を伸ばし、一同を見渡して続けた。

「——やはり、シルバー・タロウとアーダー・メイデンには、日曜までに帝城から脱出して貰わねばならん。そのためには、正体不明ではあるが、《トリタード・テトラオキサイド》なるパーストリンカーの助力を請うのが最善だろうと私は思う。論、ハルユキ君、水曜日にその者

と再会した折には、黒の王とネガ・ネビュラスの名に於いて、助力に對するいかなる対価をも支払うと伝えてくれ給え」

ここで夜九時十分前となり、黒雪姫は「今日のミッシェンはこれでひとまず終了とする」と付け加えて発言を終えた。

一度帰宅してから車で来ていた親子が話と黒雪姫を送っていくこととなり、まず三人が地下駐車場行きのエレベータに乗った。続けてチユリも、サンドイッチが調製されていた大皿と一緒に、ばたばたと二階下の自宅へ戻り、二十三階の廊下にはハルユキとタタムだけが残された。

「じゃあ、ハル、明日また学校で」

そう言つて、マンシヨンの別棟に繋がる連絡通路方向に歩き始めようとしたタタムを――

「タタ……まだ時間、大丈夫か？」

と、ハルユキは小声で呼び止めた。

首を傾げて振り向く幼馴染に、たどたどしく訊ねる。

「あのさ……お前、今週に入ってから、何回くらい《対戦》した？」

「え……うーん、学校帰りに二、三回ずつ……合計で十回足らずだと思っただけ……」

そう答えてから、タタムは何かを察したように躊躇し、声を低めて続けた。

「ああ……もしかして、昨日ばくとサーちゃんが出た、ハルが賞金首になってもポイントを

供給するって話を気にしてゐるなら、心配ないよ。ばくの勝率は相変わらずだけど、ここんところチーちゃんめきめき腕を上げてゐるからさ。うかうかしていると、レベルでも抜かれちゃいそうだよ」

そんな肉詞とともにタタムが白濁きみな笑いを浮かべようとするので、ハルユキは慌てて首を横に振った。

「ち、達うんだ、そういう話じゃない。ままと……タタ、お前、その十回の対戦のあいだに……何か、妙なことに気づかなかったか……？」

おおよそ漠然としたハルユキの顔いかけに、タタムは怪訝そうな表情を作ってから、すぐに唇を苦笑した。

「その質問がすでに妙だよ。何か、って言われても、何を思ひだしていいのかも解らないよ」
「あ……ああ、それもそうだよな……」

頭をかきかき、ハルユキも短く照れ笑いを浮かべた。

ハルユキが聞きたかったのは、具体的には「相手のバーストリンカーが一般対戦の枠を超えた技なり能力を使わなかったか」ということだ。より詳細に言うならば、「悪いオーラをまとった近距離、あるいは遠距離の心意攻撃を行わなかったか」となる。

昨日の月曜日の放課後、ハルユキは四葉宮と一緒に杉並第二戦場でタタム対戦を行った。相手は、緑のレギオンに所属する「フッシュ・ウィタン」、及び「ヘオリープ・クラブ」の二

人組だった。ウータンは相手をする事になったハルユキは、当初、黒雪姫直伝の《柔法》

——《受け返し》の技術を用い、戦いを有利に進めた。

しかし、中盤。ウータンが奇妙な強化外装を召還するや、戦局はあっさりといっくりに返った。闇のオーラをまとった拳で攻撃する《ダーク・ブロー》、そして掌から闇のビームを撃ち出す《ダーク・ショット》という二種類の心意技にハルユキは為す術なく追い詰められてしまったのだ。誠とのタッグ戦でなければ、そのまま敗れていただろうことは想像に難くない。

ウータンは、胸に装着した黒い眼球型の強化外装を《ISSキット》——すなわち《心意システム学習キット》と呼び、誰かに譲渡されたのだと語った。

それを着けるだけで、長時間の修練が必要なのは心意システムがインスタントに使えるようになるのだとしたら、これは加速世界が根本から揺るぎかねない事態だ。そう考えたハルユキは、今日の登校時間にウータンの兄貴分であるバイク使い《アッシュ・ローラー》にタロージド対戦を申し込み、事情を説明した。するとアッシュは、いつになく深刻な口調でハルユキに告げた。

もしその《ISSキット》が無限にコピー可能だとしたら、もう手遅れかもしれない。密かに譲渡を繰り返され、すでに対処不可能な数が出回ってしまっているかもしれない、と。

だから、ある意味では、ハルユキに寄生する《愛情の罠》の因子よりもISSキットのほうが重大事だとも言える。今日の《アーダー・メイデン救出作戦》開始直前の合議で、ハルユキ

はキットの出現を議題に出してもよかった。いや、つい数分前に黒書塾が今日はこれで解散と告げた時、手を挙げて発言することもできた。

しかし、ハルユキはそうしなかった。まずは敵出作戰に全員で集中すべきだと考えた、という理由もある。

でも、それだけでは無い気がする。仲間たちに、ISSキットのことを知らせたくないという心理が自分の中に存在する、そう思えるのだ。

言うべきことを言えなかった、その後ろめだが、ハルユキにタタムを呼び止めさせたのかもしれない。

タタムなら、かつて本音をぶつけ合い、本気の拳を交わし、〈ダスク・タイカー〉事件では共に激しい戦いを乗り越えた親友なら、いつの間にか抱えてしまった重荷を、今度も一緒に背負ってくれるに違いないと、そう考えた——のだが。

薄暗い共用廊下の片隅で、長身の幼馴染の顔を見上げ、改めて全てを説明しようとした瞬間、ハルユキは再び自分の口に何かがブレーキをかけるのを感じた。

……なんて？ どうして僕はためらうんだ？

……タタジやないか。無二の親友にして、レダオンのシートップを務める相棒。考えなしの僕をいつも冷静に助けてくれる、最高のパートナー。ISSキットのことを最初に相談するのに、タタほど相応しい相手はいない。

——なのに、なんでこんなに胸騒ぎがするんだ。

ハルユキは、いつそう怪訝そうな顔になる。タタムをじつと見上げたまま、大きく息を吸って原因不明のざわつきを抑え込んだ。

「実は……」

そう話し始めてからも、舌はこわばり、喉がひりついた。それらの感覚を懸命に無視して、ハルユキは言葉を続けた。

「実はな、タタ。今、加速世界で妙なことが起きてる……かもしれないんだ。長くなるから、もうちょつとオレんちで話そう」

二人でハルユキの家のリビングに引き返し、パーコレーターに残っていたコーヒードリンクを温めながら夢中で話すうち、おかしな胸騒ぎはようやく消え去った。

ブッシュ・ウィタン。ISSキッド。そして闇の渡船をまとう心意攻撃。

それらの話を聞き終わったタタムは、テーブルに肘をついた両手を組んで額にあって、胸いたまましばらく沈黙を続けた。やや長い静寂にハルユキが不安になりかけた時、ようやく顔を上げると。

眼鏡の奥の両眼には、いつもの理知的な光だけがあった。ハルユキはわけもなくほっとしながら、「……」と頷いた。

「……うーん……正面、俄には実感しにくい話だよわ……」

タタムはそう呟くと、冷めたコーヒーを一口含んだ。

「〈心意システム〉を体得するのがどれほど大変か、ばくも赤の工との修行でいちおう知ってるつもりだからね。あの時は、自分の枕を受け止められるようになるだけでも、左手に何回大穴を開けたか判らないよ」

タタムのアバター〈シアン・パイル〉の心意技、その名も〈蒼刃剣〉は、右手に装備された強化外装〈パイルドライバー〉から撃ち出される鉄枕を左手で受けて引き抜き、長剣へと変える技だ。自身の心の傷の象徴である枕を受け止めるためには、単なる反復練習ではなく、辛い記憶と正面から向き合う必要があっただろう。

「ああ……、オレも、旧東京タワーの壁を貫けるようになるまで、気が遠くなるくらい練習したな。スピード、スピードってそればかり念じてさ……」

ハルユキがそう述懐すると、二人揃ってしばし遠い目になってしまふ。訳あって、タタムに心意システムを伝授したのはレギオン（プロミネンス）の頭首たる赤の王スカイレット・レインののだが、彼女のスパルタっぷりはハルユキの心意の師であるスカイ・レイカーにタメを張るものだったであらう。

それほどの苦勞をして、ハルユキは〈射撃技〉、タタムは〈威力拡張〉という心意の基本技をひとつ、どうにかこうにか習得できただけなのだ。

「……なのに、そのISSキットは、装着するだけで威力拡張枝の（データ・ブロー）と射程拡張枝の（データ・ショット）を両方使えるようになる……っていうのかい？」

寂れた声でそう言うと、タムは自分の左手に視線を落とし、あまりハルユキが見た覚えのない色合いの笑みを口の端に滲ませた。

「……その届かないものは、どんなに努力しても決して得られない。それがブレイン・パーストの天原剛……ばくはずっとそう思っていたよ。デュエルアバターは、残酷なほど明快に、自身の自分の限界を教えてくれる。だからこそあのゲームは、もうひとつの現実たり得るんだ、ってね……」

「……………タタ……………」

やや唐突な言葉にハルユキが首を傾げると、タムははっとしたように顔を上げた。その口元には、もういつもの理知的な微笑だけがあつた。

「ああ、ごめんよ、気にしないでくれ。――確かに、そんな強化外装が流通しているとすれば出々しき事態だね。（対戦）や（領土戦）のバランスが崩壊してしまう」

「そ……………うだよな」

ハルユキは頷き、理由のない説和感のようなものを押しのけて言葉を繋いだ。

「一般対戦で心意気が使われるってだけでも大変なのに、あの力は万能すぎる。正直……オレたちみたいな心意切心者じゃ対処できないよ。一昨日の（七王会議）じゃ、状況によっては心

意思システムの存在を全パーストリンカーに公開すべきだみたいな意見もあったけど……ISSキットが広く出回っちゃったら、今更心査技を初歩から修行する意味なんかあるのかどうか……これじゃまるです……」

「先手を打たれたみたいだ、かい？」

ハルユキが探そうとした言葉を的確に言い当てたタタムは、いつそう鮮しい顔で眼鏡のブリッジを押し上げた。

「でもハル、だとしたら、つまりこういうことになるよ、一週間前の〈ヘルメス・コード機走レース〉で大勢のギャラリィに心意気システムの威力を見せつけた彼らが、イコール今回ISSキットをばらまいてる黒幕だ……って」

「あっ……」

今まで、その可能性をわずかにも考えなかったハルユキは、がたんと椅子が鳴るほど大きく体を起こした。両眼を見開き、タタムの示唆した組織の名を囁く。

「……〈加速研究会〉……？」

「最初から考えてみよう。連中が初めて姿を現したのは、今年の四月だ。違法プレイン・イン・ブランド・チップを巧みに利用して、梅郷中ローカルネットを〈ダスタ・タイカー〉が、そして秋葉原バトル・グラウンドを〈ラスト・ジグソー〉が攻撃した。もしかしたら、他にも同じ手口で荒らされたクロードネットがあったかもしれない」

いつときにせよハルニキたちを完全に屈服させた《略奪者》の威威を思い出し、ぶるりと全身を震わせながら頷く。しかし、こうして改めて思い出すと、当時は気づけなかった疑問も浮かんでくる。

「でも……タタ、考えてみると妙だよな。四月の時点では、その二人とも、自分から積極的に心意投を使おうとしなかった。ダスク・テイカーがあの紫の波動を使い始めたのは、対戦でタタに追い込まれてからだし……ラスト・ジグソーに至っては結局最後まで使わなかった気がする。あいつらなら、最初から心意全開で攻撃してきてもおかしくなかったのに……」

「制服されていた、と考えるべきだろうね。でもその理由はきっと、ばくらが赤の王やレイカーさんに警告されたように、《心意の濫用はダータサイドを呼び寄せる危険があるから》じゃないと思う」

タタムの言葉に、ハルニキはもう一度深く頷いた。

心意システムが観るす力には、数学というXY平面のように、四つの象限がある。

X軸にイマジネーションの広さ——すなわち個人に向くか世界に向くか、そしてY軸にイマジネーションの明暗——すなわち希望を源とするか絶望を源とするかを取ると、右上の第一象限には《範囲を対象とする正の心意》、左上の第二象限に《個人を対象とする正の心意》、左下の第三象限に《個人を対象とする負の心意》、そして右下の第四象限に《範囲を対象とする負の心意》が配される。

ハルユキの（光線剣）やタタムの（番刃剣）、そしてレベルは速かに遠くと黒雪姫の（奪命撃）などほとんど攻撃型心意技は第二象限に分類される。それらは（自分の中にある希望）を源としているからだ。あまねく心意の源泉は（心の傷）ではあるが、その深い穴から希望を汲み出すか、絶望の間に落ちるかはその人の選択に委ねられているのである。

そして、純ではあるが第一象限の心意を使いこなすバーストリンカーもいる。自分と周囲の仲間を守る、黒子の（庇護風陣）はその最たるものだし、ハルユキは技の名前を知らないが、広範囲を経路の炎で焼き払った諷の心意技もおそらくそうだ。なぜなら、あの炎に灼かれたブッシュ・ウィタンは、一切の苦痛を感じていなかった。あれは苦しみを祓う（浄化の炎）なのだ。

しかし、あらゆる心意がそのような正の力を顯わすわけではない。

たとえば、ダスタ・タイカーの、固有技名を持たない（業の波動）。あらゆるオブジェクトを餌取り虚無に呑み込むあの技は、第三象限——内的な絶望をエネルギーとする暗黒面の攻撃力だ。

そして、ラスト・ジグソーの（踊る秩序）。

直径百メートルもの赤銅の嵐を召還し、範囲内の万物を腐食・崩壊させたあの力こそが第四象限の力に他ならない。世界に対する絶望を源に生み出される、終末のイマジネーション。つまるところ、加速研究会の二人はおそらく、最初から負の心意を身につけていたのだ。

今更ダークサイドに堕ちることを、彼らの陣が気遣う理由がない。

「……てことは、何かもつと……具体的な理由があつて心意を制限されてたのかな……」

ハルユキの咄きに、タカムもゆっくり頷いた。

「そう、だろうね。——しかし先週、ヘルメス・コードのレースに乱入してきた時は、ラスト・ジグソーは現れるや否や心意技を使った。いや、使ったなんてレベルじゃない……他のチームはおろかギヤラリーまで何百人も巻き込んで、心意攻撃の恐ろしさを骨身に沁みさせたんだから。しかもあの場には、《加速研究会》の副会長を名乗る《フラック・バイス》までいたんだ。だからあの大規模攻撃は、組織そのものの意志だと思ふべきだよ」

「で、でも、だとしたら、たった二ヶ月で方針転換しすぎじゃないか？ 四月の時は伏せようとして、六月になったら逆に見せつけるなんて……」

車上で両手を振り動かしながらハルユキがそう言うとき、タカムは一瞬間を置いてから、静かに答えた。

「つまり、その二ヶ月の間に、準備が整った——んだだろうね」

「じゃ、準備？ なんの？」

「……《ISSキット》をばらまく準備、さ」

「——！！」

再び、ハルユキの椅子がガタンと鳴った。

二人はそのまゝ、無言で数秒間互いの顔を見交わし続けた。タタムの頬は常よりも白く血色を失っていたし、自分の顔はそれ以上に青ざめているだろうとハルユキは思った。

やがて、冷め切ったコーヒの最後の一口を飲み干し、タタムが唇を動かした。

「いまの推測が事実なら、四割、としか言えないな。常に次の局面を想定した一手を打っている感じだ。——ヘルメス・コードでの大規模攻撃で多くのギヤラリーに心意システムの不慮な威力を見せつけ、その直後に（お手軽心意習得装置）としてISSキットをばらまく。本当なら、そんな怪しげな強化外装を着けるのは躊躇うはずのベテランパイストリンカーも、焦りに負けて、手を出してしよう……」

ハルユキの脳裏に、昨日のブッシュ・ウータンのひび割れた声が甦った。

——ISSモードには、あんなとてつもないパワーがあるんす。ブレイン・パイストのルールそのものをぶっ飛ばすような、究極の力が。それを知ってて、ずっと隠してた汚い奴らがいるんすよ……。

ウータンのその独白には、恐怖や焦りだけではなく、これまで心意システムの存在を秘匿してきた者たち——そこには無論ハルユキも含まれる——への強い反感も込められていた。それだけの感情エネルギーがあれば、おどろおどろしい外見のあの《黒い眼珠》を受け入れる動機としては充分だろう。

口元をこわばらせながら、ハルユキはおそろおそろ親友に訊ねた。

「……なら、タタ、奴らの最終目的は、加速世界にISSキットを蔓延まんえんさせること……なの
か？ それとも……」

「**（タタ）**がまだあるのか」

囁き、タタムは空のコーヒーカップを凝視したまま小さく頷いた。

「それを判断するには、情報が足りないな。ばくもそのISSキットを自分の目で見てみない
か……」

「……………」

ハルユキが何も言えずにいるうちに、タタムはちらりと視界右下の時刻表示を一瞥し、立ち
上がった。

「ハル、そろそろお母さんが帰ってくる時間だろ？ 今日はいとまず、このへんにしておこ
う」

「あ……」

言われてみれば、いつのまにか夜十時が近づいている。外資系の投資銀行に勤めるハルユキ
の母親は、出社が遅い代わりに帰宅も遅いが、それでももういつ帰ってきてもおかしくない時
間帯ではある。別にこの時間にタタムがいたからといって怒るような母親ではないものの、堂
堂とブレイン・バーストの話を続けるわけにもいかない。

リビングを出ようとするタタムの後を追いつながら、ハルユキは小声で最後の質問を口にした、

「あのさ、タタ。今の話……黒雪姫先輩たちにもしといたほうがいい……よな？」

「……………それは、もちろんそうだね」

玄關の手前で振り向き、そう答えたタタムの顔には、いつもの理知的な表情だけがあった。だからハルユキは、答えが返る前の少し長い沈黙のことは忘れ、こくこくと頷いた。

「だよな。じゃあ……先輩には、明日オレから話しておくよ。幸い、もう一度帝城に潜るのは本願だから、明日いちにちはやることないし」

「……………」

すると再び、タタムは黙したままどこかまぶしそうに眼を細めた。ハルユキが肩を上げると、いや、と受う。

「ハルが、(帝城に潜る)なんてあつきりと言うからさ。相変わらず、どこまでもすつ飛んで行っちゃうヤツだな、と思つて」

「い、いやあ、それはどうでも……」

「ははは、僕めてないよ」

伸ばした右手でハルユキの肩を軽く小突き、タタムは靴を履いた。表情を改め、言葉を付け加える。

「——SSキットの件は、ばくなりに少し情報を集めてみるよ」

「……………あ、ああ、よろしく頼む。でも……あんまり、無茶なことすんなよ」

と云つてから、ハルニキは自分がなぜそんなことを言つたのか少し不思議に思つた。長年、無茶をするのがハルニキで、それを止めるのがタタムの役回りだつたからだ。

同じことを感じたのか、タタムはもう一度微笑むと頷いた。

「うん、解つてゐる。――じゃあ、また明日、学校で」

「ああ……また明日な」

ハルニキに軽く手を挙げ、親友はドアを開けると、薄暗い共用廊下へと滑り出た。

再び閉まつたドアの自動施錠音を聞きながら、ハルニキは再び、あの感覚が胸に戻つてくるのを意識していた。

――話したくなかつた、話すべきではなかつたのだ、という。

錯覚だ、相談してよかつたのだ。タタムと話し合つたからこそ、ISSキットの発生源が（加速研究會）である可能性に気づけたのだから。あとは明日の放課後に状況を黒雪姫に伝えれば、あの人がいつものように正しい指針を示してくれるはずだ。

どゆつと両手を握り、自分の思考を無理矢理に結論へと導くし込むと、ハルニキはリビングに引き返し、キッチンでカップ類を洗ひ始めた。

翌、六月十九日水曜日。

母屋の寢室のドアを少しだけ開けて「行ってきます」を言い、ニューロリンカーに昼食代の五百円をチャージして買ったハルユキは、エレベーターで地上に降りると、マンションの東を走る環状七号線の歩道へと足を進めた。

先日、社会科の授業で、ハルユキたちが暮らす杉並の街並みを記録した大昔の映像を観る機会があった、なにぶん今世紀の初頭——二〇一〇年頃のビデオカメラで撮ったものなので、フルダイブできる3D映像ではなく平面画だ、しかし、余りにも雄壮とした街の姿は、生徒たちに大きなインパクトを与えた。

現在の秋葉原の、半ば演出されたエレクトロカルな混沌ともまた違う。積み重ねた歴史と、住民の営みが溶け合った、剥き出しの生活感。都心で最大級の幹線道路であるはずの環七沿いにすら、小規模な個人商店や、一般の民家まで散見されたのだ。

無論いまでも、少し裏道に入れば小さな戸建てやアパートなど幾らでもある。しかし少なくとも、環七や青梅街道といった幹線は四十年前の倍近くにまで拡張され、道沿いには大規模な商業施設や集合住宅、あるいは小綺麗な緑地ばかりが連なっている。高円寺の駅やその周辺

も、昔の津多な賑やかさは消え去り、いまはベデストリアンデッキで周辺の施設と繋がる組合聖夜屋施設へと変換してしまった。

そして、もうひとつ、目立たないが重大な意味を持つ変化に、ハルユキは気づいた。

日頃、自宅の室内以外のあらゆる場所て必ず目にするもの。あまりにも数が多いがゆえに意識にも留まらない、直径五センチほどの黒い半球、あるいは全球。すなわち「ノイシヤルカメラ」が、昔の記録映像には一つたりとも存在しなかったのだ。

あの全自動化監視カメラ網の整備が始まったのは、二〇三〇年代半ばのこととこれも授業で習った。それ以降、公共空間での犯罪発生率は激減したらしい。カメラの恐るべき性能を考えれば、それも当然だ。何せあのシステムは、視界内にイリーガルな事象を捉えたとそれを自動的に識別し、当局に通報すると同時にどこまでも追跡し続けるのだから。もちろんあらゆる犯罪が例外なく逮捕起訴まで行くわけではないが、たとえばカメラ視界内でタバコの吸い殻やジュースの空き容器をポイ捨てすれば、翌日には行政からの警告メールが届き、月末には罰金が銀行口座から自動引き落とされる。

そのような、とてつもなく高度かつ複雑な映像処理をいったいどこで、どんなシステムを用いて実行しているのかは最高級の国家機密とされ、国民には一切知らされていない。唯一公開されているのは、「ノイシヤルセキユリタイ・サーベイランスセンター」、略して「SSSSC」という名称だけだ。あの黒雪姫でさえ、センターの所在地は想像しかできないと言っていた。

もちろんハルユキにはそれすらも不可能だ。

中央線の高架手前で環七から右に曲がり、電車の走行音がひっきりなしに降り注ぐ通学路を渡る。

歩きながら、その気になって周囲を見れば、電柱や街灯、信号機に交通標識。ありとあらゆる場所からゾーシヤルカメラに下瞰されていることが解る。正直、気味が悪いと思わなくもないが、ハルユキにとってあのシステムは、いまや治安維持以上の意味を持っている。

言うまでもなく、『レイン・バースト』だ。

BBプロダラムは、最高レベルの防壁に守られているはずのゾーシヤルカメラ・ネットに軽々と侵入し、その超高解像な映像から、現実世界に匹敵するリアリティを備えた3Dワールドを創り出す。バーストランカーにとって、デュエルアバターがもう一人の自分、加速世界がもう一つの現実たり得るのは、まず何よりも対戦フィールドの圧倒的情報量があったことだ。

しかし、ゲーマーにとっての理想郷とも言えるそのシステムにも、ひとつだけ負の側面が存在する。

ハルユキは、一年生の頃、同じクラスの生徒二人にひどく虐められていた。ほとんど毎日のように昼食代の九百円から二人分のパンやジュースをたかれ、それを屋上の片隅にある彼らの描き場に届けるよう強要されていたのだ。断ればもちろん、指定されたパンが売り切れて

買えなかった時も、客教なく殴られ、罵られ、屋上のコンタリートに顔を擦りつけて土下座させられた。

あの三人が、半年にもわたってそんな校則違反どころか明確な犯罪行為を続けられたのは、ハルユキが弱気にも担任教師や学校当局に何も言わなかったせいもあるが、彼らの指り場だった第二校舎屋上西端の換気装置の騒が、校内で数少ない（ソーシヤルカメラ視界外）だったことも大きい。どうやらあの手のアウトロー生徒の間ではカメラの視界外マップなどというものが流通していて、いわば《安全地帯》を細心に選んで愚め行為を繰り返していたわけだ。そのセオリーは、不良生徒だけでなく、大人の犯罪者たちも共有するものだ。

しかしもちろん、カメラの配置も永遠に同じというわけではない。学校のような準パブリックスペースは更新速度も緩やかだが、こと繁華街の路地裏などでは物凄い頻度でカメラが追加や位置変更され、本職の犯罪者でもその視界を常時把握するのは不可能に近い。

だがここに、たった一秒で任意の場所の《カメラ視界外》を完璧に識別できる者たちが存在する。

バーストリンカーだ。ひと言《バースト・リンク》と唱え、青く速き通った《基本加速フィールド》にフルダイブするだけだ。

あの世界では、ソーシヤルカメラ視界内に存在するモノについては現実そのままの姿で再現されるが、視界外のモノはシステムが《推測補充》する。基本的には、ディテールの少ない

のつべりとしたオブジェクトとして出現するので、そこが視界外であることはひと目で見分けられる。

その、たとえば広域暴力組織の大親分であろうと手に出さない《特權》は、ごく一部のバーストリンカーをある種の犯罪へと走らせてしまった。

彼らこそが《物理攻撃者》、略してPKと呼ばれる者たちだ。リアルを割られたバーストリンカーを複数人で付け狙い、カメラ視界外で襲撃する。初期はそのまゝ物陰で、近年では車の中などに隠れ、暴力で脅して無理矢理に直結対戦に持ち込む。ノーマルなグローバル・ネット対戦とは異なり、直結対戦には《一日一回制限》がないので、やられたほうはひたすら敗北を重ね続けるしかない。現実時間ではほんの数秒で膨大なポイントを奪われ、あつという間に全損、ブレイン・バースト強制アンインストールへと至ってしまう。残骸までは無制限中立フィールドでの《無制限E.K.》すら上回る、それはバーストリンカーとしての《死》だ。

ゆえにハルユキは、黒吉雄から、路上のカメラ視界外には一応留意するように言われている。多少気味が悪くとも、周囲にあの黒い球体が見えるということは、そこは安全であるということなのだ。

それに、よもやこんな朝っぱらから、しかも周囲には学生や会社員が山ほど行き交っているのにリアルアタックなどされるわけがない。ふわーと大きな欠伸をしつつ、仮想デスクトップに今日の時間割を呼び出し、忘れていた課題や提出物がないか一応確認を――

しようとした、その時だった。歩道のすぐ左側、高架下の薄暗がりから伸びてきた何者かの腕が、ハルユキのシャツの後ろ襟首をガッシと掴まえた。

「ひぐっ……!?」

ままだまか（PK）!? こんな人通りのある、しかもゾーンシヤルカメラ視界内でサ々とリアルアタック!?

と内心で喚き立てながら、両手両脚をわたわた振り回そうとしたが、す前で閉き覚えのある声（ハ）がひそやかに響いた。

「Hi」

たった一言の、ほぼあらゆる挨拶の中で最短と思われるひと言。暴れるのを中止し、おそれる後ろを振り向くと、そこにあつたのは大人しめな——それでいてどこかヘタダモノではない感——を漂わせる、少し年上の女性の顔だった。

「……ば、バドさん？」

呆然と咬いたが、相手は何も答えない。それが自明の問であり、答える意味がないからだ。相変わらず、この会話に関しては最低限の時間だけ済ませる主義を貫いているらしい。

とりあえず、この人物がなぜここにいるのかを問うのは省略して、ハルユキは襟首を掴まれたまま挨拶を返した。

「お……おはようございます」

すると軽い鎖きとともに手が離れ、浮き気味だった顔が地面につく。ふう、と息を吐きながら振り向き、改めて相手の全身を視界に捉える。

顔の中央で分けた黒い髪を、後ろで一本の三つ編みにまとめた地味な髪型は相変わらずだ。だが、服装は最初に練馬区松台のゲーキ屋で会った時のメイドルックでも、その後に来京スカイツリーで会った時のラフなTシャツとジーンズ姿でもない。濃紺の生地に純白の襟と三角スカーフを重ねた上と、細かいプリーツの人った同色のスカート——すなわちセーラー服だ。別に珍しい嗜好ではない。あたりを見回せば、駅に向かう生徒たちの中に似たような制服は幾らでも見つけられる。

しかし、その清楚なスカートに包まれた腹が、大型の肉食獣のように低く鋭猛なフォルムを持つ大型エレクトリック・バイクのシートに寄りかかっているとなれば話は別だ。余りにも違和感のありすぎる取り合わせに、歩道からはどよんとしたような視線が次々に浴びせられる。

バイクが駐まっているのは、ハルユキの通学路から高架をくぐって南側に抜ける細い路地の入り口だった。集中する視線を避けるため、ハルユキは路地の暗がりにも一歩踏み込むと、言うべき言葉を控えた。

唐突に出現したこのセーラー服ライダーの本名を、ハルユキは知らない。先ほど口走ってしまった「バドさん」という呼称も、本来ならばこのような衆人環視の場で使うべきではないものだ。なぜならそれは、彼女のアバターネームの略だからだ。



《ブラッド・レバード》、中野北部から練馬エリアを支配する赤のレギオン（プロミネンス）のサブリーダーにして、《血まみれ仔猫》の二つ名を持つレベル6バーストリンカー。かつてハルユキの眼前で、《加速研究会》所属のラスト・ジグソーをたった一咬みで壓（おさ）つてのけた猛（も）者（もの）中の猛者である。

思えば、これまでも常に唐突な出現でハルユキを驚かせてきた彼女であるが、それにしても今回のこれはいきなりすぎる。まず何を訊いていいのかわからずに二秒半ほど口をばくばくさせていると、それでもうハルユキのターンは終わってしまったらしく、バドさんはパイタのシートから腰を浮かせ、ずいっと左手を突き出した。

その指先に握（にぎ）まれているのは、赤いシールドコードをぶら下げた小型のプラグ——直結用XSBケーブルだ。うわ、と思うがここでばんやり見ていたらそのままニューロリンカーに挿入されてしまうので、慌（あわ）てて受け取り、幸い二メートルほどはありそうなそのケーブルを自分でジャックタイン。視野にワイヤード・コネクション警告が浮かび、消えた直後、やや低めのハスキーボイスが脳内に響いた。

『事前にメールで連絡しなかったのは、まずあなただけに伝えたい情報があったから』

まさにハルユキが最初に訊くべきだった質問とその答えだ。再びパイタに体を寄りかからせ、腕組みをする相手を見上げ、ハルユキもどうにか脳内のギアをシフトアップしつつ思考音声を発した。

「……それは、ネガ・ネビエラスの他のメンバーに、バドさんと会うことを知られなくなかったということですか？」

「結果としてはイエス。でも、別にあなたの仲間を信用していないからじゃない。あなたが仲間にとのように情報を伝えるが、その選択を仕せたかった」

「……………」

レバードの言わんとする所を暗喩に理解できず、首を傾げる。二人のニューロリンカーを繋ぐケーブルが揺れ、シールドの編みワイヤー上を仄かな光が揺る。

高架下の狭い路地の中にいるとは言っても、北側の歩道からは丸見えだ。大型バイクに寄りかかるセーラー服の女子高生と、背が低く丸っこい男子中学生が朝っぱらから直結して見つめ合っている。何事ならんとハルユキだって思う。通過する老若男女は遠慮のない視線を浴びせていき、恐ろしいことにその中には梅郷中の制服も散見されたが、レバードが次に発した言葉は、あらゆる雑念を軽々と吹き飛ばすだけの衝撃を内包していた。

「シルバー・クロウ。あなたの即時、直正を（PK）集団に依頼しようという動きがある」

「えっ……………」

という囁きを、ハルユキは内声で漏らしてしまった。

一瞬よろめき、すぐに踏みとどまる。しかし、地面がゆっくりと揺れているような感覚は去らない。そんなハルユキを見て、バドさんは仄かに眉のあたりを動かすと、再び右手を伸ばした。ハルユキの肩を引き寄せ、自分のすぐ右横、バイクのシートの前側に座らせる。

がつしりしたスタンドで支えられている大型バイクは、ハルユキの全体重を受けてもびくともしなかった。かつて何度が乗せてもらったマシンの輪もしい感触に少しだけ落ち着きを取り戻し、ハルユキはようやく次の思考をケーブルに流した。

「中止……って、《災禍の種》の件があるから……ですよね？ でも、あれは、七王へ譲って、今通いっぱい種子をくれるって……」

「まよ、でも、過激なことを言っているのは、直接には王たちじゃない。その下の、中堅パイストリンカしたちの一語。彼らは、こう主張している。……あなたが、ここ数日加速世界に広がっている、《國の力》の感染源だと」

さしものバドさんも、そのひと言を口にする前には、ほんのわずかな躊躇いを見せた。

しかしそれを意識することなく、ハルユキは「度目の、いっそう大きな囁き声を喉に詰まらせた。

「……………っ！ そんな……ち、ちが……………」

反射的にすぐ左に立つレバードを見上げ、激しくかぶりを振る。

「違います、僕じゃない！ 僕はあんな……あんなものを作ったりしてない……………」

だが、そう言い募る間にも、駈表に遠く走る声があった。

昨日の朝、ちやうどこの近くの環^{サークル}にてクローズド対戦をしたアッシュ・ローターが、最後に告げたひと言。

——俺が聞いた噂^{うわさ}には、続きがあんだよ。ウィタンやオリーブたちが使っている《怪しい技》……そいつは、クロム・ディザスターの能力のコピーだ、ってな……。

確かに、ISSキットの使用者が放つようになる影色のオーラと、《真槨の鏡》を装着した時のシルバー・クロウがまとうていた闇の波動は現象的には酷似している。両方を見た者ならば、二つが同根であると判断する可能性はあるだろう。だからといって、たった一日でその《噂》が加速世界を駆け巡り、シルバー・クロウの即時露正論にまで成長してしまうというのはあまりにも早すぎる。

しかし同時に、ハルユキはそれが決して有り得ないことではないと理解もしていた。

なぜなら、バーストリンカーにとっては、現実のたった一・八秒が実に三十分に相当するのだから。新宿や渋谷、秋葉原で繰りあされる無数の対戦の中で、ギョラリたちの間にその噂が伝播していけば、一晩で強烈な意見を唱える者たちが出てくることは充分考えられる、られるが、気持ちの上では決して受け入れることなどできない。

周囲を見聞き、小胡みに首を振り続けるハルユキを見て、バドさんは仄かではあるが確かな微笑みを浮かべた。先ほど襟首を捕まえた右手が、今度は背中を軽く撫でる。

「K、解^ひつてる。私も赤の王も、そんな妄言^{まがことば}は信じていない。ただ、樂觀^{楽観}もできない。だからこうして情報を伝^{つた}えに来た」

「……………」

すぐには言葉が出なかった。しかしシャツの生地感^{かたみ}に触れる手の柔^ならかさ、温^ぬかさは、いつとくにせよ衝^つ撃^{げき}と恐怖^{こわ}を遠^{とほ}ざけてくれた。

赤のレギオン（フロミネンス）は、ハルユキたちの「ネガ・ネビュラス」とはあくまで一時停戦中なのであって、決して同盟を結んだわけではない。レギオンマスターのニコとの出会いこそ、彼女が現実世界でハルユキに接触してきて、五代目（合衆^{くわしゅう}の鎧^{よろい}）討伐への協力を強引に依頼してくるというものだったが、その貸しも（ダスタ・テイカー）事件の時に利息つきで返してもらい、現在ではまったくイーブンな関係であると言える。

だからフロミネンスとしては、もう他の五大レギオンの不軌を買ってまでネガ・ネビュラスとの停戦を維持する義理はないわけだ。いや、おそらくレギオン内部からは、週末の領土攻撃を再開すべしという意見がすでに出ているであろうことは想像^{さく}に難^{がた}くない。

なのにニコやバドさんは変わらず不戦を続け、それどころかこうしてハルユキにわざわざ現実世界で直接危険を知らせに来てくれたのだ。たぶん——きっと、一人の（友達）として。

「……………」ありがとう、ごさいます」

ハルユキはそのひと言を、思念だけでなく肉声にも乗せて口にした。じわりと滲^{にじ}みかけた涙

を手の中でこしこしと擦り、思考を立て直す。バドさんの気持ちに答える方法は、無為に怯えたり悲しみをかくことではなく、冷静に事態を把握し最善の対処をすることだ。大きく深呼吸してから、思考音声に切り替えて答える。

「——でも、〈PK〉って言っても、そう簡単じゃないですよ？　まず、僕のリアルを割る必要があるわけですから」

「イエス。PK集団も無尽蔵にポイントがあるわけじゃないから、以前レインが現実世界のあなたに接触した時のような無茶な手は使えない」

「……です、よね」

かつてニコは、自分が現実では小学生であることを利用して杉並区の中学校に片端から体験入学の申し込みをし、ローカルネットの臨時アカウントを得てマッティングリストを確認、シルバー・クロウが在籍する学校を突き止めた。次に校門が見積せる位置に陣取り、下校する生徒が出てくるたびに〈加速〉してはリストをチェックすることを繰り返し、ついにハルユキのリアルを割り出したのだ。その過程で消費したポイントは百や二百ではあるまい。最早レベルアップに汲々とする必要のない〈王〉以外には不可能な手段だ。

ならば、強硬論を唱える者たちはいったいどのようにしてハルユキに〈PK〉を仕掛ける気なのか。

眉を寄せるハルユキに、隣のバドさんも考える表情を見せつつ呟いた。

「現在、あなたのリアルを知っているバーストリンカーは、ネガビュの現メンバー以外には私とニコだけ、間違いはない？」

「ええ……、そのはずです」

一瞬迷つてから頷く。正確には、〈かつて知っていた〉者ならもう一人いるのだ。今年の新生入生として煉獄中に出現し、黒雪姫不在の間にハルユキたちを圧倒した暗黒者、〈ダスタ・ティカー〉。だが彼は、無制限中立フィールドでの決闘でハルユキとタタムに敗れ、ポイント全損、ブレイン・バースト強制アンインストールという結末へ至った。加速世界に関連する記憶は全消去され、今やハルユキのことは、〈昔一緒に何かのネットゲームで遊んでいた人〉程度にしか認識していない。

無論、彼が所属組織である〈加速研究会〉にハルユキたちのリアル情報を渡していたという可能性はゼロではない。しかしそれをすれば、同じ学校に通う自分のリアルも危険に晒される。〈仲間〉や〈絆〉といった価値観を全否定していた彼が、そこまで組織のメンバーを信用していたとは思えない。

ハルユキの答えを聞き、レバードも軽く首を動かした。

「私とニコに関しては信用して貰うしかないけど、そういうことなら強硬派も簡単にはあなたのリアルは割れない。日曜の七王会議までに〈顔〉の浄化を完了し、それを王たちが確認すれば、あなたを矯正しようという意見も根拠を失う。——ただ、一つだけ……」

珍しく言葉を送切れさせたバドさんは、上平身ごとハルユキに向き直ると、深い危機の宿る声で続けた。

「一つだけ、気がかりな勢力がある」

「勢力……？」

「物理攻撃者集団というのは、幾つかのグループの存在が推測されているだけで、そのメンバーが誰なのかは容易には解らない。逆に言うとも、解った時はそれこそ全バーストリンカーの総力で阻止され、あつという間にポイント全損となる」

その説明に、ハルユキはこくこくと頷いた。調査こそスカイ・レイカーも、名前を特定できたPKを、神獣級エネミーのテリトリ―奥深くに放り込んだことがあるとにこやかに言っていた。あの優しい（はずの）レイカーがそこまで容赦ない手段を採るのだから、PKというのは斯様に忌むべき存在なのだ。

だとすれば、そんな奴らにハルユキの真正を依頼する、などということがそもそも可能なのだろうか？ 第一、どうやって連絡を取るというのだろうか？

ハルユキの疑問に、レバードは低く押し發された思案で答えた。

「……（処刑人）を気取っている連中がいる。唯一、グループ名を明らかにしているPK集団……最凶最悪の物理攻撃者ども。名前は（スーパードヴァ・レムナント）……略して（レムナント）」と呼ばれてる」

「スーパーノヴァ・レムナント……」

驚き返しては、そのまま和訳すれば、《超新星残骸》というような意味か。

レバードは、いつもは涼やかな唇のあたりにかすかな険しさを濃くあつた説明を加えた。

「奴らは、バーストポイントではなく日本円でPKを請け負う。《リアル割り》のノウハウをたっぷり持っていて、無利依頼されたバーストリンカーを、これまで例外なくPKで退場させてきた。奴らにとってブレイン・バーストはゲームじゃなく、お金を稼ぐ手段でしかない」

「な……………」

再び、今度は無意識のうちに、ハルユキは肉声で囁いた。

ぶるりと背中を震わせてから、抗うように思考を絞り出す。

「なんで……………そんな奴らが放置されてるんですか。《肅正》するっていうなら、僕なんかよりまずそいつらをするべきじゃ……………」

「もちろん、そういう声は過去に何度も上がった。でも、どうしてもメンバーが一人として離れない。依頼方法も、匿名メールアドレスに、マネーコードと一緒に対象の名前と情報を送るという形式。もしかしたら奴らは、一般対戦はまったくしないで、PKだけでレベルを上げてるのかもしれない。だとすれば、誰も名前を知らない、まったく未知のバーストリンカーたちということもあり得る」

「そ、そんな……………それじゃまるで幽霊……………いや、死神じゃないですか……………」

ハルユキは、電動バイクのシートに浅く腰掛けたまま、虚ろな思念を漏らした。レバードは短い沈黙でハルユキの言葉を肯定してから、もう一度そつと背中につき触れさせた。

「――まだ、全ては推測、過剰に恐れる必要はない。リアル割れの最大の危険は（彼）あるいは（子）からの情報漏出だけで、あなたに予はいないし――」

そこでバドさんは、いないわよね？ というふうに一瞬首を傾げたのでハルユキは慌ててこくこく頷いた。

「――親は同じレギオンの、しかも万戦錬熟の（王）。迂闊に口を滑らせたり、あなたを売ったりはしない。だから、いかに処刑人を気取っている奴らでも、短期間であなたのリアルを割ることは不可能」

ケーブルを流れる思念はそこでいちと途切れた。しかしハルユキは、バドさんが語尾をはんの少しだけ省略したことを悟っていた。

リアルを割ることは不可能だと思う。本来ならばそう言いたかったのだろう。なぜなら、絶対に不可能だと確信しているのなら、こうしてわざわざハルユキに警告に来る必要はなかったのだから。しかしバドさんは、ハルユキを力づけんがために、敢えて断言したのだ。

結局、林その意を汲み、ハルユキはすぐ左に腰掛ける年上の女性を見上げると、しっかりした思考で応じた。

「――解りました。でも、念のために、登下校の時は注意します」

「K、特に帰りが遅くなる時は、誰かと一緒に帰宅したほうがいい。ソーシヤルカメラ視界外にも通づかないで」

レバードはそう指示すると、話は終わったとばかりにハルユキと自分のニューロリンカーからXSSケーブルを引き抜いた。手早く丸め、スカートのポケットに突っ込む。

直結が解除されてしまったので、ハルユキは肉声でお礼を言うべく口を開いた。

「あ、あの、本当に……ありがとうござ」

しかし、台詞は思わぬ理由によって中断を余儀なくされた。

バドさんが、バイク後方のラゲージスペースから取り出した予備のジェットヘルメットを、ハルユキの頭にかげんと乗せたのだ。あこ下で手早くハーネスを留め、自分はハンドルに引っかけたフルフェイスのメットを被る。

……へ？

と眼を見開くヒマすらも与えず、ハルユキの後方から覆い被さるような形でバイクの両ハンドルを握った女子高生ライダーは、「始動」とボイスコマンドを吐いた。ニューロリンカーと接続したバイクのメーターパネルが鮮やかに点灯、同時に前後のアクティブサスが、乗物に飛びかからんとする豹の如くしなやかに車体を持ち上げる。

「あ、あ、あの」

うそ、いや、ダメ。まだ心の準備が、などと考えるハルユキの耳に、ヘルメットの内蔵スピ

「カーから低い囁き。」

「だいぶ時間取らせだから、校門まで送る」

「いいいいいいそんな、わわわ悪いです」

「NP」

軽くスロタトルが廻られ、バイクはとあつと前進すると高架沿いの道に出た。車体を倒して左折し、前輪が駅方面に向いた、次の瞬間、大出方のインホイールモーター二基が、きゆううん！ と猛々しく吼え――。

「……………あ……………」

両手両脚でしつかり車体を抱え込みながら発した悲鳴は、左側の歩道上の生徒たちには、盛大なドップラー効果を伴って聞こえだに届かなかった。

男子中学生の平均的価値観からすれば（超ウルトラダグレートカッコイイ）としか言いようのないエレクトリック・バイクで、しかもモーター駆動の女子高校生とタンデムで校門前に乗り付けるといふ大技をぶちかましたハルユキは、バドさんがひらりと手を振って環七方面へと走り去るや、久々に必殺技（ダッシュで逃げる）を発動させて昇降口に駆け込んだ。

上履きに履き替えるのもどかしく第一校舎の中央階段を上り、二年C組の教室へと辿り着くと、ふううつと長く息を吐く。素知らぬ顔で自分の席につき、わざとらしく仮想アスタット

ブなぞいじつていと——。

ぼん、と背中が叩かれると同時に、聞き慣れた声が響いた。

「ハル、おはよ」

一瞬、同席を譲ばらせてから、どこちなく振り向き、挨拶を返す。

「お……おはよう、チユ。」

互いに生まれた時から知っている、と云っても過言ではない幼稚園の倉嶋千百合は、ハルユキの顔を見るや、即座に表情を（きょとん）から（じとん）へと変えた。

「……やべっ、の顔してる。」

し、してねーよ。これは、その、時間日の体育イヤだなあの顔」

「それは明日でしょ。今日の一時開目は数学です」

「あ、え、ええと、じゃあ数学イヤだなあの顔」

そこでようやく（じとん）が（やれやれ）に変わったので、ほっと一息。先に教室に入っていたチユリが、今の段階ではハルユキの登校方法を知っているわけがなく、いずれバレるにせよここはゴマカシておくに若くはない。最大限ナチュラルに視線を外し、教室後方を見やりつつ口を開く。

「ま……まえっ、あれ、今日はタタまだ来てないのか。あいつがこんなギリギリなんて珍しいなあ」

手鈴まではあと五分もないのに、もう一人の幼稚園の机が空いていることに気づいたハルユキは、格好の話題とばかりにそう言った。だが、その途端にチユリの眉が心配そうに曇ったので、今度はこちらがきょとんとさせられる。

自分もちらりと後ろを見たチユリは、ボリウムを落とした声で囁いた。

「あのね、ハル、今日、タツくん……風邪でお休みみたいなの」

「え……………」

反射的に假想ダストタップに指を走らせ、ローカルネットのメニューからクラス名簿を開く。出席番号31番、風井武の名前の横には、確かに欠欠のアイコンが表示されている。タリッタすると、『風邪による発熱』という簡略な説明がポップした。

「……珍しいな、あいつが風邪なんて……………」

眉を寄せ、ハルユキは呟いた。幼い頃から製造で鍛えられているタタムは、肉体的にはハルユキよりもずっと頑健だ。長い付き合いだが、彼が風邪でダウンしたという記憶はほんの数回しかないし、しかもその全てが冬場の流行期だったはずだ。

同じく胎に落ちない様子のチユリは、ひよいと顔を近づけると、いつそう低めた声を出した。「それにさ……昨日の夜は、風邪引いてる様子なんてぜんぜんなかったよね。あれから熱出ちゃったのかな？」

「あ……………」言われてみれば……、それに、もし風邪っばければ、オレたちに感染さないように

「深く気を遣ったんだろうしな……」

そういう配慮を決して怠らないのがタタムという人間だ。ハルユキの指摘に、チユリも深く頷く。ならばやはり、帰宅した夜十時以降に調子を崩したのだろう……

——いや。

びりつ、と引き裂れるような感覚が頭の後ろ側に走り、ハルユキは視線を泳がせた。

昨日、ハルユキの家でタタムが漏らした言葉のどれかと、今朝バドさんに伝えられた情報のどれか。

その二つが結合し、仄かな危機感を芽吹かせる。光の届かない、深い深いところで何かが進行している。こうしている間にも、取り返しのつかない状況へと刻一刻近づいている。そんな焦りにも似た予感……。

「……どうしたの、ハル？」

ハルユキの不安が伝染したかのように、チユリが眉を寄せて囁いた。はっと両眼の焦点を戻し、小刻みにかぶりを振る。

「い、いや……何でもない。そうだ、増りに、二人でお見舞い行こうぜ。復活終わったらメールくれよ」

早口にそう言うも、チユリはハルユキの内心を見透かそうとするかのように大きな瞳を向けてきたが、やがてこくりと頷いた。

「うん……そうだね。ハルも飼育委員の活動あるんでしょ？ 一応、そっちも仕事終わったら教えて」

「ああ、解った」

そこで予鈴が鳴り、チユリは軽く手を振って自分の席へと戻った。ハルユキも正面に向き直り、聞いたままだったクラス名簿を見詰めながら、今すぐタクムにもメールしたいという衝動としばし戦った。現在、ハルユキを含む全生徒はグローバルネットから強制遮断されており、自宅で臥せているはずのタクムと連絡する方法はない。

——大丈夫、全機体のせいだ。今現在、ブレイン・バーストがらみの問題に晒されているのは僕なんだから。《空堀の館》も《ISSキット》も《レムナント》も、タクの欠席とは無関係だ。あいつの好きな抹茶アイスでも買ってお見舞いに行けば、ベッドの中で眠れくさそうに笑ってくれるに決まってる。

自分にそう言い聞かせ、ハルユキは右手でウィンドウをワイプした。直後、担任教師が勢いよく前のドアを開け、日直の号令が気だるげに響いた。

午前中の授業四コマがいつもどおりに消化されていく間に、奇妙な胸騒ぎもどうにか遠ざかったようだった。

なぜか少しだけ軽やかに感じられる昼休み開始のチャイムを聞きながら、ハルユキは席を立った。パンとバックジューズで安く済ませるか、それとも学食でカツカレーを豪邁してしまおうか、顧問にしめを許せて検討する。

残念ながら、六月末に迫った文化祭が終了するまでは、ラウンジでの黒雪姫と一緒の昼食もお預けだ。現生徒会最後の大仕事ゆえに、ブレイン・バーストのために役員になったと言いつつも黒雪姫も、職務を疎かにしてはできない。

――先輩が忙しくしてる時に、一人で豪邁も気が引けるなあ、今日はガマンしてカツサンドと牛乳……いや、そこにラスタを付けるくらいなら許されるだろうか……。

などと真剣に悩みつつ、後ろのドアへと近づいた、その時だった。

がらっ！ とかなりの勢いでドアがスライドし、廊下側から一歩大またに踏み込んできた人影があった。

影のいい、長い胸を包む黒いストッキング、スカートは他の生徒と同じグレーだが、その上

の半袖シャツはこれまた買った黒。三年生であることを示す鰐肝のりボンの両側には、いつそう黒く艶やかな髪が流れる。

梅郷中の校則では、制服のシャツについては、「学校指定の形状に適合する無彩色のもの」と規定されている。そして「無彩色」という文言を辞書ツールに入力すると、「白から灰色を経て黒へと至る色」との解説が出力される。つまり、グレーや黒も厳密には校則違反とは言えないのだが、メーカーが指定されていてその販売サイトには白のシャツしか登録されていないため、結局生徒はそれを買うしかない。——唯一、そのメーカーに黒の生地でもシャツを特注した場合を除いて。

そんな手間をかけた上、教師たちからの当然の是正要求を、校則をタテに涼しい顔で受け流せる生徒など、梅郷中、二十数年の歴史でもたった一人しかいるまい。

その一人こそが、いまハルユキの二メートル四方に立ち、両腕に手をちてて敢然と胸を反らして、美しくも峻厳なる表情を浮かべている女子生徒——黒宮姫だ。

二年C組の生徒たちがしんと静まりかえる中、人さく息を吸った副生徒会長は、涙と張った声を教室中に響かせた。

「当タラスより選出された飼育委員長に、生徒会室への即時出頭を要請する……」

一秒後、低いざわめきとともに、十数人ぶんの視線がハルユキへと集中した。章々たる立役者——その実ウツカリ勘違い——によってハルユキが飼育委員に選出されたのは、昔の記憶に

も新しいところだ。周囲の生徒たちが、きつそく何かやらかしたのかという表情を浮かべるが、ハルユキ自身はまるで思ひ当たらない。

それでもやむなく半歩前に出ると、おずおず口を開く。

「あの……は、はい……」

すると、黒雪姫はじろりとハルユキを一瞥し、

「キミか、では、来て貰おう」

——キミか、も何も先輩はもう僕が飼育委員長だつて知つてゐるはずだし、それ以前になんて言うか僕は先輩の「子」だつたりレギオンメンバーだつたり……。

脳内で混乱し切つた思考を遮らせる間にも、黒雪姫はスカートの裾を翻して振り向き、ゴム底の上履きでなんでそんな音が出るのか謎なカッカタという足取りで廊下に出ていく。一秒半ほど棒立ちになつてしまつてから、ハルユキは慌てて後を追つた。

階段を下り、一階の廊下を西に進む間も、黒雪姫はまったく振り向かなかつた。三年生の教室の前を通り過ぎ、第一校舎の一番奥にある生徒会室へと迫り着く。黒雪姫の手がきつと振られると、重々しい解錠音、ドアを開けた副生徒会長は、そのまま中へと消える。

ごくり、と喉を鳴らしてから、ハルユキもスライドレールをまたいだ。背後で勝手にドアが開まり、再びロツクされる。

一昨日ここに来た時は、オレンジ色の夕陽が部屋を暖かく染めていたのに、曇り空から降り

注ぐ灰色の光のもとでは空気がまで冷たく感じられた。照明の落とされた部屋の真ん中近くまで進んだ黒雪姫は、そこでようやく振り向き、厳しい双眸でじつとハルユキを見た。

「……………あ、あの……………」

か細い声でそう呟き、同時に気弱な笑いを浮かべかけたハルユキは、そのす前でぐつと口元を引き締んだ。

放課後ならいざ知らず、まだ昼休みなのに生徒会室をプライベートの用事で使うような公私混同を、黒雪姫がするわけがない。つまりこれは、副生徒会長としての、飼育委員長へのオフィシャルな出頭要請なのだ。やはり、知らないうちに委員会の仕事を何か失敗してしまったのだ。

ならば、せめて叱責を真剣に受け止めよう。そう決意し、ハルユキは黒雪姫の言葉を持った。数秒後――。

黒雪姫が、唇をきゅつと尖らせ、両頬をぶっくり膨らませた。同時に、拗ねたような声。

「聞いたぞ、ハルユキ君。今朝、校門に、ビジシてカッコイイお姉さんとパイタにタンデムで乗り付けたそうじゃないか」

「……………はう」

両眼と口とついでに鼻孔までも丸くしてハルユキが笑い返すと、黒雪姫がいつそう強烈なふくれっ面を作る。

「おい、今更ゴマカす気か？ 言っておくが、私なら、当該時刻の記録映像を照会することも可能なんだぞ。それとも、そんなものの観たくもないという私の気持ちもキミは……」

「あ、いやその、ええと、ちよちよちよつと待ってくださいー」

ハルユキは顔と両手を交互に水中運動させつつ懸命に口を差し挟んだ。続けて、おそろおそろ訊ねる。

「……あの、飼育委員長に、出頭を請うていうのは……？」

すると黒雪姫は、四の頬にごく仄かな赤色を上らせ、つんと顔を横向けつつ答えた、

「そんなの、キミをここに呼び出すテキトーな口実に決まってるだろ」

——うわー、超公私混同

ふらりとよめき、とうにか踏みとどまってから、再度口を開く

「え……ええーと、パイタの件はですね……先輩はリアルで会ったことないかもですけど、あれは素のレギオンの幹部の、(フラッド・レバード)さんで……」

「……………ほう？」

片方の眉をびくりと動かす黒雪姫の顔をちらちら確認しつつ、懸命の説明、

「今朝、登校途中に、僕に警告……っていうか、情報を伝えに来てくれて……それで時間になくなっちゃったから逃してもらっただけで、その、僕は遠慮したんでですけど、あのヒトすつこいせつかもで……」



ハルユキの言葉が続く間も、黒雪姫の表情は微妙な変化を見せてたが、やがて再度唇を尖らせる時、思いも客らぬひと言を発した。

「……………ズルい」

「……………は？」

「ハルユキ君、私とキミが最後に二人っきりで会ったのは、もう十日も前なんだぞ！ その間、生徒会活動やら何やらで私がずっとガマンしていたのに、キミはうーいういと動物の世話をしたり、畜産探検をしたり、その上他のレギオンの娘と……………」

「す……………すみません」

自分が何に対して謝っているのか今ひとつ定かてなかったが、それでもハルユキは反動的に頭を下げた。すると黒雪姫は、不満顔のままつかつかと歩み寄ってきて、すぐ目の前で立ち止まると囁いた。

「そう思っているなら、私に1パーストポイント及び1・8秒の現実時間をプレゼントしてくれ」

「えー、は……………はい」

きょとんとしつづつ頷いた、その直後、黒雪姫の両手がひゅんと閃き、いつの間にか握られていた黒いXSBケーブルのプラグが、双方のニューロリンカーの直結端子に電光石火の早技で挿入された。今日二回目のワイヤード・コネクション警告の向こうで、艶やかな唇が割んだコ

マインドを、ハルユキも無意識のうちにトレースした。

「バースト・リンク」。

バシイイイッー という、もはや耳慣れたサウンドとともに世界が青く凍る。

ハルユキは、現実の自分と比べても相当にサイズの小さい桃色ブタアバターの姿で、すといんと一歩前に出た。

視線を上向けると、こちらは現実とはば同身長の、黒髪羽織をモチーフとした妖精姫のアバターがひっそりと立っている。質感は遠くど美しさは変わらないその顔には、尚もどこか不満そうな色が漂っていたが、ときどきしながら見上げているうちにそれは仄かな微笑みへと変わった。

はっ、と胸をなで下ろしたのも束の間――。音もなく近づいてきた黒雪姫は、屈みながら長手袋に包まれた両手を伸ばし、ハルユキのアバターの両脇をひよいと挟み込んだ。

わあ!? と思う暇もなく持ち上げられ、そのまま胸にきつく抱きかかえられてしまう。

「あ、あ、あのあの、せせせせ先輩」

うわずった声を出すと、耳元で笑いを言んだ囁き。

「――現実世界の生徒会室はもちろん、ローカルネットのVRスペースでもこんなことをすれば明確なる校則違反だが、この世界には下らん規則も及ぶまい。それとも、お互いデュエルア

「バスター同士のほうがよかったかな？」

一瞬想像し、即座にぶるぶるかぶりを振る。かつて黒の主ブラッタ・ロータスが、今とよく似た形でシルバー・クロウを抱き締めた時は、その二秒後にレベル8必殺技《アス・バイ・エンブレイシング》が炸裂してエライ目に達ったのだ。

ふふ、ともう一度笑ってから、黒雪姫は胸腕にいつそう力を込めた。

「――本当は、日曜の《七王会議》が終わってから、ずっとこうしたかったのだ。キミに、何も恐れる必要はないと伝えるために……」

それを聞いた遠端、ハルユキは軽く息を呑み、振れた声を押し出した。

「そんな……、ほ……僕は……」

――大丈夫です。そう続けようとしたが、なぜかアバターの全身がぶるぶると震えて、正常な音声の出力を妨げた。

同時に、ハルユキは怯っていた。自分が、シルバー・クロウを走る現状に、どれほど強いプレッシャーを感じ続けていたのかを。加速世界に居られなくなるかもしれないという恐怖を、無意識のうちに心の奥底へと押し固め続けていたことを。

向も濃しく身を震わせ、ハルユキを、黒雪姫は全身で包み込むように抱き締めながら、耳元で滑らかに囁いた。

「大丈夫、キミは独りではない。私がいる。レギオンの仲間たちもいる。赤のレギオンのレイ

ンも、レバードも、緑のレギオンのアッシュ・ローラーや、青のレギオンのフロスト・ホーンたち、その他にも沢山のバーストランカーが、キミの帰還を心待ちにしているはずだ。

「……はい、はい……」

懸命に頷きつつ、ハルユキはいつしか自分も短い肉體で黒雪姫の体を引き寄せていたことに気づいた。しかしもう気づすかしさは感じなかった。現実比、千倍の速度で駆動する一人の思考クロックが同期し、滑り合い、感情すらも共有される。体感だけが存在した。

奇跡の手触りに満ちた数秒間が過ぎ去り、やがて黒雪姫はそっとハルユキの体を離した。表情が、少しだけ改められる。黒雪のような両の瞳も、真剣さを増す。直後発せられた言葉は、ハルユキの子想だにしなかったものだった。

「——だからな、ハルユキ君。妙な噂などに怯える必要はないんだ。現在、加速世界で騒動を広げつつある（ISSキット）が、キミから生まれたものだなどということは有り得ない」

「……………自」

再び、仮想の空気を鋭く吸い込んでから、ハルユキは小声で訊ねた。

「……………もう、ご存じだったんですか、（キット）のこと」

「ああ、昨日、フリーコ的車で送ってもらった道すがら、誠が説明してくれた」

「そう……………でしたか。すみません、報告が遅れて……………」

「いや、むしろ、もっと早く状況に気づけなかった私が責められるべきだ。昨日、帰宅してか

ら慌てて情報を収集したが……手口やタイミングからして、奴らの関与を疑うべきだろうな。ヘルメス・コード破壊レースを破壊した、『加速研究会』の」

そう口にしながら、黒雪姫は青い氷に変化したソファセットまで移動すると、ハルユキを睨らせて自分もその隣に掛けた。

座面にもよこんと正座したハルユキは、こくこくと頷きつつ口を動かした。

「ええ……、僕とタタも、昨日その結論に達したんです。それで、タタは、自分でも調べてみるって言ってたんですが……実はあいつ、今日風邪で学校を休んでて……」

「なに？」

黒雪姫は眉を寄せると、考え込むようにしばし沈黙した。その表情を見上げながら、ハルユキは再び、いわれのない不安が胸に満ちてくるのを感じた。

——SSキットの件は、ばくなりに少し情報を集めてみるよ。

タタムは昨日、最後にそう言って自宅へ戻った。ばくなりに、その言葉はつまり、ネガ・ネビュラスで彼だけが持つコネクシオン——かつて所属した、古のレギオン（レオニーズ）とのパイプを指しているのではないか？

そう思い至った瞬間、今朝方のブラッド・レバードの言葉のひとつが耳の奥に甦る。

——リアル割れの最大の危険は、『観』あるいは『予』からの情報漏出。

「あつ……」

びくん、と体を跳ねさせながら声を上げたハルユキに、歴史教師が驚いたように視線を向けてくる。その顔を凝視しながら、階上がってくる警備をそのままに出す。

「……あの……先輩、タタの（親）、青のレギオンのかなり高位の幹部だったって人は確か、もう（断罪の一撃）で加速世界を退場してるんですよね？」

「あ、ああ……。それを私に報告したのは、確かキミ自身じゃないか。かつてタタム君が使用した（バクダドア・プログラム）を配布した特で、青の王プルー・ナイトに断罪された、と、ナイトの奴はそのへん深層だから、それくらい当然するだろうと私も納得した記憶があるが……」

「そう……でした。でも、確か当時は、バクダドア・プログラムを最初に作ったのが誰なのかまでは解らなかつたんです。なら、そいつはまだ加速世界に健在かもしれないですよね」

そこで言葉を切り、ハルユキは黒いひづめのついた両手をきつく握りしめて、続きを口にした。

「問題は……プログラムを作って、タタの親に譲渡した奴は、その過程でタタの親のリアルを割ってたかもしれないってことです。だとすれば……同じ学校で、同じ剣道部にいたタタのリアルにも手が届く可能性がある……」

「それは……そうかもしれないが、しかしもうあの事件から八ヶ月も経ってるんだぞ。タタム君のリアルを割るつもりなら、とつくに何らかの動きがあるはずじゃないか」

黒雪姫の、その反論は至極もつともだ。

だがハルユキは、ゆっくりと首を左右に振り、こればかりは黒雪姫も知らないであろう情報を露え声で告げた。

「……今朝、バドさんが僕に会いに来たのは、警告するためだったんです。《スーパーノヴァ・レムナント》っていう、最悪のPK集団が、僕を追って動いてるかもしれないって……」

「なんだと……！」

両眼を見開く黒雪姫の手にすがるように両腕を伸ばし、ハルユキは強ばる口を懸命に動かした。

「もし……、もしタタが、仮病で学校を休んで断絶に行ってたなら……、そこでレムナントの奴らに見つかって、カメラ視界外で襲われてたら……」

一度遠くつぶった両眼を見開き、ハルユキは続けた

「……先童、僕、早退してタタを探しに行きます！ 血結対戦でポイントを奪おうとしても、全振るせるにはかなり時間がかかるはずです。もし……方が一あいつがPKに襲われてても、今ならまだ間に合うかも……」

「いかん！」

立ち上がり、《バースト・アウト》コマンドを唱えかけたハルユキの両肩を、黒雪姫が強く押さえた。

「今キミまで校外に出るのは危険すぎる！」

「でも……でも、タタが！ あいつがブレイン・バーストを強制インストールされたら、僕は……僕は……！」

「落ち着け、ハルニキ君！ まずは状況を確認するんだ！ 本当に風邪を引いて休んでいるだけかもしれないじゃないか！」

「でも……それを確認しようにも、学校を出てグローバル接続しないと……！」

「大丈夫だ、この生徒会室の固定端末は、申請すればグローバルネットに接続できる。まずはその回線でタタム君に連絡を取ろう。繋がらなければ、その時は……私が新宿に彼を探しに行く。ナイトの奴に頭を下げれば、配下に動員をかけるくらいはしてくれるはずだ。」

黒雪姫のその言葉に、ハルニキはびくりとアバターの動きを停めた。

青のトブルー・ナイトは、かつて初代赤の王レッド・ライダーの盟友だったのだという。その赤の十の首を、黒の王ブラック・ロータスが不意打ちによって落とした時は凄まじい怒りを見せたと言われている。先日の七王会議では、青の下は穏やかな物腰を装っていたが、その奥底には黒雪姫への抑えがたい感情が秘められていたはずだ。

そんな相手に、自レギオンのメンバーを助けるよう依頼するとなれば、頭を下げるだけで済むとは思えない。必ず何らかの対価が要求されるだろう。黒雪姫は、それすらも覚悟の上だと言外に示しているのだ。

瞬時にそこまでを悟ったハルユキは、闇雲に走り出したいという衝動を必死に堪えた。ここで自分が冷静さを失ってはならない。黒雪姫の両手に肩を掴まえられたまま、力を抜いて倒く。

「わ……解りました。まずは、連絡を取ってみます」

「うむ。それでは、いったん加速停止しよう」

向かい合って立ち、同時に「バースト・アウト」と叫べる。生身の体へと戻ると同時に、黒雪姫は直結ケーブルを引き抜いて生徒会室裏にある執務デスクへと走った。極薄のパネルモニタに触れ、ばばっと指を走らせる。遅れて隣に立ったハルユキのニューロリンカーから垂れ下がったままのケーブルを捕らえ、コネクタをデスクに埋め込まれた端子に挿入。すると、ハルユキの視界にニューロリンカーがグロトバル接続された旨のシステムメッセージが流れた。

「いいぞ」

黒雪姫の声に頷き、強張った口を最大限の速さで動かす。

「コマンド、ボイスコール、ナンバーゼロスリー」

すぐさま視界に呼び出し中のアイコンが点滅。少なくともタタムのニューロリンカーはオンラインだ。加速中ならば留守電モードが応答するので、まだPRの襲撃は受けていないか——あるいは全てが終わってしまったかのどちらかだ。

両手に脂肪を滲ませ、アイコンを監視する。点滅が、五回、六回……七回目で、着信に安

わった。

「……た、タタ……」

放れ声でそう呼びかけながら、ハルユキは巨大な恐怖に押しつぶされそうになった。脳裏に、ブレイン・バースト喪失後の「ダスタ・ナイカー」こと龍美征一と会話し、時のシーンが否応なく甦る、あの時、彼は、それまで数々顔を付き合わせて会話し、たはすのハルユキを見て、真っ先に「この人は誰だっけ……」と訝しむ表情を浮かべた。ポイント全損に伴って関連記憶が消去され、ほぼ加速世界を介してのみ関係していたハルユキのことがすぐには思い出せなかったのだ。

もちろん、ハルユキとタタムは、バーストランカーになるずっと昔から互いを知っている功績だ。だから、もし加速世界に関連する記憶を失っても、相手のことを完全には忘れないはずだ。

そうと理解していても、ハルユキは怖れずにはいられなかった。タタムの応答があったのはわずか二秒後だったが、その時間は数十倍にも感じられた。

「……………ハルかい? どうしたの?」

「あ……………」

嵐友の声は、まったく音程と変わらない気さくききを作ってハルユキの脳内に響いた。安堵のあまりよろけそうになり、ダスタに片手をつきながら、どこもなく答える。

「そ、その、タタが休みなんて珍らしいからさ。具合、どうかなって……」

「……ごめんよ、心配かけて。大丈夫……大したことはないんだ」

そう応じる声は、よくよく気をつけて聴くと、やはり少しばかり元気がないようにも思えた。しかし病気ならむしろ当然だ。改めて風邪のはうも心配になり、訊ねる。

「熱、あるのか？　ちゃんとおとなしくしてないとだめだよ。今……家にいるのか？」

「はは、もちろんそうだよ。ハルビヤあるまいし、ちゃんと寝込んで寝てるさ。昔、君がインフルエンザで二十九度も熱出したっていうからチーちゃんとお見舞いにいったら、寝てるフリしてフルダイブでゲームしてたことを忘れてないよ」

「ね、忘れろよそんなの」

言い返してから、ハルビキは急のために、最後のひと言を口にした。

「……《封戦》も控えて、しっかし始してくれよな。明日また、レギオンの大事な作戦があるんだからさ」

すると、わずかな間を空けて――

「ああ……解ってるよ。明日までにはちゃんと納まる。――そっちはまだ昼休みだよね、ハルにグローバル回線使わせてくれたこと、ばくからもマスターにお礼を言っておいて」

タタムが《マスター》と呼んだのは、もちろんネガ・ネビュラスのレギオンマスターである黒十字姫のことだ。つまり彼が加速世界の配施を喪失などしていいことは、これで確（た）めた。は

つと息を吐きつつ答える。

「なんだ、お見通しか。解ったよ、伝えとく。……じやあ、また明日な。お人事に」

さすがに消耗を感ぜざるタタムに、これ以上長話を強いるのも気が引けて、ハルユキはそこで通話を切った。顔を上げ、傍らの黒芝居に向き直って、バツの悪い笑みを浮かべる。

「あ、あの……タタ、ほんとに風邪で寝てるだけみたいでした、すみません、全部僕の早とちりです……」

すると、黒芝居は温かい笑みとともに首を振った。

「誰らなくもいいさ。良かったよ、何もなくて。……だが……」

そこでやや表情を改め、ハルユキがニューロリンカーとデスタから抜いて出したケーブルを仕舞いながら続ける。

「……《レムナント》の奴らが動いているかもしれないというのは看過できない話だ。少なくともこの移送では、そう容易くキミや我々のリアルには沁り着けないと思うが、念のため今日からしばらく対戦待ち受けは断言しておくべきだろうな。こちらから挑戦する場合も、よく知らない相手は控えておいたほうがいい。アバターの出現位置からリアルを割られないとも限らんからな……」

「ええ……。チユとタタには、僕から伝えておきます」

「頼む。——それでは、我々は昼食にするか、たまにはラウンジで一緒に食べよう」

ぼん、と肩を叩かれ、ハルユキはつい顔を絞めてしまひながら頷いた。黒雲姫もにっこり笑いつつ、何気ない口調で付け加えた。

「——〈ブラッド・レバード〉にも情報の札を言わないとな。どうせなら、リアルで会ってみるのも悪くないかもな。キミ、そのうちセフティングしてくれ」

「はい。………は、はい？」

頷いてしまつてから、その場がどのような雰囲気（雰囲気）に包まれるかを想像し、ぎよっと上体を仰け反らせる。

「い、いや、そもそもそれは、どーなんてしようか」

うわずつた声を漏らしつつ、ドアへと向かう黒雲姫の後を追う。

そんなやりとりをする間も、ハルユキは、いまだ奇妙な胸騒ぎ（胸騒ぎ）が完全には去らないのを感じていた。

先刻のタタムの声の、ほんの少し音程とは違った響き（響き）がその理由かもしれない。黒邪（黒邪）なんだから元気がないのは当然だ。しかしあの声の重さは、肉体的な不調というよりも、ある種の精神的な揺らぎを導かせていたように思えた。そう——、どこか、去年の、時期のタタムを思い起こさせる不安定さ。

——気のせいだ。タタムは今や、その知性と冷静さでレギオンを支える揺るぎない柱なのだ。ハルユキは自分にそう言い聞かせると、再びわずかに滲みかけた掌の汗を制服のズボンで拭

い、黒雪姫に続いて生徒会室を出た。途端に押し寄せてきた昼休みの喧嘩と、廊下の彼方の学食から届く香辛料の匂いが、胸騒ぎを遠ざけていった。

しかし――。

己の危機が、質的にはある程度正しかったことを、ハルユキはわずか三時間後に知らされた。ただし、量的には誤っていた。状況は、ハルユキの、そして黒雪姫の予想をも遥かに超えたところまで、すでに到達してしまっていた。

その知らせを直接的にもたらしたのは、放課後、アフリカオオコノハズタの（ホウ）に餌を与えするために格闘中を訪れた、レゾオン最年少メンバーの四壁宮蔵だった。

午後の授業二コマと、ついでにお昼に黒雪姫と食べたカレーを順調に消化したハルユキは、廊下に向かう途中に「あとでメールする」と声を掛けて昇降口から外に出た。先週までなら一日散に校門から脱出してニューロリンカーをグローバル接続し、おやつ代わりのネット情報を買っていたものだが、飼育委員長の職を拝命してしまった今となってはそうもいかない。とは言え、不思議に面倒な気持ちはない。それどころか、委員の仕事をするのが楽しみにすら思えるのだ。

頭上は相変わらずの曇り空だが、幸い今日も雨の手帳はなかった。飼育小屋から掃き出して

乾燥中の落ち葉の山を、そろそろ袋詰めしてゴミに出せるはずだ。

第二校舎を回り込み、北の裏庭に出る。苔むした地面を踏みながら、北西の角にある大楠木の小屋を目指す。奥庭の大部分は目当たりが皆無だが、小屋の南は校舎が切れて低い木立になつており、金網を通して日差しが届く。

前方に見えてきた小屋の周囲に、他の生徒の姿はなかった。飼育委員会には、ハルユキの他に、くじ引きで決まった同学年の浜島という男子および井関という女子がいるのだが、現在ハルユキは彼らの参加を任意に設定している。仕事を強制するより、自発的に活動してくれるのを待つほうがよからうという判断なのだが、どうやらかなり長く待つことになりそうだ。

ハルユキが小屋に到着した時、ホウというやや安直な名前のコノハズクは、床に置かれた金網バットの中で水遊びをしていた。

翼をやや広げ、そのまま前のめりになって、浅く張られた水に胸から顔までを沈める。すぐ体を起こし、濡れた羽を揺るいでこしこしと小刻みに動かす。まるで人間が体を洗うようなその仕草に、ハルユキは思わず笑ってしまった。

「はは……、気持ちよさそうだなあ、お前」

声を掛けると、ホウはくりんと頭を回し、ハルユキを見てどこかバツの悪そうな表情を浮かべた。全身を激しく震わせて水を弾き飛ばし、水面から離陸する。小屋の中で数回大きく川を描いて飛び、定位置らしい左の止まり木の枝にランディング。胸のあたりの羽毛をつくろい始

める。

あの機には圧力センサーが仕掛けてあり、ホウの体重を測定できる。ハルユキは仮想デスタトップを操作すると、ローカルネット専用ブラウザから委員会活動のタブを開き、リンクしてあるセンサーの数値を表示させた。

と、その時、視界にアドホック・コネクションの要求窓がポップ。右を見ると、真っ白いワンプリースタイプの制服に身を包み、茶色いランドセルを背負った小柄な少女が微笑みながら立っていた。

「あ……こんにちは、メ……じゃない、四葉宮さん」

不思議なもので、こうして生身の時はうっかりデユエルアバター名で呼びかけそうになるし、加速世界にいるときは本名で呼びそうになる。「アーダー・メイデン」の略称である「メイさん」と言いかけて訂正したハルユキは、左下で頭をかきながら右手でリクエスト窓のイエスポタンに触れた。

自動的にチャットツールが起動し、議が相変わらずの超高速タイピングでホロキーパードを叩く。

「UIV こんにちは、有田さん、ホウさんの体重はどうでしたか？」

「あ、えっと……適正範囲内だけど、ちょっと下ぎみかな？」

「UIV 生活環境が変わった直後ですから、多少のストレスはやむを得ないのです。今日は

「ごはんを多めに持ってきました。給餌を遅くして見ますか?」

「う、うん、ぜひ!」

答えて、ブラウザを消去する前に、ハルユキはもう一度委員会のタブを確認した。システムから指示された任務は小泉の通堂清掃のみで、要求人数は一人。いちおう近藤さんと井岡さんの名前を確認するが、表示されたステータスは予想どおり二人とも「下校済」だ。

ため息を吞み込み、ハルユキは満が大型の電子ロックを解錠するのを見守った。小さな手の一振りであちんとボルトが外れ、満は水ウが止まり木の上にいるのを確認してから、ハルユキを手招き。金網の扉を最低限開き、二人急いで中に入る。

扉を開め、内側のスライドロックを掛けると、満はランドセルを下ろした。中から、まず薄茶色のレザー・ガントレット——ではなく革手袋を出す。肘直ぐまであるそれを左手に装着し、再び靴に手を入れる。

取り出されたのは、小型の保冷ケースだった。右手でばかっと開くと、中身はどうやら細切りにした生肉のようだった。

——おお、さすが猛禽類。

ハルユキが感心しながら見守る中、立ち上がった満は左手を止まり木に向けて掲げた。すると、まるでテレパシーか何かで意思疎通したかのように水ウが翼を開き、わさっと飛び立って満の手まで移動。赤金色の両眼をまん丸に開いて、早く早くと言わんがばかりにくちばしを突

き出す。

諺が、床に置いたケースに組み込もうとするので、ハルユキは急いでそれを持ち上げると両手で保持した。諺はにこりと微笑み、右手でケースから赤みの強い肉片を一つ摘み取る。

ホウの顔にそつと透づけると、飯いくちばしで素早くついばみ、ほとんど丸呑みのようにして食べてしまった。ハトやニワトリが地面の餌をつつく動作とはずいぶん違う。ハルユキが再び「おー」と思う間にも、諺は次々と肉片を差し出し、それをホウがひよいひよいと唇に収めていく。何の肉なのか、と思うものの、料理などしたことのないハルユキには見た目で判断はできない。

コノハズタの、二十センチちょっとの体格に比してかなり量が多いように思えた保冷ケースの中身は、あつという間に空になってしまった。諺が、これでおしまい、というように頭を撫でると、ホウは満足げに首をくるくる動かしてから、再び飛び上がって元の枝へと戻った。

手袋を外し、ハルユキからケースを受け取った諺は、いったん小窓の外に出ると備え付けの水通で洗いはじめた。その間に、ハルユキは止まり木の周囲に敷いた合成紙を取り替える。目のニューズがペーパーメディアで配信されていた時代は、こういう用途には新聞紙と称したそれを使い捨てて用いたらしいが、今や天然繊維の紙は高価な贅沢品だ。ホウの落とし物で汚れた敷き紙を、諺と入れ替わりに流水で洗い、傍らの小型ハンガーに吊す。

一仕事終えたところで、ハルユキは先刻から訊きたくてたまらなかつた質問を口にした。

「ねえ、園林宮さん、さっきホウにあげたの、何の肉なの？」
すると四つ年下の少女は、にこりと微笑んで両手を閃かせた。

「U—V あててみてください」

「え……、えーと……、鶏肉？」

論が空中の一点を指先で押すと、ハルユキの聴覚に「ぶぶー」という不正解ブザー音が響く。チャットツールに搭載されたサウンド機能だ。

「じゃ、じゃあ、豚肉」「ぶぶー」「ええー？ まさか牛肉？」「ぶぶー」「ひ、羊？」「ぶぶー」

「まさかのサカナ系？」「ぶぶー」

そこでハルユキは降参とばかりに両手を挙げた。すると論はどこか意味深な笑みを浮かべながら、思いがけない文字列をタイプした。

「U—V それでは、明日はさばく所からお見せするのです。多少の精神的ダメージが予想されるので、心の準備をしておいてください」

「は……さ、サバク？」

「U—V さあ、遅くならないうちに、落ち葉を片付けてしましましょう。もうすっかり乾いているようなのです」

そこでにつこり微笑まれてしまったので、それ以上追及もできず、こくりと頷く。

「う、うん、じゃあ僕、ゴミ袋取ってくる」

中庭の用具置き場目指して駆け出しながら、ちらりと小屋の中を見ると、すっかり満腹らしいコノハズタは、止まり木の上で耳羽を伏せ片足立ちになるいつものポーズで腹たげに眼を閉じていた。

こればかりは数十年見た目が変わっていない半透明のゴミ袋に、山積みになっていた古い落ち葉を詰め込む作業には二十分近くを要した。いっそ巨大な焚き火を作り、そこでサツマイモを焼いたり——というようなシーンを、古い映画や漫画で観た——すれば楽しくも美味しい処理ができたのかもしれないが、校内で火など燃せばたちまち警報が鳴り響き緊急車両が殺到し人けさでなく警察に逮捕されてしまう。それ以前に、未成年がライター等の着火装置を入手するのはとてつもなく困難だ。去年ハルエキを数々脅めた連中も、校内で喫煙するというエタール・レジエンド級の不良行為にはついで及ばなかったらしい。

ゆえに、二人は苦勞して作製した八つの落ち葉ぎゅう詰めゴミ袋を、前庭の隅にある集積所まで運ばねばならなかった。作業が終了した時、時刻は午後四時二十分になっていた。

「ふう……、やーっと片付いたあ……」

『UIV お疲れ様なのです』

顔を見合わせ、ほこつと笑いを浮かべてから、順番に手を洗う。これで今日の任務は全て完了だ。この後は、チエリと一緒にタタムのお見舞いに行く約束をしているが、彼女の部活動が終わるのは五時くらいなので少し時間がある。さてどうしよう、と思ったその時――

真っ白いハンカチで丁寧に手を拭き終えた諺が、軽く首を傾げ、宙をクリッとした。右手でウインドウを操作しながら、左手だけで器用にキーボードを打つ。

「UIV フリーウェアからメールなのです。(緊急)のタグがついているので、すみませんが今読ませて頂くのです」

諺が言う(フリーウェア)とは、スカイ・レイカーこと倉崎楓子のことだ。渋谷区の高校に通っている彼女からのメールをなぜ校内で着信できるのか、と疑問に思ってからすぐに悟る。ハルユキのニューロリンクカーは、植村中ローカルネットに接続すると自動的にグローバルネットから遮断されてしまうが、諺は植村中ネットではゲストユーザー扱いなのでその制限を受けないのだらう。しかも彼女は、通常のネットワーキング用途には駅内のフレイム・インプラント・チップを用いているため、グローバルネットに繋ぎっぱなしにしてもフレイム・インプラントのマッチングリストには登録されないのだ。

「は、はい、どうぞ」

ハルユキが頷くと、諺は素早くメールを開封し、眼を走らせた。

途端、虹彩に薄く赤色が混じる大きな音が限界まで見聞かれる。囁くように空気を吸い込んだ諺が、そのまま小刻みに震える。

「え……と、どうしたの片」

仰人し、ハルユキは諺に一步近づいた。

両眼の焦点を、仮想アスタクトップからハルユキに移した少女は、わずかにぎこちない指使いでキーボードを叩いた。

『U・V 有田さんは、《スーパーノヴァ・レムナント》という、最悪と評されるPK集団のことをご存じですか？』

「……………」

——知っている。正確には、知ったのはつい今朝方のことだが、以来たった八時間の間にその名前はハルユキの意識に圧倒的恐怖とともに刻みつけられてしまった。

「……………」うん。そいつらが……………」

とてつもなく悪い予感が背筋を這い上るのを感じながら、ハルユキは極低声で訊ねた。

『U・V 今日の前中に、その《レムナント》のメンバーと推測される高レベルのバーストリンカー四人が、新宿区の無制限中立フィールドに於いて一人のバーストリンカーを襲撃し……………」

ウインドウを流れる桜色のフォントを、ハルユキは顔を歪めて凝視した。

嘘だろ、まさか、という思考だけが脳内を満ちる。——タタじやない。だってタタは、身体みに、ちゃんとコールに出たじやないか。僕のこと、黒雪姫先輩のこと、ちゃんと憶えてたじやないか。

しかし、次の瞬間、視界に表示された幾つかの文字は、ハルユキにいつそう巨大な衝撃と

混乱を与えた。

「U—V ……逆に、全滅したそうです」

「え……ぜ……んめつ……？」

喋喋にテキストの意味を理解できず、ハルユキは呆然と問い返した。

「全滅……って、最悪のPKっていう、《レムナント》が……一人にやられて……」

「U—V そのようなのです。その時間に、付近でエネミーの長期キャンプ狩りをしていたレダオンがあり……バトルエフェクトの余りの激しさゆえに、その戦闘に気づいて偵察に行ったようです。彼らが見守る中、最初は襲っている轉だと思われた四人は次々に轢かれ、死ぬと同時に《最終消滅》したらしいのです。これはつまり、その四人と一人が、《サドンデス・デュエル・カード》で全ポイントを賭けていたのだと思います」

「え、ええと……つまり、こういうこと？ レムナントの四人は、誰かをリアル・アタックして、替してサドンデス・デュエルに同席させて……でも、その誰かに反撃されて、全員が一気にポイント全損した……？」

「U—V そう推測すると、フーねえも書いています」

「い……いったい誰が、そんなとんでもない逆転を……。《主》の誰か……？ 《王》が、自分を困にして、レムナントをおびき出して始末した……？」

ハルユキにどうにか推測できるのはそこまでだった。しかし論は、凍り付いたような表情で



ゆっくり首を頷に振ると、いっそうどこもない指使いで宙を叩いた。

『U—V—』いいえ、エネミー狩りレギオンが日撃した、その《一人》は、水色の装甲を持つ重量級で、右手に貫通属性の強化外装を装備していたそうです。彼は、戦っていた集団の最後の一人を、右手の銃に中刺しにしたまま同撃者たちの前まで運び、そのバーストリンカーが《スーパーノヴァ・レムナント》のメンバーであると告げてから止めを刺し、ポータルへと去った。フリーネは、彼が――

一瞬の躊躇いに続き、ハルユキの眼前に、最後の一文がゆっくりと流れた。

『U—V—（シアン・バイル）なのは、と』

ハルユキは走った。

校門を出て、すぐ北の青梅街道を東に曲がる。下校時はそのまま環七通りまで行ってしまうことが多いが、今はかりは時間優先で、住宅地を斜めに貫く登校路を逆に進る。

梅郷中から自宅マンションまでは最短ルートでも約一・五キロメートルあるので、ノンストップで走り通すのは、ハルユキには相当の苦行だ。しかし、体育の授業で長距離走をやらされてる時の捌間のような辛さを、今だけはほとんど感じなかった。底なしの焦燥感に衝き動かされるまま、空気を次々肺に送り込み、地面を蹴り付ける。

四葉宮に、倉崎楓子からの緊急メールの内容を知らされたその数秒後には、ハルユキは行動を開始していた。まず飼育委員会の日誌ファイルを手内ネットに提出し、部活中の倉崎千百合には「先にタタムのお見舞いに行く」とメールする。そして誰に、今の情報を生徒会室の黒雪姫に伝えてくれるよう頼み、自分は校門を飛び出したのだ。

「……………タタ……………なんて……………何が……………」

嵐い息の下で、切れ切れの言葉を漏らす。額から流れる汗が服に入り、握った拳でこしこしと拭う。

「概してから伝えられた情報それ自体は、タリテイカルなものではない。なぜならタタム——シアン・パイルは多対一の戦いに勝利し、無事にフィールドを離脱したというのだから。昼休みにハルユキからのコールにちやんと応答したことを見ても、それは明らかだ。」

しかし、その状況に至る前に《何か》があった。それは間違いない。悪邪で臥せっていたはずのタタムが、新術でPK集団と交戦したという状況そのものがすでに異常だ。そしてもう一つ、こんなことを考えたくはないが、無視もできない謎が存在する。

彼は、なぜ勝てたのか？

シアン・パイルは、現在シルバー・クロウと同じくレベル5だ。初心者ではないものの熟練者とも言えない。対して、レムナントのメンバーは、《高レベル》と表現されるからには全員が少なくとも5以上だろう。そんな連中を同時に四人も敵に回して、しかも何でもあるの無制限中立フィールドで完勝するのは、少なくともハルユキには絶対に不可能だ。

もちろんタタムの物理攻撃力は折り紙付きだし、冷静さや知略はハルユキの遠く及ぶところではない。それでも、自分より高レベルのバーストランカーを四人同時に居るといふのは異常なのだ。あの黒雪姫ですら、かつて同レベルの《王》五人と同時に戦い、ただの一人も倒せなかったと言っていたではないか。

《何か》。ハルユキの想像の及ばない、真実な《何か》がゲームの法則をねじ曲げた。そして、それはきつとまだ消えていない。昼休みのコールに応じたタタムの声には、わずかに虚ろな響

きがあった。あれはおそらく、発熱のせいではなかったのだ……。

「……………タタ……………」

中央線の高架治いの道から環七に出て左に折れると、行く手に見慣れた高層集合マンションが姿を現した。幅む両脚を懸命に動かしながら、ハルユキはもう一度振れ声で親友の名前を呼んだ。

——親友。その許までは、そこまではまだ、損なわれていないはずだ。

そう急ぐると同時に、ハルユキは否応なく理解してもいた、自分がここまで必死に走っていること自体が、今やその許すらも不安定に揺らぎつつあると、無意識のうちに感じている証なのだ。

ハルユキ、チユリ。そしてタタムの二人が暮らすマンションは、地下一階から地上三階までが大型のショッピングモールになっている複合施設だ。

食料品や日用雑貨、衣料品、電化製品を扱う各種テナントショップや、中規模ではあるがシネコンすら存在するモールはマンションの付随価値を高めているが、当然買物に訪れる客は住民だけではない。ゆえに、モールとマンションのエリア境界には、厳重なセキュリティゲートが設けられている。訪問客はもちろん、住民ですらニューロランカーかバイオメトリクスで認証せねば通過できない。

エレベータホール前のゲートで、視界に表示されたインジケータが青に変わるまでのたった数秒を、ハルユキはじりじりしながら持った。金属バーが跳ね上がった瞬間、ダクシュし、閉まろうとしていたエレベータのドアを休でブロッタして乗り込む。住民らしい婦人が肩を叩めるが、軽い会釈だけして体の向きを変える。

ハルユキの自宅は東のB棟二十三階、チユリの家は同じくB棟二十一階にあるが、タカムは西に分離して建つA棟の十九階に住んでいる。もちろんA棟のエレベータに乗ったハルユキは、普段とどこか違う気がする。モーター音を聞きながら、焦らすように加算されていく階数表示をじっと見詰めた。

幼い頃は、毎日小学校から帰ってランドセルを置くや否や家を飛び出し、チユリ、タカムと一緒にモールのアミューズメントエリアや近くの公園で夕方まで遊び回った。お腹を空かせて帰ってくると、三人はモール一階の奥で手を振り合い、ハルユキとチユリは右のB棟エレベータホールへ、そしてタカムは左のA棟エレベータホールへと別れた。

もしセキユリゲートの前で振り返れば、タカムの眼には、連れ立ってエレベータへと駆けていくハルユキとチユリの背中が見えたはずだ。

彼はその時、何を感じたのだろうか。

もしかしたら、数年間胸に積もり続けたその何かが、まだ小学五年生だった彼に、チユリへのほんの少し急な告白を決意させたのだろうか。

「……あれは、みぞれ霰じりの初雪がちらついた、寒い寒い日の夕方だった。

さすがにいつもの外遊びは取りやめになり、ハルユキは自宅で一人ゲームをしていた。チャイムが鳴り、フルダイブを自動切斷されて、ふくれっ面で開けたドアの向こうにいたのはチユリだった。

いつもと様子の違う幼馴染に首を傾げながら、ハルユキは彼女を自宅に上げた。ベッドに懸掛けたチユリは、しばらく黙り込んでいたが、やがてか細い声で告げた。

タタムに告白されたこと。そして、自分ではどうすればいいの解らないことを。

そんなの、まだ十一歳だったハルユキにも解るわけがなかった。驚きと混乱に等しく見舞われ、ただ呆然とチユリの横顔を見ているうちに、しかしそれでもたった一つだけ直感的に確信したことがあった。

もしチユリがタタムを拒否すれば、彼は去っていくだろう。金色の光に満ちた放課後のひとときは失われ、二度と戻らないだろう。

心細そうな表情のチユリに、ハルはどうしたらいいと思う、と訊かれた時、ハルユキは半ば反射的に答えていた。

——お前とタタムならお似合いだよ。それに、お前たちが付き合っても、オレは友達やめたりしないよ。

するとチユリは深く俯き、目尻を手の甲で拭いてから、顔を上げて「うん、わかった」と

激笑んだ。

しかし結局、ハルユキの言葉は嘘うそになってしまった。付き合いはじめたチユリとタタムから、ハルユキは少しずつ距離を取っていき、六年生の夏休みにはもう三人で遊びに行くことはほとんどなくなった。

中学に進む時、タタムはチユリに、自分と同じ新指しんさしの学校を受けることを勧めたらしい。しかし彼女は、以前から決めていたことだからと、自宅からはと近い梅郷中を選んだ。

チユリはおそらく、壊れかけた三人の環を、せめて円まの形だけでも保とうとしたのだ。しかしその意思表示が、タタムをいつそう遠い詰めてしまった。彼はチユリを繋ぎ止めるための力を、所属していた剣道部の部長に与えられた「ブレイン・バースト」によって得ようとした。学年トップクラスの成績と、剣道の都大会優勝という輝かしい実績を（加達）の力で手にしたもの、そのステータスを維持するためにバースト・ポイントを枯渇させ、禁断のツール・チーディング——すなわち（バフタドア・プログラム）の誘惑に負けた。

直結によってチユリのニューロリンカーにプログラムを仕掛けたタタムは、彼女を踏み台に梅郷中ローカルネットに侵入し、加速世界最高の資金首たる「フラック・ロータス」の名を見つけ、狩らんと試み、そして……………

緩やかな減速とともにエレベータが停止し、ハルユキは床に向けていた視線を上げた。十九階を示すホロタダの向こうでドアが開く。マンションまであればと懸命に走り通した足

が、今はなぜか重い。昔頃の女性のわざとらしい咳払いに急かされ、ドアが閉まる寸前で共用廊下に踏み出す。

タタムの家が一九〇九年家だということは知っているが、訪れたことは数えるほどしかない。彼の両親は一人息子の教育に非常に熱心で、友誼が遊びにくることにいい顔をしなかったからだ。

今年の頃に、タタムがそれまで通っていた新宿の有名進学校から梅郷中に転校すると決めた時は、それはもう大変な騒ぎになったらしい。今や息子をたぶらかした張本人である（と認識されているはずの）ハルユキとしては昔以上に驚愕が高いが、幸いと言っていいのかタタムの両親は其儘きて、もうしばらくは帰宅しないはずだ。

ほんの数歩進んだだけで、記憶よりずいぶん早く「熊」の表札が眼に飛び込んできた。目線とは色の違うドアの前に立ったまま、ハルユキは中断された回廊に暮を引いた。

——色々なことがあったし、沢山間違えもした。でも、僕とタタはあの《煉獄ステージ》での戦いで、初めてお互いの本音を拳に乗せてぶつけ合えたんだ。多分あの時、僕らはようやく本当の友達になれたんだ。たとえ何があろうと、その事実だけは変わらない。

大きく息を吸い、ハルユキは右手を持ち上げると、視界に表示された呼び出しチャイムのボタンに触れた。

少しだけ長い待ち時間のうち、応じた声はやはり親ではなくタタム本人のものであった。

「……どうぞ。……悪いけど、ぼくの部屋までそのまま来てくれ」

ドアに輕め込まれたカメラでハルユキの顔を確認したのだろうか、それにしてもまるで訪問を予期していたかのような言葉に続けて、ロツタが解錠される。ブラッシュブル式のドアハンドルを引くと、「おじやまします」と小声で吐き、ハルユキは玄関の中へと入った。

スニーカーを脱ぎ、きちんと揃えて、廊下にかかる。遠い記憶に従って進む、右側二つ目のドアをノック。今度は肉声の「どうぞ」を聞いてから、ノブを回す。

部屋の中は、灯りが落とされ、西向き窓の影から入り込む暮色だけに弱々しく照らされていた。ジーンズに七分袖のカットソー姿のタタムは、腰掛けていたベッドから、半ばシルエットに沈んだ顔をハルユキに向けると小さく微笑んだ。

「やあ、ハル。——立ってないで、座れよ」

「あ……ああ」

頷き、どこちなく部屋に踏み込む。家具類は、小学生の頃からそのまま使っているものも、入れ替わったものもあるようだった。しかし、ハルユキの自宅と比べて圧倒的に物が少なく、片付いているのは変わっていない。ブルーグレーのカーベットが敷かれた床を横切り、靴を置くと、タタムの右横に八十センチほど離れて腰を下ろす。フォールディング機構付きのベッドが軋み、高反発性のマットレスも半分近く沈み込む。

衝動に急かされるままに……ここまで進んできてしまったが、いざ顔を合わせると、何をどう

切り出していいのが判らなかつた。

再び書き、膝の上に置いた右腕に左手を置いているタタムの様子は、昨日ハルユキの家で別れた時とはどこか異なる。それは確かだ。しかし情報が錯綜しすぎていて、彼が今置かれている状況がまるで纏めないので。

十秒近くも黙り込んでしまつてから、ハルユキはようやく、自分がそもそもはお見舞いに来る予定だったのだということを思い出し、口を開いた。

「あ……あのさ。お前今日、風邪で病欠つてなつてたけど……具合、どうなんだ……？」

「ああ……、そうか、そうだったね」

ふふ、と小さく笑つたタタムは、軽く肩をすくめて続けた。

「今朝、少し熱があつたのは本当だよ。そうでなきゃ、ばくの親が学校休ませてくれる訳ないからね。でも人丈夫、午前中に病院で貰つた薬を飲んで、熱は下がったから」

「病院……行つたのか」

——だとすれば、何もかも早とちりだったのか？

いや、PK集團（スーパードヴァ・レムナント）が、今日の昼前にたつた一人のバーストリンカーに壊滅させられたのは事実なのだあう、でもそれは、ただシアン・バイルに似ているだけの別人だったのかもしれない。だって、その頃病院で診察を受けていたタタムが、新造で費われるはずが……

「うん、父親の共済が使える病院が新宿にあってね。朝、車で送ってもらったんだ」

——というタタムの言葉が、ハルユキの半ば願望的な思考を遮断した。

「し……新宿……」

強張った声でそう繰り返したハルユキの耳に、あくまで穏やかなタタムの声が届く。

「……診療自体はすぐに終わってさ。風邪も大したことなさそうだったんで、せっかくだから、新宿エリアで情報収集しようと思って……言けっこう仲が良かった、青のレギオンのメンバーにメールしたんだ、と言ってももちろん、リアルで会うほどの仲じゃないけど、駅近くの小さなアミューズメントセンターのローカルネットで落ち合うことにしたんだけど……まさかあいつが、ぼくをPK集団に売るなんてね……」

ふ、ふ、と小さく笑うタタムの、陰に沈んだ横顔を、ハルユキは呆然と見詰めた。

いっそう背中を丸め、右腕を握る手に力を込めた親友は、徐々に低くなっていく声で語り続けた。

「どうやらPKの奴らは、ぼくの（義）だったバーストリンカーのリアル情報入手して、その線からシアン・パイルの格闘になり得る生徒を絞り込んでいたようだった。アミューズメントセンターのグループ用ダイブブースにぼくを押し込んだ、いかにもな格好をした四人は、おもちやみたいなのをちらつかせながらどっちか選べと言ったよ。直結対戦で少しずつポイントを獲得されるか、無制限フィールドで一回死んで終わらせるか、ってね。もしぼくが抵抗し

でも、本当に刃物を使う度胸があったか、怪しいもんだっただけだね……」

ふふ、ふふふ。剣を握らしてタタムが笑う。その声には、いつか、どこかで聞いた記憶のある重んだ響きが仄かに含まれている。

「ぼくはもちろん、イレギュラー囚人の多い無制限中立フィールドを遡んだ。……でも、さすがに《最凶PK》と言われるだけあって、戦術も戦闘力も、全員ぼくより上だったよ、必死にあがくぼくを、奴らは散々いたぶり、鞭り殺そうとした……」

戦慄すべき独白をただ聞いていることに耐えられなくなり、ハルユキは抑えた声を差し挟んだ。

「……心算か？（心算システム）の力で、そいつらを撃退したのか？ い、いや、責めるわけじゃない。その状況なら、オレだって迷わず使うだろうし……」

しかしタタムはゆっくりかぶりを振る。

「もちろん、真っ先に使ったよ。でも、奴らも、熟達した心意の使い手だった。初歩の威力は強技の（蒼刀剣）は、奴らの負の心意には適用しなかった」

「じゃあ……どうやって……？ どんな方法で、お前は、《スーパーノヴァ・レムナント》を全滅させたんだ……？」

ハルユキの問いは、夕闇深まる六畳間の底に重く沈んだ。

やや長い沈黙を経て返されたのは、直接には答えになっていない、乾いた迷惘だった。

「……ばくが風邪を引いたのは、昨日の夜、親に『進学塾の見学に行く』って嘘をついて出ていたからなんだ。うちの親はフルダイブの遠隔講義を信用してなくて、本物の塾に入れて前からうるさく言っていてね。出かけたのは、世田谷の南のほうの、いわゆる『過疎エリア』だけど、そこでもちょっと小雨に降られてさ……」

タタムの言葉を、途端いつつもそこまで無言で聞いたハルユキは、びっくりと音中を震わせた。
 「……世田谷の、過疎エリア……?」

抑え声でそう繰り返す。つい最近、誰かが口にしていた場所だ、そう——昨日の朝、ハルユキとクローズド対戦した緑のレギオンの〈アッシュ・ローラー〉が、確か言っていた。彼の弟分であるアッシュ・ウータンと、その相棒のオリーブ・ダラブが、世田谷や大田の過疎エリアで、怪しい力を使って勝ちまくっているという噂がある、と。

そしてその情報をタタムに伝えたのは、ハルユキ自身だ。

昨夜、レギオンの哲が爆発したあと、タタム一人に残ってもらって相談したのだ。加速世界に、静かに広がりつつあると思われる謎の強化外装——〈ISSキット〉のことを、その懸念が、主に世田谷と大田、江戸川エリアで進んでいるらしいということも、同時に伝えたはずだ。では、あの後タタムは、いったん爆発してからまた家を出て、たった一人で世田谷に向かったのか。確かに別れ際、「ばくなりに少し情報を集めてみる」と言っていた。だからといって、そんな、いきなり危険地帯に単身乗り込むような無謀な真似を、どうして……。

上体を左に捻り、突然と眼を見開くハルユキの視線から逃れるように、タタムはいっそう深く俯いた。

逆しい肩のラインに隠れた口元から、あくまでも穏やかな、しかし抑揚の薄い声が零れる。

「……ただ、自分の眼で見てみたかったんだ。赤の王スカーレット・レインがばくに教えてくれた、加速世界の大原則……（アバターの属性と相反する力は絶対に習得できない）という絶対的限界すらも壊してしまおうような、そんな強化外装がほんとうに存在するのか……」

「……………タタ……………」

「ハル、君だから言うけどね。ばくのデュエルアバター（シアン・パイル）は、残念だけど、出来損ないだ。君が昔よくやっていたオンラインRPGで言うところの（編成失敗）ってやつさ」

淡々としたその言葉を聞いた瞬間、ハルユキは暗喟に口を開きかけた。しかしタタムの左手が小さく動き、反論を封じる。

「別に泣き言を言いたいわけじゃないんだ。パイルをそういうふうに創造したのは、ばく自身なんだからね。——あのアバターは、かなり純度の高い近接型として生まれながら、半ば以上遠隔型の強化外装にポテンシャルをつぎ込んでしまっている。以前ばくはその理由を、剣道選手でありながら突き技を過剰に信じるトラウマのせいだと説明したけど……でも、きつと、それだけじゃない」

俯いたまま話し続けるタタムの顔は、いつしか完全にシルエツトとなって表情が見えない。六月なのに、露屋に籠ちる空気は冷たく乾いて、呼吸器にもくちくと引つかかる。タタムの声も、少しずつ抑れ、より低くなっていく。

「……………これは、ばくが勝手に想像してることなんだけどね。デュエルアバターの鎧型となる（心の傷）、つまりもつとも強い記憶及びそれに結合した感情が、漠然と広い世界に向けられている人は赤糸になり……………その感情が明確な対象へとフォーカスされている人は青糸になりやすい気がする。だとすれば、シアン・パイルの原形に、小学生の頃ばくを数々苛めた剣道教室の上級生への復讐心が含まれているのは間違いない。でも、よく考えてみれば、あの頃のばくにはもつとずっと大きく大切な存在がいたんだ。そう……………ハル、君と、チャーちゃんが。君たち二人への感情が、デュエルアバターの源になっていないはずがない……………」

ここでようやく、ハルユキは渴き切った喉から幾つかの言葉を押し出した。

「そんなの……………オレだって、そうだ。オレの……………シルバー・タロウの中にだって、お前とデュエルの気持ちがいっぱい入ってる」

「うん。そうだろうね、ハル。でもね……………武器を持たずに生まれた君と違って、ばくはあの鋭い鉄杭を……………（パイルドライバー）を生まれながら装着していたんだ。近接であり、遠隔でもある矛盾した力……………それはつまり、ばくの中に、君たちへの矛盾した感情があるってことさ。それが何かまでは……………今は言わないよ。でも……………」

タタムは不意に体を起こし、半分が黒い影に塗りつぶされた顔を少しだけハルユキに向けた。「でも、きつと、その感情ゆえにぼくは三年前、突然チーちゃんに告白したんだ。まるで君たちを試みたいに。いや、それだけじゃない。去年、チーちゃんのニューロリンカーに《バタドア・プログラム》を仕掛けた……仕掛けることができたのもそのせいだ。心の半分で、三人の魂が維持されるのを望みながら、もう半分では壊そうとしてきたんだ。ずっと、ぼく一人だけが、その矛盾が、ぼくのデュエルパートナーを歪ませてしまった」

「……………た、タタ……………」

親友の、血を吐くような告白に、しかしハルユキはただ名前を呼ぶことしかできなかった。

まるで泣き笑いのような表情で、タタムはひび割れた声をさらに述べた。

「ハル、君は、チーちゃんの《ライム・ベル》がなぜあの力を……《時間を巻き戻す》なんていうとてつもない力を持って生まれたのか、考えたことがあるかい？ あれはきつと……チーちゃんが、心の奥底で、昔に戻りたいって願ってる誰なんだ。ぼくらが、毎日一緒に、暗くなるまで遊び回ってたあの頃に。……チーちゃんに、そんな悲しい望みを与えてしまったのはぼくだ。彼女が永続を望んでいた。ぼくたち三人の魂を、二度にわたって壊してしまっただけなんだ」

タタムはそこで体ごと右に向き直り、ベタドに並んで腰掛けるハルユキへとわずかににじり寄った。

フレームレスの眼鏡の奥で、親友の両眼が薄く隠れているのを、ハルユキは所もなく見詰めることしかできなかった。

「……慣えるよ、思ってた。奇跡的に与えられた、〈ネガ・ネビュラス〉という新しい環境を今度こそ全力で支え、守り続けることが、ぼくにできる最後の償いだと思ってたんだ。でも……君やチーちゃんのアバターのように、純粋な〈願い〉ではなく〈実み〉を体現するシアン・バイルは……きつといつか、レジオンの弱点になってしまうだろう。いや、もうなりつつあるんだ。だから……その前に、消えたほうがいいのかもって……ぼくは……」

「……………だから、なのか……………」

ハルユキは、それ以上タタムの身を切るような言葉を聞き続けることに耐えられず、口を開いた。囁き声で、ここまでの会話の間に限りなく確信へと近づいてしまったひとつの推測を投げかける。

「だから、お前は……〈ISSキット〉を探しに……………」

数秒後、力ない微笑みを浮かべたタタムは、そつと頷いた。

「……………ああ。世田谷第三戦域で、長時間デュエル待ち受け状態のままでいたばかり、最後に対戦を挑んできたバーストリンカーが……〈クローズド・モード〉に切り替えた上で言っただ。望むなら、力を分けてやる、と。でも、最初から、ただ力だけを求めてたわけじゃない。〈ISSキット〉は、多くの木使用強化外装と同じように、はじめはアイテムカードに

封印されてるんだ。だからそのままアイテム欄に保存して、次のレギオン会議で、マスターたちに分析してもらおうと思ってた。でも……今日の午前中、（スーパードア・レムナント）の奴らにリアルアタックされた時……無制限中立フィールドで、四人相手に手も足も出ないで……このままやられるなら、いつそそれでもいいって、一度は覚悟したのに……」

タタムの整った顔に、一瞬、息を呑むほど凄惨な表情が過ぎった。震える唇が、自嘲の笑みとともに、噴れた声を吐き出した。

「……気づいたら、ぼくは、教えられたISSキットの起動コマンドを叫んでいた、そこから……正直、あんまり憶えてないんだ。ただ……一つだけ確かなのは、ぼくは連中を、ただ倒したわけじゃない。それまで奴らにやられたより、何倍も……何十倍も酷い、残忍な方法でいたぶり、苦しめ、餓らせた。最後の一人はぎりぎり生かして、遠くで見てたエネミー狩りパーティーのところまで運んで、PKどもの情報全部吐き出させてから止めを刺したんだけど……見物客たちは、（レムナント）よりもぼくに怯えていたよ」

ふ、ふ、と小刻みに乾いた笑い声を上げたタタムは、そこで更にハルエキへと体を近づけた。笑顔がくしやりと歪む。ほとんど音にならない声で、至近距離から投げかけられる。

「……ハル。ぼくはまた間違えてしまった。今度こそ、チーちゃんが少しでも長く笑顔でいられるようになって……ただそれだけを願っていた……はずなのに……」

「な……何言ってるんだよ、タタ。まだ……たった一度、キットを使っただけじゃないか。二度

と裝備しなければ……それともいつそ、（シロップ）で処分すればそれで……」

ハルユキは懸命にそう言ったが、タタムは小刻みにかぶりを振り、呻くように答えた。

「消せないんだ。あれは、一度装着したら、ストレージから消えてアバターと融合してしまう、いや、それだけじゃない……まるで……まるで、現実世界の、ぼく自身に入り込んでくるみたい……」

タタムはそこで言葉を切ると、不意に左手を伸ばし、ハルユキの右肩を強く握った。

「だ、タタ……」

掠れ声で呼びかけるが、親友は何も答えず、更に力を込めてくる。

大柄なタタムの重みを支えきれずに、ハルユキは背中からベッドに倒れ込んだ。しかし右肩の手は離れない。両眼を見開き、体を起こそうとするものの、ずっと背が高く筋肉質なタタムをこの体勢から押し戻すことはハルユキには不可能だ。

ハルユキのすぐ真上に、のし掛かるように身を乗り出すタタムは、いままででいちばん弱々しく、かばそい声で言った。

「ハル、ぼくを壊してくれ」

「え……」

「お願いだ……君の手で、ぼくを滅茶苦茶にしてくれ。そうでもされなきゃ、ぼくはもう……自分が何を望み……何を願っていたのかすら、ちやんと思ひ出せないんだ……」

タタムの右手には、いつの間にか黒い細線が握られていた。

長さ一メートルほどの――XS Bケーブル。

ハルユキの右肩を左手で押さえ込んだまま、タタムはブラダをまず自分の青いニューロリンカーに挿入した。

次いで、速くもしなやかな指の間でケーブルを滑らせ、反対側のブラダを握る。それを、ハルユキのニューロリンカーの直結端子へと近づける。

わずかな圧迫感とともに、視界に赤紅のワイヤード・コネクション警報が点滅し、消えた。タタムの震える唇が、加速コマンドを唱えるために空気を吸い込んだ。

左目の縁から滴ったひとつぶの雫が、ハルユキの頬に落ちるよりも早く、雷鳴にも似た加速音が轟き――世界が暗転した。

ステージの属性にもよるが、ブレイン・バースト・プログラムの、仮に対戦者が現実世界で密着していても、対戦の開始時には双方を最終でも十メートル離して出現させる。

ゆえに、白銀の装甲を持つデュエルバター（シルバー・タロウ）として仮想のステージに降り立った時、ハルユキの目の前に親友の姿は存在しなかった。

足もとは、焼け焦げ、ひび割れたコンタリート、マンシヨンの壁は全て消滅し、表面を炭化させた太い柱だけが上下のフロアを支えている。すぐ背後は外界へと素通しになっていて、まるで超高温の炎に燃え尽くされたかのように黒く焦げた北高円寺の街並みが見渡せる。

（熊志）ステージだ。あらゆる地形は（真音）ステージ以上に脆く、しかし壊しても必殺技ゲージは入して充満されない。戦術に取り入れられるような可動オブジェクトや小生物すらも一切存在しない、まさしく不毛の世界。

バーストリンカーの本能によって、こんな状況でも真っ先にステージ属性を確認したハルユキは、改めて視線を正面に向けた。

十メートル離れた場所に、両腕をだらりと下げ、力なく俯いて立ち尽くす大柄なシルエクトがあった。

遅しい四肢を包むのは、やや彩度の低い薄青色の装甲。細い橋長のスリットが幾つも並んだフェイスマスク。そして、右腕の肘から先に装着され、鋭い金属の輝きを覗かせる砲身型の強化外装——（バイロドライバー）。

いちばん最初は敵として、その後はレギオンのシートラップを務める相棒として、数限りなく眠りにしてきた妻だ。しかしハルユキは、改めて愛麗緬アバターの全身から発せられる威圧感を意識せずにはいられなかった。

サイズだけを見れば、レオニーズの（フロスト・ホーン）をはじめ、より大型のデュエルアバターは少なからず存在するだろう。しかし、高密度に凝縮された力感は一頭地を抜いていると思える。少なくとも、彼が先相手を許していたような、本体と外装の属性矛盾による力きなどまるで感じられない。

ハルユキは、銀面の下で大きく息を吸い込み、意を決してタタム——（シアン・バイル）へと一歩踏み出した。

「タタ」

本来ならば、対戦ステージで相手のリアルネームを、たとえあだ名にせよ呼ぶのはタブーだが、これは直接対戦でギヤラリーは一人もいない。だからハルユキは、敬えて現実世界と同じ呼び方で、いまだ混乱の去らない思考をそのまま投げかけた。

「タタ、例で……どうして、オレたちが戦わなきゃならないんだ、お前の強さは、オレがいち

ばんよく知ってる。今更、こんなふうに確かめる必要なんか……」

だが、隠れた影の中に立つタタムは、ゆっくり首を左右に動かしてハルユキの言葉を遮った。
「いいや、ハル。君がよく知っているのは、ぼくの強さじゃなく、ぼくの限界のはずだよ。」

……きのうの《スズク攻略戦》の時も……《ダスタ・テイカー》との決戦の時も……《天城の鎮討伐戦》の時だって、ぼくは最後まで君の隣に立っていられたかったじゃないか」

自分を卑下する響きすら含まれない、淡々とした声だった。しかしハルユキは、その奥に押し込められ、解放を求めて渦巻くものの存在をかすかに感じた。

「——《同レベル同ボテンシャルの原則》を、今更否定するつもりはないよ。ぼくとハルは、半年近くもずっと同じレベルだった。だからきつと、デュエルアバターのパワーの性能そのものに大きな差はないんだろう。足りないのは……アバターじゃなく、バーストリンカー本人の強さなんだ。どんな苦境でも、どんなに相手と戦力差があっても、歯を食いしばって立ち上がる君のハートの強さ……それは、ぼくにはないものだ。そうだ……認めるよ。ぼくはずっと、君が羨ましかった。余りにも純粋な願いを、希望を体現したその姿、その力で、不可能を覆していく君が……」

タタムの左手が動き、右手の強化外装を強く握る。その仕草は、つい数分前、現実世界のベッドに座っていた時の彼とあまりにも似通っている。

再び、低く押し殺された声。

「あの（間）は……（ISSキット）は、そんな心の隙間に入り込み、根を下ろす。あれは単なる強化外装じゃない。何らかの手段でオブジェクト化された、純粹な（負の心意）そのものだ。装着者の心を汚染し、上書きする。そしてネガティブな感情を喰って育ち、増殖する……」

ハル、ぼくはもう……この黒い気持ちのどこまでがぼくのもので……どこからがあれに誘導されたものなのか、自分でも……判らないんだ……」

呻くようにそう言い終えたタタムの全身を、薄い影のようなオーラが一時包み込んだのを、暗がりの中でもハルユキは確かに視認した。

両の拳を強く握りしめ、ハルユキはもう一歩前へと出た。

もはや錯覚ではなく、アバターの前面に冷たく吹き付ける強烈なプレッシャーを感じる。

かつて、シアン・バイルがこんな気を発したことは一度もなかった。確かにタタムは、一面に於いてはもう以前の彼ではないのだ。

そう認識しつつも、しかしハルユキは、まだ自分の親友であるはずの同い年の少年に向けて、精一杯の気持ちを抱きかけた。

「タタ……、ごめん」

考えるのではなく、胸中に満ちる感情が言語となって溢れるに任せる。それは、少なくとも、嘘やごまかしではないはずだから。

「オレ、お前が何を考えてるのかとか……何に苦しんでいるのかとか、まるで知ろうとしなか

った、お前はいつも冷静で……いつも落ち着いて、構らいたりしないでオレを支えてくれると思つてた。でも……それって、甘えだよな。お前になつて、自分だけの、目指すものが……あつたはずなのにな……」

そこでいちど言葉を切り、握つた拳をまっすぐにタタムへと向ける。

「——でもな、これだけは言つておく。タタ、お前は……お前こそ、オレの憧れだし、目標だ。オレはずつと、ずつと昔から、お前みたいになリたかつた。お前はきつき、自分の力が足りないからISSキットの誘惑に負けたみたいと言ひ方したけど、絶対にそんなはずはない。お前なら、どんな苦境も自分自身の力で乗り越えていけるつてオレは信じてる」

大きく息を吸い、両眼と拳にあらん限りの気持ちを込め――。

「だから……それを伝えるために、オレはいま、お前と戦う。オレのありつただけで、お前とぶつかるよ」

そう、

ひとたび戦場へと（加速）したならば、あとはただひたすら（対戦）あるのみ。全ての答えはその果てに存在する。

それこそが、誰より敬愛する人の、第一の教えなのだから。

ハルユキの拳から発せられる熱を感じたかのように、俯いていたタタムが顔を上げた。フェイスマスクに切られたスリットの奥で、鋭い形の両眼が青白く点つた。

きつく握っていた拳から、ハルユキはゆっくりと指を伸ばしていく。尖った五指が、剣のような直線を描く。

握んだ金属質の振動音とともに、その剣の切っ先を銀色の輝きが包んだ。光は指先から十五センチほど伸び、飯沼の太気を震わせる。ハルユキの心意技、《光線剣》だ。

「最初っから全開だ。タタ、お前も全力で来い！」

ハルユキの叫びに呼応するかのよう、タタムも無言で右腕の強化外装を持ち上げた。

二の腕あたりを押さえていた左手をスライドさせ、発射筒の先端から鋭く鉄杭の切っ先を突き出す。直後、ひそやかな技名発声。

「……（蒼方剣）」

がしゅっ！ という衝撃音とともに、杭が激しく突き出された。雷閃にも似たその一瞬の輝きを、左手が見事に捉えて空中に青白い弧を描く。同時に右腕の強化外装が分解し、解放された右手も共に光を握ると、正中線でびたりと静止させる。飛散した光の中から現れたのは、青い刃を持ち同色のオーラをまとった大型の近接武器だ。タタムが赤の王との修行によって具現化した、心意の剣である。

赤い夕陽を浴びる、黒く焦げたフロアの上で、二人はしばし見つめ合った。

一八〇〇秒から始まった視界上部のタイムカウントは、すでに一五〇〇を切っている。残り二十五分。だが、双方が最初から心意技を応酬すれば、その半分以上の時間で戦いは決着する

だろう。

剣道場で竹刀しんぎょを握っている時とまったく同じ、雄大かつ雄然とした立ち姿で、タカムは両手剣を中段に構えている。隙など一ミリ秒も見いだせない。しかしハルユキは、初撃は自分で取りにいくと決意していた。シルバー・タロウの能力からすれば、前半はディフェンシブに対応して必殺技ゲージを溜め、後半に空中から一気呵成に攻撃するのがセオリーなのだが、この戦いには利口な計算など必要ない。ポイントを獲得するために平均勝率を求めているのではないのだ。ここ一番の大勝負では、ただひたすら心の奥を燃やし、自分のありつたけをぶつけるのがバーストリンカー魂こゝろというものだ。タレバーさなど大に喰わせる、かつてあの人も敢然とそう言い放った。

徐々に腰を落とし、右平の光剣を後方に引き絞っていく。空気を満たす緊張が幾何級数的に高まり、宙にちりっと小さなスパークが弾けた、その刹那――。

「……………ああッ！」

ハルユキは全力で地を蹴っていた、トメートル弱の距離を一瞬で詰める。ダクシュの慣性と全身の捻転力を右手の先端に集め、そこに光速のイマジネーションを重ねる。

しゅきいいいん！ と高く澄んだサウンドとともに、《光線剣》が一メートル以上も伸長し、シアン・パイルの左肩口を襲った、ハルユキのこの技は、心意の基本技四種のうち《射撃距離拡張》カチゴリに属するので、攻防時のみブレードが超高速で伸びるという特徴がある。



それゆえ、対峙するほうは間合いが非常に読みづらい。あの《ダスク・タイカー》すら、初見では切っ先を見切れなかったのだ。

——しかし。

変則的な軌道を描くハルユキの右上段斬りを、タカムはほんのわずかに角度を変えた両手剣の刃で見事に受けてみせた。

甲高い衝撃音が響き、銀と蒼の光茫が飛び散る。直後、どやりっ！ と刃の交錯点が滑り、上にあつたはずのハルユキの剣はあつという間に下に押さえ込まれていた。

「くっ……」

凄まじい圧力に、反射的に左手も持ち上げる。そこからからも光剣を伸ばし、右の剣とX字に交差させて、二本の刃でタカムの両手剣に對抗しようとする。

だが、結ばてきたのはほんの半秒程度だった。両手剣を覆う蒼いオーラが、逞しい両腕にまで広がるや、重さが一気に増したのだ。剣道部の練習や試合で、このような厚身の鎧迫り合いを数限りなく繰り返してきたタカムの経験がイマジネーションを強化している。とてつもないブレッツシャーに晒され、シルバー・クロウの肘及び膝関節がざしりと軋み、オレンジ色の火花が瞬く。

HPゲージに刻まれた数値ドットのダメージと引き替えに得た、さきやかな必殺技ゲージを全消費し、ハルユキは背中の中翼を瞬間的に振動させた。生まれた推力によって蒼い刃をわず

かに押し返し、反動を利用して一気にバクダクシュ、再び距離を取って正対する。

いまだ開始点から一步も動いていないタタムは、再び両手剣を中段に構え、低い声で囁いた。

「ハル、馬鹿正直な力比べじゃ、強ら何でも君に勝ち目はないよ。ぼくが望んでいるのは、そんな戦いじゃない」

「……ああ、解ってる」

頷き、ハルユキも右手の光剣のみを緩やかに持ち上げた。

「さっきのは挨拶だ。次で、現在のオレの《力》と《技》を両方見せる」

やや大仰な台詞ではあったが、それは同時に自分を奮い立たせるための助燃剤でもあった。

タタムの剣捌きは、今日まで足掛け六年も練習してきた剣道の技と才能に裏打ちされている。現実世界で互いに竹刀を握ればもちろん、加速世界で剣と剣の尋常な勝負を挑んでもハルユキに勝機はあるまい。

しかし、今のハルユキには、パワーに優る対戦相手の攻撃をもじの力に変える技がある。

黒雪姫に身を以て示され、以来独自に修練を重ねてきた《業法》——《受け返し》がそれ

だ。相手の攻撃をがっちり受けたり弾き返したりするのではなく、自分の動きのベクトルに巻き込み、融合させ、放つ高等技術。

微妙なところだが、あのタタニツタにもある程度は心意システムが備っているとハルユキは

推測している。可視のオーラ、つまり《透視光》を生むほどの強度ではないが、イメージネーションによって現象に働きかけ、攻撃威力の軌道のみを操作するのだ。

であるならば、その要諦は、信じることだ。

道説的だが、敵の攻撃を信じ、受け入れる。ただ敵意心のみによって迎え撃とうとしては、融合のイメージは生まれない。強く弾くのではなく、柔らかに寄り添う。だから《柔法》なのだ。

ハルユキがこの技の練習を始めてから、まだ十日程度しか経っていない。実戦での使用経験は、先のブッシュ・ウータン戦を含めてせいぜい数回。剣相半の、しかも心算戦で試みるのは当然これが初めてだ。だが、ハルユキはタタムに、自分のありったけでぶつかると約束した。そこにはいかなる留保も言い訳も許されない。

大きく息を吸い、吐いてから、ハルユキは右手に拓る光の剣を、ただ五指を渡う透視光にまで縮めた。

タタムの両眼が、スリットの下で鋭く細められる。だが彼もすぐに、ハルユキが勝負を投げたのではないと理解したようだった。なぜなら、右手のオーラの輝きはむしろ凝縮され、強まっている。

「……行くぜ、タター」

ハルユキの叫びに、半ば誘われるようにタタムも応じた。

「来い、ハル！」

わずかに体を洗めてから、ハルユキは猛然とフロアを蹴り飛ばし、二度目の前ダッシュを敢行した。今度はタタムも、先を取るべく撃ち込みを合わせてくる。剣タイプの強化外装を備える青糸のバーストリンカーは多いが、剣道の経験がある者はほとんどいない。彼らとタタムの技は、出の早さからしてまるで違う。

ボクシングダのパンチもそうだが、真に練られた技には人翼をなす振動は存在しない。大きく振りかぶり、タメを作ってから斬り込んでくる他のバーストリンカーとは異なり、タタムの剣は、切っ先がわずかに揺れたと思った時にはもう目の前まで肉薄している。これが現実世界なら、ハルユキは何が起きたか解らないうちにタンコブを作られているだろう。

しかし、フルダイブ環境下での知覚及び反応速度こそが、ハルユキがたった一つ誇れる能力なのだ。

ヘルメットの額を断ち割らんと神速で迫る《悪刃剣》の切っ先を、ハルユキは視覚に留まらない五感、もしかしたら直感をも使って認識した。

りいりいん、という音が遠く聞こえる。世界の色が変わる。《超加速感覚》の訪れとともに、剣の速度がわずか、ほんのわずかに遅くなる。

——ここ！

致死の刃の側面、ダメージ発生能力の薄い《鈍》部分に、ハルユキはそっと右手の指先を

添えた。

もし過剰光でガードしていなければ、たとえ剣の腹でもこの時点でハルユキの手は跡形もなく吹き飛んでいただろう。それが、あらゆるゲーム内物理法則を超越する心意の力だ。しかし今は、右手を包む《光還》のイメージがタタムの《切斷》のイメージをガードしている。

とはいえ、刃を真正面から掌で受け止めようとすれば、やはり斬られるだろう。なぜなら、ハルユキの心意が《射撃拡張》であるのに対して、タタムのそれは《威力拡張》だからだ。先にタタムが「パワー勝負では君に勝ち目はない」と言い切ったのは、それが理由だ。ゆえにハルユキは、柔法による受け返しを試みたのだ。

無敵、剛殺にして端正なるタタムの剣を、そう容易く曲げられるものではない。黒雪姫が見せたような、攻撃ベクトルの百八十度転換など絶対に不可能だ。だがハルユキは先のブッシュ・ウータン戦で、威力を逸らし致命傷を避けるだけならば、想像よりもずっと小さな干渉でも事足りることを学んでいた。

剣の鋺に触れさせた指先に、そっと、優しく、力を込める。

双方の過剰光の接触面が圧縮され、スパークが散る。ここで反発してはいけない。脳裏に、先日、ブッシュ・ウータンの《ターク・ブロー》を掌で受け止め弾いたブーダー・メイデンの姿がフラッシュする。あれは《柔法》ではなかったが、メイデンの奥のオーラにはいかなる敵意も害意もなかった。ただ相手の荒ぶる心を受け入れ、鎮め、癒そうとする浄化の意志だけが

感じられた。ハルユキは彼女ほど修行が成ってはいないが、それでも今、心の中にはタタムへの敵意など欠片も存在しない。ただ——彼に、伝えたい。

自分、有田春雪が、どれだけ驚愕政という人間を信じているかを、

新しい刃を取り巻くオーラには、タタムの暴乱や惨れ、後悔、そして希望が満ちているように思えた。

その感情に寄り添うように、ハルユキは指の腹から掌までをふわりと剣に当て——イメージで引き寄せ、動作で押し出した。

きやういいん！ という、硬質面に食金屬を落下させたような音が頭の中で響き、視界にオレンジ色の火花が無数のラインを引いて流れた。両手剣の切っ先が、シルバー・クロウのヘルメット左側面を擦りつつ後方に抜けたのだ。

ハルユキは、いまや指先から肘までが剣に触れている右下を、そのまま前方へと撃ち出した。図らずも、中国拳法の肘打に酷似したフォールの打撃が、シアン・パイルの左肩付け根に炸裂した。どうつーと重い手応え。上体を揺るがしたタタムが、踏ん張りつつ剣を引き戻そうとする。

恐らく、先の（受け返し）は、もう二度とあかも綺麗には決まるまい。タタムならば一瞬でハルユキが何をしたのかを、そのロジックまで推察したうえで即時対応してくるだろうからだ。だからここで間合いを取られるわけにはいかない。張り付いたまま——ラッシュユあるの

みー

「お……おおッ!!」

ハルユキは短く咆哮し、いまのクラインヒットで加算された必殺技ゲージを消費しつつ、左の金屬翼のみを全力で振動させた。爆発的な推進力が、左に開いていた体をノーモーションで右回転させる。その勢いを利用して、剣が浮いているためにガードの痛いタタムの右脇腹へと、左の膝蹴りを見舞う。再び、痛撃。

「ぐっ……」

タタムが低く声を漏らしたが、さすがにそこで動きを止めたりはせず、刀身ではなく柄頭にによる打撃をハルユキのヘルメットに見舞おうとした。もちろん剣道の一本にはならない攻撃だが、居合術にはこのような当身の型もあるらしい。

前後左右への回避は圓に合わない、見事なタイミングだった、しかしハルユキは、軸足になつていた右の足裏をわざと滑らせ、全身を垂直に落とさせた。両手剣の柄が危うく眉間を掠り、後方に抜ける。

ハルユキの、文字通り捨て身の回避に、タタムも刹那迷ったようだった。剣道では、下段への攻撃は基本的に行わない。とはいえハルユキも、このまま地面に倒れ込んでしまえば一瞬にせよ動きが止まらざるを得ない。そこを押さえるつもりか、タタムが右脚を持ち上げた。

だが、直後ろに倒れ込むハルユキは、地面ぎりぎりの高度で両翼から頭上方向に推力を解き

放つ。不可視のロープに足を引っ張られたかのような、急激なスライド。シアン・バイルの右足がずしんと地面を踏んだ時には、ハルユキは後方宙返りの体勢で地面から跳ね上がっている。そのまま、やや装甲の薄い相手の背中に、右足先による「へ起き上がり攻撃」。よろめきつつ振り向きうとするタタムの死角へ、右腕の瞬間運動を利用したスライドダッシュで入り込み、ついに右手の直突きを放つ。

心意の光を消した貫手は、シアン・バイルの左肩に命中し、分厚い装甲をまるで紙細工のように切り裂いた。

この、両翼あるいは片翼での瞬間スラストを利用した三次元近接機動こそ、ハルユキがここしばらく練練しているもう一つの技術——《空中連続攻撃》だ。必殺技ゲージが一定程度貯まれば充分に発動でき、攻撃が当たり続けるかぎり無限に繋げることができる。また、動作がとてつもなく変則的なので、初見で対処することはほぼ不可能。かつて、あの黒の王をすら、数十秒間も防戦一方とならしめたのだ。

「う……おやおおッー」

ハルユキは、鋭い氣勢とともに更にコンボの速度を上げた。

さすがに純色に近い青糸だけあって、シアン・バイルのHPゲージは、これだけクリーンヒットが続いてもまだ七割以上を残している。シルバー・タコウはほぼフル状態だが、ラッシュで押し切ろうとするには微妙なタイミンだ。

しかしハルユキは、この対戦ではあらゆる計算を捨てると決めていた。最初から最後まで全開。それてなくては伝わらないものが、加速世界には確かに存在するのだ。

脳内のギアがシフトアップするにつれ、シルバー・タロウの機動も加速していく。小柄なボディは目まぐるしく宙を舞い、四肢は大気に無数の流線を描く。時折（光線剣）と（蒼刀剣）が激突し、巨大な衝撃波がステージを揺るがすが、ハルユキにはまだクリーンヒットの被弾はない。

タタムのはうも、エアリアル・コンボのリズムに徐々に対応し始めるが、回避しきれない攻撃が巨体の各所を撃ち、切り裂いていく。HPゲージは減少を続け、やがて五割を下回り、イエローへと変わる。

直戦のさなか、ハルユキは、脳裏に直接響く鳴き声を聞いた気がした。

……ああ……ハル……。

……綺麗だ、君の戦いは、なんて美しいんだ……。

シアン・バイルのフェイスマスクに切られたスリットの奥で、肉眼が糸のように細められる。青白い光が溢れ、不規則に明滅する。

……でも、その美しさは……あまりにも、危うすぎる。ばくの心を、ざわめかせる。

……もっと、もっと圧倒的な暴力で、ばくを叩き潰してくれ。さもないと、ばくは……

君を、暖したくなる。

ピカッ!! と、二つの眼が強烈に輝いた。

シアン・バイルの胸部装甲に並ぶ複数の孔から、硬質な音を立てて鋭い弾頭が出現した。

「……………タ!!」

ハルユキは、暖に右へとスライドダッシュしようとした。しかしその回避のクセを先読みされたか、タタムも素早く体を旋回させ――。

「(スブラッシュ・ステインガー)!!」

技名発声とともに、ハルユキの目の前で、複数のペンシルミサイルが発射された。今度こそ、近距離での全弾回避は不可能だ。ハルユキは真後ろに高速ダッシュしつつ、両手の光剣でミサイルを次々に切り裂いていく。タタムのこの技は心算技ではないので、ミサイルそのものはハルユキの光のオーラを破れないが、何せ数が多い。どうにか全ての誘導弾を叩き落とした時には、タタムとの間には再び十五メートル近い距離が開いていた。

爆発の黒煙が、スタージの風にたちまち吹き散らされていく。その向こうに立つシアン・バイルは、対戦開始時と同じように、両腕をだらりと下げ顔を俯けている。右手の(蒼刃剣)を覆うオーラは不定期に明滅し、イマジネーションが解けかけていることを示している。

――そして。

もうひとつ、以前とは異なる現象が存在するのに、ハルユキは気づいた。

青灰色のアバターの全身を、薄い影のようなものが取り巻き、上空へと立ち上っている。その色合いには見覚えがあった。間違いない、先日のタタグ対戦で、ブラシユ・ウータンがまわっていたのと同じ（影のオーラ）だ。

つまり——ついに、目覚めようとしているのだ。シアン・バイルに宿り、（スーパード・レムナント）四人を同時に隔るほどの力を授けた、あの強化外装が。

ハルユキは、大きく息を吸い、さっぱりと言った。

「いいぜ、タタ、使えよ」

タタムが無言で顔を上げる。その顔を正面から見詰め、言葉を続ける。

「全部出し尽くす。そうだろ？ それはもう、お前の力だ。お前のありったけでぶつかってこなさや、この戦いは終わらないぜ。さあ……使え、（ISSキット）を——」

ハルユキの叫びに、タタムは从かに微笑したようだった。

ぐっと顔（つら）を近づけて、ハルユキは胸中で、声に出来なかつた言葉を念じた。

——タタ、僕は、お前を信じる。たとえこの戦いがどのように終わろうとも、お前が、その
 國の力を乗り越えてくれると信じる。

まるでその思念すらも國（こ）こえたかのように、タタムもまた頷いた。

右手から、（第一象限の正の心意）の具現化たる流麗（なまよ）な両手剣が消滅する。青い光は再び腕

を取り巻き、元の強化外装（バイルドライバー）へと戻る。

タタムは、その腕を高く掲げると――密やかに、しかし決然と叫えた。

「（ISSモード）起動」

間が、溢れた。

謎の強化外装（「SSキット」）は、その恐るべき力に比して、オブジェクトとしては極小サイズだ。

直徑五センチ程度の黒い半球。どこか、ソーシヤルカメラにも似ている。ブッシュ・ウータンやオリブ・グラブは、それを胸の中央に装着していた。

しかし、タタムの起動コマンドに呼応して半球が浮き上がったのは、右下の（「パイルドライバー」）の手の甲にあたる部分だった。

キットの中央に、びしりと縦線が走る。そこから表面が上下に分かれ、内部から生物の眼を思わせるもう一つの球体が出現する。濡れたようなその輝きは、深い血の赤色――。

直後、シアン・パイルの足許から、恐るべき密度及び規模の過剰光が溢れ、渦巻いた。いや、それを光とは呼べない。濃密なる漆黒に染まっているからだ。もはや、ブッシュ・ウータンがまとっていたおぼろな（影）ではない。純粹なまでの、闇のオーラ。

ハルニキは、自然に下がりそうになる両脚を、必死に踏ん張り続けた。

速るオーラの勢いも、ウータンのそれとは比べものにならない。単なるライトエフェクトではない証として、タタムの立つ場所から、フロアに放射状のびび濡れが走る。

……タタ……

無意識のうちに、心の中でそう呼びかけたハルユキの声が聞こえたが、タタムが穏やかに応じた。

「ハル」

左手で、上下のフロアやまばらに伸びる柱を示しながら言葉を続ける。しかしその声は、キタト召喚術とは大きく異なっている。陰々と重む、金属質のエフェクト。

「……君も、いつまでもこんな狭い場所にいたら、全力を出せないよね」

「あ……ああ。外に、場所を変えるか……?」

どうやらタタムは、ウータンたちほどには精神への干渉を受けていないようだ。ハルユキはそう判断し、そつと息を吐き出しつつ訊ねた。

しかし――。

「いや、それには及ばないさ」

タタムは眩くように応じると、ISSキットの縮むパイロドライバーを、無造作に足許の床へと向けた。直後、まるで気負いのない、平板な技名発声。

「(データ・ショット)」

鉄杭の代わりに放たれたのは、闇色のビームだった。それは床を一瞬で穿ち、直徑十センチほどの穴を穴けて地下へと消えた。

一秒、二秒……三秒後。

ハルユキは、真下から、巨大な激動が衝き上げてくるのを感じた。息を吞む間もなく、床が粉々にひび割れる。その隙間から、黒い炎としか形容できないエネルギーの奔流が噴き出す。

「……………」

激しく空気を吸い込みながら、ハルユキは反射的に胸臍を展開すると、真後ろにダッシュした。空中で体を上下入れ替え、両手を突き出した全速飛行姿勢でマンション周囲の開口部へと突進する。背後から押し寄せてくる爆風に体を揺らしながら、どうにか空中へと飛び出すと、そのまま（生土）ステージの空を一直線に飛翔。充分以上の距離を取ったと確信できたところて、再び体を反転させ、後ろを振り向く――。

「な……………」

ハルユキは愕然と噤んだ。

視線の先では、現実世界では自宅マンションのA棟である地上三十階の巨塔が、地上部分から粉々に砕け、崩壊していくところだった。

確かに、この（生土）ステージでは、地形オブジェクトは壊れやすい。だがそれでも限度というものがある。あのような巨大建築物の破壊は、（対戦）の戦略をも根底から覆してしまうため、それ相応の時間と手間がかかるようになっていたのだ。ハルユキが知る限り、（一撃で）の巨大ビル破壊）が可能なバーストリンカーは、強化外装全展開状態の（不動要塞）こと

赤の王（ヘスカーレット・レイン）だけだ。

眼前の光景が信じられず、ハルユキは何度も瞬きを繰り返した。しかしマンションはたった数秒で完全に崩壊し、巨大な土煙の山へと変じてしまった。

暖い寄せられるように、視界右上のシアン・パイルのHPゲージを確認する。

あれほどの大崩落に巻き込まれたのに、残量はハルユキが（エアリアル・コンボ）で削った四割弱のままで、そして、地形破壊ボナナスの薄い（焦土）ステージでありながら、必殺技ゲージは一気にフルチャージされている。

再び瓦礫の山に視線を移したハルユキは、ピラミッド状に堆積したその頂上のオブジェクト塊が、真下から吹き飛ばされるのを視認した。

粉々になって消滅する瓦礫の中から現れたのは、いっそう色濃く闇のオーラをまとうシアン・パイルだった。

「……………タタ」

掠れた声で聴く。だが、それ以上の言葉が出てこない。

いかなる驚愕や戦慄すらも置き去りにする、圧倒的としかなえない現象だ。（HSモード）発動後のブラッシュ・ウータンも恐るべき戦闘力の上昇を見せたが、タタムの変容はそれを遙かに超越している。つまり——それだけ深く、狂おしいほどの苦悩を、彼はずっと心の奥底に押し固めてきたのだ。

ならば、このまま負けるわけにはいかない。

ハルユキが千もなくISSキットの方に懸すれば、タタムを捕らえつつある間はいつそう力を増すだろう。かつて黒書姫やスカイ・レイカー、ニコ、そしてブラッド・レバードが繰り廻し警告していた心算の暗黒面、底なしの《心の穴》に、タタムは足を踏み入れてしまうかもしれない。

《バツタドア・プログラム》事件以降、タタムは懸命に自分を取り戻そうとしてきた。最先端の高度情報化教育が行われている新形の進学校から、まだアナログな部分を多く残す修練中に転校して、数年りのペースで一步一步今日まで歩き続けてきたのだ。その道のりを、何者かが意図的に広めようとしている悪意などに途切れさせてはならない。どうにかして、彼をキットの下歩から引きずり出し、支配力を断ち切らねばならない。それには――

この戦いに勝つ。それしかない。

勝って、示すのだ。《止の心算》の力を、そこに込められた、ささやかだけれど何よりも強く輝く、希望の光を。

ハルユキは、高度七十メートルにホバリングしたまま、両手に《光線剣》を具現化させた。眼下では、瓦礫の頂上に立つタタムが、ゆるりとした動きでISSキットの宿る《バイルドライバー》を持ち上げ、ハルユキを照準した。

先刻、あの発射口から放たれた《タータ・ショット》は途轍もない威力だった。ブッシュ、

ウーダンの同名の技を、光線劍で弾いたようにはいかないだろう。だが、発射位置とタイモンダが見えれば対処は可能なはずだ。ダメージを受けるぎりぎりの間合いで戦い、カウンターの急降下攻撃を決めるしかない。

ハルユキは仮想の呼吸を止め、全精神力をシアン・パイルの掲げる強化外套の砲口に集中させた。

——だから、気づくのが遅れた。タタムの密やかな技名発声とともに、本来ならば心算技では消費されないはずの必殺技ゲージが、フルチャージ状態から一気に全消費されたのを。

「……（ライトニング・ダータ・スバイタ）」

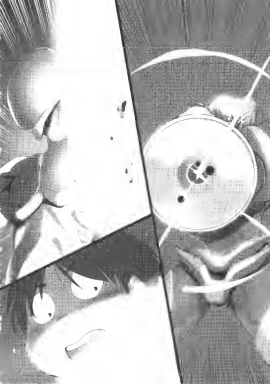
初めて耳にする技名がコールされ、同時にパイルドライバーの砲口が一時、ちかっと黒く発光したように思えた。

それだけだった。マンションを崩壊させた巨大なビームも、轟音も、衝撃波も生まれない。焦土ステージの乾いた風が蕭々と吹き過ぎ、ひやりとした感覚が左肩のあたりを撫で……。

「……………」

ハルユキは、不意に体が軽く揺れるのを感じた。同時に、小さな光が幾つか視界の下端を横切る。視線を移すと、妙なものが地面へと落下していくところだった。銀色の棒や、薄い板状のオブジェクト。何だ? と眼を凝らし――

「……………」



その正体に気づいた瞬間、ハルユキはただ呆然と眼を見開き、息を吸い込むことしかできなかった。あれは――腕だ。そして、翼。

今更のように左肩を見る。そこにあつたのは、まるで精密に銃面仕上げを施したかのような滑らかな切断面だけだった。シルバー・クロウの左腕と、左の金屬翼は、その付け根から完全に消滅していた。

ぐらり、と体が傾く。無意識のうちに右翼の推力を上げ、高度を保とうとするが、逆に姿勢を崩してしまい、膝詰め状態へと突入。そのまま、木の葉のように螺旋を描きながら地上へと落ち始める。

地面に激突する寸前でどうにか放心状態から復帰し、ハルユキは右翼で回転に逆のベクトルをかけて相殺すると、急うく足からの着地に成功した。それでも衝撃を完全には吸収できず、膝と足首の関節が激しくスパーク。がくりとひびきまじつ、理まきながら目Pゲージを確認する。左の腕と翼をよるまる欠損した傷は深く、ゲージは一気に五割を下回ってイエローに染まっている。

だが、ダメージの量よりも、それを受けたことそのものに、ハルユキは巨大な衝撃を感じていた。

――まるで、見えなかった。

バイルドライバーの砲口に、発射エフエクトが漆黒の十字を描いたのはどうにか気づけた。

だがそこから七十メートルもの距離を通過してきたはずの、攻撃技の本体をまったく知覚できなかったのだ。

ハルユキは以前、「近距離から発射された銃弾を避ける」という自作のVRプログラムで無茶な特訓に邁進した時期がある。その甲斐あつてか、現在では、射手が見えてきえいれば大型ライフルによる狙撃ですらかなりの確率で回避できるようなっている。逆に言えば、それができないければ、障害物のない空などとても飛んでいられない。なのに――避けられないならまだしも、弾道を認識すらできなかったとは、とても信じられない……。

シロツタは途轍もなく巨大だったが、ハルユキが地面で自失していたのは、ほんの半秒といったところだったろう。

これはどう意外の状況に見舞われようとも、即座に思考を立て直し次の行動に移るのはバーストランカーの重要な能力の一つだ。ハルユキはとりあえず驚きを押しやり、飛行能力をほぼ奪われた現状からの戦略を再構築しようとした。こうなれば、再び密着状態に持ち込み、たとえ片腕片翼なれど、「受け返し」と「空中連続攻撃」を組み合わせての近接戦に勝機を見いだすしかない。

まずは――動け！

そう自分を叱咤したハルユキは、落下したマンションの南庭から、まだ健在の目標方向へと走ろうと立ち上がった。

しかし、ここで再び、予想外の事態が生じた。

「さうん！」という衝撃と共に、地面が揺れ、ダッシュを妨げた。よろめきつつ音源に視線を向けると、ほんの十メートルほどの距離に、大柄なアバターが着地したところだった。瓦礫の山の頂上にいたはずのタタムが、一気に前庭まで飛び降りてきたのだ。

シアン・パイルやフロスト・ホーンのような重武装アバターは、ワイールドへの踏み付けて震動波を起こし、軽装アバターの移動を妨害できるという特性を持っている。しかしこの揺れは震動というよりもはや大地震だ。縦横に走ったひび割れに足を取られ、たたらを踏んでしまったハルユキの後方から、これも規格外の高速ダッシュでタタムは瞬く間に迫いすが、至近距離で立ち止まった。

まるでデュエルアバターのサイズそのものが一回り大きくなってしまったかのような、圧倒的な存在感がハルユキを凍り付かせた。

フェイスマスクに花ぶスリットの奥で、低い音を立てて両眼が光る。だがその色は、少し前までのライトブルーから、暗いパープルへと変化している。

不安定な姿勢で立ち尽くすハルユキを、タタムは高い位置から静かに見詰めた。

その口元から、重んだエフェクトを帯びる声が流れた。

「ごめんよ……、ハル」

「……………タタ……………」

ほとんど音にならない声で、親友の名を呼ぶことしかできないハルユキに、タタムはゆつくりと一步近寄る。

「……ごめんよ。ぼくは……こうなることが……こうなってしまうことが、解^{わか}っていた。なのに、君に無理矢理、対戦をせがんだ。これじゃあ……ただ、君を叩^{たた}きのめしたかっただけだと思われても、仕方がいね……」

ずしん、もう一步距離を詰めると、もうシアシ・パイルの巨体はハルユキのすぐ目の前にある。縦^{たて}のようなアバターは、濃密な漆黒のオーラを全身から間断なく牛み出し、上空へと迷^{まよ}らせている。その発生源となっている、右腕の強化外装に寄生する黒い眼球を、タタムはちらりと見下ろす。

「……この（ヘーSSキット）は、宿主の心の間が深ければ深いほど、恐ろしい威力を発揮すると聞いた。つまり……ぼくは、そういう人間なんだってことだよ。この力で、四人のPKたちをいたぶり殺している間に、ぼくはそれを思い知った。いや……本当は、最初から解^{わか}っていたのかもしれない。いい成績を取り、大会で勝ち、チーちゃんの気持ちを解^{わか}ぎ止めるためだけにぼくはバーストリンカーになったんだから……」

「タタ……タタ」

遠う。遠う。遠う。遠う。遠う。遠う。遠う!!

ハルユキの胸中には、そのひと言だけが満ちた。だがそれを、どう言葉にして伝えればい

いのか、ハルユキには解らなかった。

視界が虹色に揺れ、滯んだ。ヘルメットの下の、自分が涙を流していることに、ハルユキは遅れて気づいた。

そんなハルユキを見下ろすタタムの肉眼からも、ささやかな光の粒が零れ、即座に蒸発した。

「ありがとう、ハル」

親友の、優しい声が耳に届く。

「最後の《対戦》の相手が君でよかった、……ありがとう」

「……………さ、最後……………何……………言ってるんだと……………」

わななく声で聞いた質すハルユキに、タタムは静かに答えた。

「ばくは、この戦いが終わったら、《加速研究会》と差し違えにいく」

「……………え……………」

「こんな恐ろしい強化外装を作り、ばらまくような奴らだ。トップに勝てるとは思ってない。でも、キットの燃焼経路を逃れば、ある程度の地位にいる奴までは割り出せると思う。そいつをどうにかして無制限フィールドに誘い出して、得られる限りの情報を奪う。……………たとえ……………」

そこで一瞬声を詰まらせたが、すぐに締まる言葉が続いた。

「……………たとえ、そこでポイントを全損して、ブレイン・バーストをアンインストールされても……………解ったことは、必ず君に伝える。だから、後は、君が止めてくれ、ハル。こんな……………バ―

ストリンカーなら誰かが抱えている（心の傷）につけ込み、疼わせるような力は存在しちやいない。加速世界は、君や、チーちゃんや、マスターみたいな、傷の痛みを希望に変えて運める人たちのためにある場所なんだから……」

「……タタ……お前も……お前だって……」

この場面では、そんな切れ切れの言葉しか口にできない自分が、ハルユキはもしかかった。しかし十年来の功績（功績）は、それでもハルユキの気持ちを汲んでくれたようだった。マスターの喪に、ふ、と柔らかな微笑みの気配。

「ハル、君には、もう一つお礼を言っておかなきゃね」

全身から溢（あふ）れ、いつそう荒ぶる闇のオーラとは対照的に、その声はあくまで穏やかだった。「あの時……、ぼくらの初めての戦いの最後に、ぼくを許してくれてありがとう、あの日から今日まで、新生（ネガ・ネビュラス）の一角として戦ってきたこの八ヶ月は、まるで夢みたいに乗しかった。ありがとう、ハル。君の（浄化）ミツシロンや、エンディングを目標（目標）すっているレギオンの目標を途中で投げ出してしまうのは無念だけど……マスターやレイカーさん、メイデンさんにも、ありがとうと伝えておいてくれ。それと……チーちゃんに、ごめんって」

「——言うな！ そんなこと言うな、タタ!!」

引き裂かれるような胸の痛みを押し殺し、ハルユキは絶叫した。

残された右手の拳を握り締め、懸命に心意の輝きを宿す。激しく揺れる感情を映して、その

光は不規則に明滅しているが、それでもほんのわずかに、一人を取り巻く闇の色が薄れる。

「お前がレギオンからいなくなったら、チユは泣くぞー 絶対に泣くー お前がチユを泣かすのか、タク!!!」

その叫びを受けて、タクムは小さく顔を俯けた。やがて、尚も穏やかな、声。

「……ああ、そうかもしれないね。でも……その涙を素早く拭いて、きつと前に進んでくれないと信じてる。チーちやんに、昔に戻りたいって思わせ続けてきたのは、このぼくなんだから。ハル、頼むよ、チーちやんのこと」

にこりと微笑み、タクムはハルユキの目の前で、巨大な左拳を強く固めた。

凝結した闇のオーラが、ごうつと猛々しく燃る。ブラッタホールを思わせるその漆黒は、ハルユキの右手に指もささやかな銀の光を容易く圧倒する。

「さあ、終わりにしよう、ハル。ぼくのために、そんな悲しい顔をしなくていいよ。この間は、最初からぼくの中にあっただ、だから君は、ただ八ヶ月前とは逆の選択をするだけでいい。ぼくが、そうさせてあげるから……」

余りにも巨大なパワーが凝集しているせいか、空中に無数のスパークを走らせる左拳を、タクムはゆっくりと引き絞った。

技名のコールは、まるでハルユキを慰め、励ますかのように、どこまでも優しく響いた。

「(タータ・プロウ)」

宇宙から降り注ぐ巨大岩石の如き圧力とともに撃ち出された拳を、ハルユキは右手に宿した額の光でガードしようとした。

しかし直後、かつて感じたことのない、世界そのものが爆発したかのような衝撃が全身を見舞った。ささやかとはいえ心意の防衛がなかったら、アバターは一瞬で爆散していただろう。消滅こそ免れたが、とても踏みとどまることはできず、ハルユキは恐ろしい速度で真後ろのマシンガン口方向へと吹き飛ばされた。

地面と平行に平秒ほど飛翔し、背中から建物の外壁に衝突する。焼け焦げたコンクリートに大穴を穿ち、内部に突入してもまだ止まらない。次の壁、その次、さらにもう一枚をぶち抜いたところでようやく慣性が減衰され、ハルユキはがんとした大きな部屋の床に一度バウンドしてから大の字に転がった。

衝撃のあまりが薄暗く沈んだ視界の左上で、ちか、ちかと赤く点滅するものがあつた。

思考はほぼ停止していたが、それでもハルユキは、それが残り数ドットまで減少したHPゲージだと悟った。

絶望的なまでのパワー差だった。そう、事ここに至って初めて、ハルユキは絶望が胸に満ちるのを感じていた。

タタムに全力を出させた上で勝利し、彼を救うなどと、何と思ひ上がったことを考えたものだろう。タタムの能力は、そもそもあらゆる面をハルユキを遥かに凌駕しているというのに。

だから輸れた。だから自爆にしたのだ。

そんな彼が、あそこまで自分を追い詰め、覚悟を決めたのならば、唯、の力たる弱すら奪われたハルユキに、いったい何ができるだろう……。

遠く、重い振動を感じる。タタムが、マンションの壁をぶち抜きながら、この対峙を終わらせるためにまっすぐ走りきつつあるのだ。

ハルユキは、ひび割れたヘルメットの下で、再びの涙を溢れさせた。

——こんなふうが終わってしまうなんて、思ってたなかった。チユリと、タタムと、三人ですつといつまでも遊んでいられると信じていた。ブレイン・バーストは、加速世界は、そのためにこそ存在すると、ずっと信じていたのに……。

『そうだよ』

不意に、誰かの声が頭の中で響いた。

ぼんやり眼を見開く。焼け焦げた、霞風景な天井を背景にして、不思議な光景が見えた。

床に横たわるシルバー・タロウの体から、すうつと一つの人影が抜け出し、音もなく立ち上がったのだ。

うつすらと走り通り、ほとんど幻のように見えるそれが誰なのか、ハルユキには解らなかつ

た。

革者な少女やデュエルアバターだ、花びらをモチーフにした肩や腰の意匠は、どこかチエリの「タイム・ベル」とも似ている。しかし頭は額の跳ねたショートヘアタイプで、装甲の色もまるで異なる。

春の日差しを思わせる、暖かな山吹色――

名前の解らない誰かは、横たわるハルユキのすぐ近くにある瓦礫の塊に腰傷けると、再び声を発した。

「あなたの言うとおりだよ。ブレイン・バーストは、争い、憎み合うためだけに存在するんじゃない。手を繋ぎ、絆を結ぶことだってできるんだよ」

「……………君は、誰……………」 どうしてここに…………… ここは、直結対戦フィールドなのに……………」

ハルユキはばんやりと問いかけた。すると、憚く姿を遁る誰かは、ふわりと微笑んで言った。

「私は……………記憶、中央システムに記録された、あるオブジェクトを構成する巨大な量子情報体の片鱗に宿る、ちっぽけな思念のかけら……………」

「……………記憶……………」

そう呟いた途端、ハルユキは自分自身の記憶のどこかがちくりと刺激されるのを感じた。

——知っている、会ったことはないし、名前も解らないけど、それでも僕はこの人を知っている……………」

その想念を否定するかのように、山吹色のアバターは小さく頷いた。

「あなたが〈帝城〉で過去の記憶をトレースしたから、中央システムとの回路が一時的に活性化して、こうして話しかけられたの。でも、きつと、長くは持たない」

一度言葉を切り、少女は強さを増した声で、驚くべきことを告げた。

「あなたの友達を助ける方法は、まだ残っているよ」

「え……………」

眼を見開く。ぼろぼろの右手で床を支え、必死に体を起こそうとしながら臥ねる。

「そ、それは……………」僕が、これ以上、何をできるって言うの……………」

「あなたの中にも、まだ〈力〉が残っているはず。友達に入り込んだ深い闇に對抗できる、たった一つの力が……………」

山吹色は、微笑みを薄れさせ、そう囁いた。一瞬の滲透いののち、ハルユキは彼女が何を指しているのかを直感した。

反射的にかぶりを振る。

「だ……………だめだよ、〈あれ〉は使えない。次にあれを片睨したら、僕はきつともう戻ってこれない……………」

〈あれ〉。シルバー・タロウの深部に寄生し、しかし今はライム・ベルの〈シトロン・コール・モードII〉によって種子状態にまで還元されている、眠られた強化外装。

——《災禍の鐘》

ハルユキの言葉に、山吹色の少女はどこか悲しそうな微笑みを浮かべた。

「……あの鐘も、初めから《災禍》の名を冠して生まれたわけじゃないんだよ。沢山、たくさん悲しいことがあって、鐘はかたちを歪めてしまったの」

「かたちを……歪めた……」

「私はあの鐘の片隅で、ずっと待ち続けていた。待ち土が代わるたびに、今度こそって祈り続けてきた。鐘の呪いを解いてくれる人が現れるのを。《あの人》の怒りと悲しみを癒してくれる人を、ずっと待っていたんだよ……」

瓦礫の上からふわりと立ち上がった少女は、ハルユキの目の前にひざまずくと、華やかな右手をそっと傷ついた顔色のアバターに触れさせた。

「あなたなら。《あの人》にとってもよく似ているあなたなら、きつとできる。時間がかかるかもしれないけど、いつかきつと……。——だから、ここで諦めないで。あなたの友達のために、もう一度だけ、立ち上がって……」

少女の姿が、いっそう透明になる。膨大なシルエットへと変わりながら、再びハルユキの中へと戻っていく。

頭の中に、遠く遠く、最後の声。

「……さあ、思い出して、その名前を呼んで……。《災禍》へと歪んでしまう前の、鐘の名前

を……。あなたはもう、それを、知っている……はずだから……」

――不意に、記憶のスクリーンに浮かび上がる光景があった。

《帝城》の中で見つけた、《七の神霊》の白座。北斗七星の六番星《幽陽》の名を滅した金属のプレート。

その一番下に刻まれた、幾つかのアルファベット、あれを見た時、確かに感じたのだ。魂の深いところが小さく疼くのを、まるで、ずっとずっと昔の、悲しい思いでを呼び起こされたかのように。

ずしん、という重い振動が床に伝わり、ハルユキは顔を上げた。

瞬か、その向こうの部屋に、タタムが迫り着いたらしい。次にどんな攻撃でも受ければ、残り数ドットのHPゲージは容易く消し飛ぶだろう。

――今の僕に、タタを止められるのか？ あれほど深く思い詰めたあいつを、どんな言葉で引き戻せるっていうんだ？

再び胸に滴ちそうになる冷たい絶望を、しかし、ハルユキは歯を食いしばって振り払った。

――言葉じゃない。

――気持ちで。気持ちがこもった拳で、僕も、タタも、パーストリンカーなんだ。なら、伝えるべきものも、その手段も、たった一つしかないんだ。

「……ありったけを、ぶつけ合う。最初の時も、そうしたよな、タタ……」

ハルユキは低く騒ぎ、ぼろぼろのアバターを瞬間に立ち上がらせた。ひび割れた装甲の破片が、きらきらと床に落ちた。

怖れも、怯えも、もうなかった。

壁に開いた大穴の奥を見詰め、ハルユキは静かに、記憶の彼方から聴いたその名前を口にした。

「着装……（サ・ディステイニー）」

あとかき

川原健です。二〇一一年最初の一番、「アタセル・ワールド」笑話の巻」をお届けします。思い返せば、一昨年から去年にかけて書いた本のあとかきで、私ひたすら謝り倒して参りました。そこで今年の目標は（あとかきで謝らない）にしよう、と思っただんですが……すみません、いきなり謝らせて下さい……というが、謝ること自体をすでに謝ってますが（笑）。

えー、またも次巻に就いてしまいました！ こめんなさいー いやー、6巻をあんまりきにしてしまった時、「7巻はきれいに終わらせよう」って決意はしたんです。そして珍しくそこそこ細かいプロットも作って、計画とおり！ に書いていたはずなんですが……予想外にタタム君が頑張って下さいまして……（笑）。

で、でも5巻6巻とはとんと出番のなかった彼ですから、がっつり動いてくれたことに作者としてはホッとしています。お話もこれくらい続いてくると、もう（なるようにしかならない）と言いますが、キヤラクターたちの要求に従って進めていくしかないんですよね。このあとかきを書いている時点で、もう次巻の作業は始まっています。今同終わらなかった（対戦）にタタムとハルユキがどのような決着を見出すのか、私もときどきしながらキーボードを叩いています。本としてお届けできるまで、どうぞいましばしお待ち下さいませ！

きて、ここで改めて二〇一一年の懸望などをあらりと書いておこうと思います。

《謝らない》という第一目標にさっそうと失敗してしまつたので（笑）、ともかくも大きなトラブルなしに書き続けることを第一の目標にしたいなあ……いきなり生々しくなってますが……いやでも、このごろ漠然と考えるのですが、へとにかく書き続けること」というのが作家という仕事をする上でいちばん大切な能力ではないかと思うんですよね、自転車レースにたとえれば、障害に決死のアタックをかけるのではなく、次の坂、次のステージを見据えて、アシを残して運転し続ける感じと言いましようか……。それでももちろん、ここ一番のゴールスプリント勝負に出なければならぬ場面も必ず来るわけですが、そのタイミングを見逃さないような気をつけながら、今年もしっかりクランクを回し続けたいな」と思う所存です。

このも巻もかなりギリギリの作業になつてしまい、現在進行形でご迷惑おかけしている担当の三木さん、イラストのHIMAさん、二〇一一年はもう少しいい子ちゃん締め切りになれるよう頑張りますので宜しくお願いいたします！

そして新年、書目から「つづく」攻撃を受けてしまわれた読者の皆様、今年も例年寛大なお心でお付き合い下さいますよう伏してお願ひ申し上げます！！

まだ、二〇一〇年ですが気持ち的には二〇一一年某日

川原礫

遊びではない

天才プログラマー・茅場晶彦



オンライン

コミック
ソードアート・
オンライン



&

コミック
ソードアート・
オンライン



原作／川原 礫 キャラクターデザイン／abec

作画／長十平

「電撃文庫MAGAZINE」(偶数月10日)にて連載中!

「これは、ゲームであっても」

クリアするまで観出不可前
ゲームオーバーはプレイヤーの「死」を意味する
一万人ものプレイヤーが、
その残酷なアスバトルMMO
「ソードアート・オンライン」に
閉じこめられた
しかしその世界も、
最高のソロプレイヤー、
最強の剣士キリトによって、
ついに終止符が打たれる。

中絶とキャンセルが可能な世界
と現実(アス・ガン)と事件から数週間
経ちアバターとして生活しているVRMMO
「アスバレイム・オンライン」で、特殊な経験が待てる
数ヶ月前、史上最大規模のアップデートと共に公開された新マップ、
「浮遊城アイングラッド」で、
その第4層王宮最深部の大木の奥で、毎週午後二時になると現れる謎のアバター、
自身の持つ「最強のオリジナル・ソードスキル」を封印
された様子で、半(半)の対戦(デュエル)を始め、すべてを勝利らしげにしているという。
なんと謎のアバターは、最強プレイヤーのリーファだけでなく、
あの最強の剣士キリトすらも打ち負かしていた。
数々のプレイヤーを倒すも勝利報酬の罰金、
いつしか謎のアバターは「勝利者」と呼ばれるようになる。
リスバットからその一部始終を聞いたアスナも、
早急に「勝利者」へ対面するつもりだが、結果、第一層の壁で敗北してしまう。
しかし、そのデュエルが終わるやいなや、最強者はアスナを自身のギルドに誘うのだった。
文豪的な世界に、たまたま邂逅するアスナ
「勝利者」と呼ばれるほどの剣の達人、そこには、とある秘密があった――

「マザーズ・ロザリオ 編、登場！」

電撃文庫 人気ウェブサイトながらも、
開封後650万PVオーバーを記録した話題の小説！

ソードアート・

最新第⑦巻は、電撃文庫にて

153頁 1600円

2011年4月10日発売

！

特報!!! 「アクセル・ワールド8」は
2011年初秋頃発売予定!!!

●川原 礫著作リスト

- 「アタセル・ワールド――型可動の雄姿――」 (電撃文庫)
- 「アタセル・ワールド2――紅の暴風雨――」 (1)
- 「アタセル・ワールド3――夕陽の暗黒者――」 (2)
- 「アタセル・ワールド4――蒼空の魔術――」 (3)
- 「アタセル・ワールド5――星雲の誇り編――」 (4)
- 「アタセル・ワールド6――沙汰の神子――」 (5)
- 「ソードアート・オンライン――アインタクト――」 (6)
- 「ソードアート・オンライン2――アインタクト――」 (7)
- 「ソードアート・オンライン3――アインタクト――」 (8)
- 「ソードアート・オンライン4――アインタクト――」 (9)
- 「ソードアート・オンライン5――アインタクト――」 (10)
- 「ソードアート・オンライン6――アインタクト――」 (11)

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。



おて宛

〒160 8326 東京都新宿区西新宿4-34-7
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「川原 礪先生」係
「HIMA先生」係



電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで“小さな巨人”としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また啓蒙の魁として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレタラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギン・ブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってもよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープンナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changing Times/Changing Publishing)時代は変わって、出版も変わる。時を変えるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに得かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

アクセル・ワールド1——黒雪姫の帰還——

川原 礫
イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-065111-2

「黒雪姫」と呼ばれる少女との出会いが、デブでいじめられっ子の運命を変える。ウエブ上でホリスティック人気を誇る作家が、ついに筆塚大賞（文芸界）を受賞——

カ16-1 1716

アクセル・ワールド2——紅の暴風姫——

川原 礫
イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-065076-0

デブでいじめられっ子の少年・ハルユキの人生は、黒雪姫との出会いによって一変し、そんな運命のもとに、「お兄ちゃん」と呼ぶ異質な少女が現れる。

カ16-3 1775

アクセル・ワールド3——夕闇の駭客者——

川原 礫
イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-065071-1

「ゲームオムニバース、有田先生——いえ、クルバリータらウー」黒雪姫不在の中、スクールカーストの頂点に立った新人生、圧倒的な能力の持ち主、ハルユキは現れ——

カ16-5 1834

アクセル・ワールド4——蒼空への飛翔——

川原 礫
イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-065070-4

「ここから、もう一度跳い登ってみせる。僕はもう、ただのりいて歩くのはやめたんだ」翼をもがれたシルバークロウとハルユキが、ついに復活する——

カ16-7 1899

アクセル・ワールド5——星影の浮き橋——

川原 礫
イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-065071-1

とある日、ハルユキは新たなゲーム・ステータス出現の予兆を知覚する。（学園）ステージ、そこに現れたハルユキは、歴史的なゲームイベントを体験する——

カ16-9 1953

アクセル・ワールド6―浄火の神子―

附録 神

イラスト／H・M・A

ISBN 978-4-04-879266-4

〈災禍の國〉に侵されていたハルヒキは、黒龍殿以外の大王から、〈浄火の神子〉を下される。その鍵を握るアバターは、意外な場所に隠れていて……

カ16-11 2018

アクセル・ワールド7―災禍の鍵―

川原 礫

イラスト／H・M・A

ISBN 978-4-04-879276-4

〈神域〉に閉じ込められた〈シルバー・クラウド〉。脱出不可能と思われる中で、ハルヒキは不思議な力を見る。それは、〈災禍〉にまつわる二人の物語……

カ16-13 2002

ソードアート・オンライン2 マイ・リミッド

川原 礫

イラスト／あさのあきほ

ISBN 978-4-04-867760-4

クリアするまで脱出不可能、ゲームオーバーは死を意味する……。仮想空間は、ゲームであっても逃げてはならない。第15回 電撃大賞〈大賞〉受賞作が動く大作。

カ16-2 1748

ソードアート・オンライン2 マイ・リミッド

川原 礫

イラスト／あさのあきほ

ISBN 978-4-04-867925-0

アインクラッドでは格闘い。〈リストア・イマール〉の少女・シリカが窮地に陥ったとき、彼女を助けたのは、誰性も分からぬ謎の金髪い騎士のキリトだった。

カ16-4 1804

ソードアート・オンライン3 フェアリー・ダンス

川原 礫

イラスト／あさのあきほ

ISBN 978-4-04-868193-1

謎のマスゲームをANDをクリア、現実世界に戻ってきたキリト。しかし、攻略パターナードあり、永遠の闇いをたてた悪いムアスナはいまの常識いすあるす……

カ16-6 1862

ソードアート・オンライン4
フェアリー・ダンス

川原 礫

イラスト／ 日比野 龍

ISBN978-4-04-066451-1

MMO・FANTASY 内へ、アスナを救うため口ダインしたキリトは、ついに「仮想現実」までたどり着く。しかし彼の秘密を、彼を真にじた少女・リーファが知ってしまった……

カ16-8 824

ソードアート・オンライン5
ファンタム・バレット

川原 礫

イラスト／ 日比野 龍

ISBN978-4-04-066452-8

〈S.A.O〉事件やっぴー。次にキリトを待ち受けるのは、純と銀葉のVRMMORPG「エンタイル・オンライン」。突然発生した謎の殺人事件を追うが…… 新章突入！

カ16-10 1385

ソードアート・オンライン6
ファンタム・バレット

川原 礫

イラスト／ 日比野 龍

ISBN978-4-04-070125-7

〈S.A.O〉に口ダインしたキリトは、純が支配するこのゲームで唯一〈実用〉を駆使し、〈自由の息〉を胸に運ぶ。そして決断ついに〈実用〉が彼を救う……

カ16-12 2046

幕末魔法士—Mage Revolution—

田中 陽平

イラスト／ 桜本 麗枝

ISBN978-4-04-069323-4

一件の魔導者が始めた魔術の闇、謎を巡る魔法士・久世作雄が、激動の時代を舞台に繰り広げる幕末ファンタジー。 第18回電撃小説大賞〈実用〉受賞作。

カ23-1 1994

幕末魔法士II—大坂鬼譚—

田中 陽平

イラスト／ 桜本 麗枝

ISBN978-4-04-070211-4

大坂の町に現れた人喰い鬼。魔術の闇とが露われ、魔法士の伊藤も連われる身。影人捕縛のため学生騎士団も動き出す。伊藤と志鳥は真摯な情に満ち出すが……

カ23-2 2087

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞



自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー！

上遠野浩平(『フー・ボ・ノブは笑わない』)、高橋伸七郎(『灼眼のシャナ』) 成田良悟(『バカカーノ』) 支倉凍砂(『狼と香辛料』)、有川 浩・榎花スクモ(『図書館戦争』)、川原 雅也(『アクセル・ワールド』)など、常に時代の一躍を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。新時代を切り開く才能を毎年募集中心

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

- 賞(共通)
- | | |
|----|------------|
| 大賞 | 正賞+副賞100万円 |
| 金賞 | 正賞+副賞 50万円 |
| 銀賞 | 正賞+副賞 30万円 |

- (小説賞のみ)
- | |
|---------------|
| メディアワークス文庫賞 |
| 正賞+副賞 50万円 |
| 電撃文庫MAGAZINE賞 |
| 正賞+副賞 20万円 |

編集部から選評をお送りします！

小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を
通過した人全員に選評をお送りします！

詳しくはアスキー・メディアワークスのホームページをご覧ください。

<http://asciiw.jp/award/taisyo/>